

……。もしひよつとすると私があるんで、さびしがつて、本國に歸りやしないかなんて、心配してるとんです。矢張、蟲が知らせたんですな』

『だつて、さびしくなつちやつたんですもの……。いつまで、こんな異郷にさまよつてゐたつて爲方がないやうな氣がしたんですもの。矢張、女ですからね』

かう言つて、政代はあまへるやうな艶やかな態度をして、凝とKの方を見詰めた。その眼には、Kの心を惑はすに足る十分の美しさを持つてゐることを政代自らも知つてゐた。

『それで、どうだつたんです？ 北京の方は？』

『それは成功でしたの……。お蔭で、一月、二月は遊んでゐられるんです。しかし、貴方はらつしやらないし、季節は寒くなるし、まご／＼してゐると、今にどんな眼に逢ふかも知れないと思ひましてね……』

『で、もう、すっかり大連を立つて來たんですか？』

『え、荷物も、手紙さへやれば、内地に送つて貰ふやうに、荷づくりをして、宿に置いて來たんですの』

『それは残念ですな』

かう言つたが、Kは考へて、『しかし、本當にいつまでこんなところに残つてゐたつて、爲方がないには爲方がないですね……。こんなところにゐるよりも、東京に行けば、何んな好運が待つてゐるかも知れませんか』

『好運なんか、何處へ行つたつて待つてなんかるはしませんけどもね』

『そんなことはありませんよ。貴方なんか、いくらだつて、好運が待つてゐるにきまつてゐますよ』

『さう見えますかね、これでも？』こんなことを言つて政代は笑つた。

二人は暫し黙つた。しかし、それは互ひの心を捜すやうなものであつた。その沈黙は、互ひに言葉を交はしてゐるよりも、より以上に、互ひの心と心とを惹附けた。政代はじつと見た眼を男から他へと外して了つた。

暫くして政代は訊いた。

『貴方、よく此處にお出でになるの？』

『よくツて言ふほどでもないけども、知つてゐるには知つてゐますよ』Kはかう言つて、『滿洲では、こんなところにも遊びに来るより他、しやうがないんですからね』

『さうでせうね……。しかし、それにしては、もう少し立派な設備が出來さうなものですな』

『でも、これでも、好くなつたんですよ。もとは小さな旅舎が一軒あつたきりなんですから……』
こんな話をしてゐるが、Kは、急に、

『貴方、もう湯に入つた？』

『え……さつき』

Kは笑つて、

『もう一度入りませんか？』

『だつてね？』

『湯のおつきあひは、ちよつと無理かな』かう言つて、Kは洋服をドテラに着更へて、『何れ一つ、湯に入つて、暖つて来るかな。もう満洲も寒くなりましたな。内地なら、十二月の初め頃の寒さですね？』
出て行かうとしたが、また戻つて来て、

『勿論、食事はすんだでせうね？』

『私？』

『え』

『すみました』

『さうだらうな、もう……。しかし、湯から出て来るまでに何か、女中にさう言つて頼んで置いて下

さいな。何か旨いものを二品か三品……』

『よう御座んす』

『それに、酒を忘れてはいけませんよ。一番よい酒を——』

かう言つて、Kはそのまゝ廊下へ出て、足音高く、曲つた階梯を湯殿の方へと下りて行つた。
手を鳴らすと、いくらか年の老つた、此處に長く居馴れてゐるらしい脊の高い女中が入つて来た。
Kの言つたことを頼んだあとで、

『姐さん、此處には、もう長くゐるんですか？』

『え、もう三年ほど』

『そんなに長く……。随分さびしいでせうね』

『馴れると、さうでも御座いませんの……。唯、寒いのが困りますけども……』

『さうでせうね。寒いでせうね。炬燵に入つてでもゐなくては、凌げないやうでせうね』

かう言つたが、すぐあとをついで、

『Kさん、よくいらつしやるの？ 此處には？』

『え、よくいらつしやいます。奉天の歸りなどには、いつも、寄つて泊つていらつしやいます』

『やう——』

『何しろ、お忙しい方なんですからね。長く、御滞在になつてゐらしたことも御座いませんけども……。それでも、いつかは、店員の方と一緒に、大連の藝者衆を大勢伴れていらしたことが御座いました。何でも昨年の春で御座いました。その時、その店員の中に、Mさんといふ方が御座いましたね……』

『あ、Mさん……』

『御存じですか、そのMさんに、その藝者衆の一人が惚れたとか、何うしたとかで、その藝者とMさんの顔に墨を塗るとか何とかで、大騒ぎをしたことが御座いましたよ』

『へえ……』

『元氣なお方ですね、あのMさんといふ方も……』こんなことを言ひながらその女中は出て行つた。

その夜のことは、今でもはつきりと政代の眼の前にあらはれて見えた。Kが湯から出て来て其處に坐つた時には、もう酒や、盃や、料理などが一杯に餉臺の上に並べられて、その年を取つた方の女中が、馴れた調子で徳利を取上げては酌をした。

『まア、およろしいぢや御座いませんか』など、言つて、成るだけ控えるやうにしてゐる政代の盃にも酒を注いだ。

Kは始めて軽い調子で、其女中に、政代のことを話したり、舞臺で獨唱をやつたことを吹聴したり、北京に人形を持つて行つた話を大袈裟に話してきかせたりしてゐるが、次第に真面目な調子になつて——不思議に思はれるほど真面目な調子になつて、男女の問題だの、狹斜街の女の話だの、家庭の妻子の問題などを頻に話し始めた。Kの説では、どうしても女は家庭的であらねばならないもの、さうでなければ、何うしたつて、男の玩弄品にならなければならぬもの、いくら新しい女だからと言つて、とても男と同じやうに爲たい放題のことをしては生存してはゐられないものといふのであつた。始めは政代も好い加減にしていきてゐるが、次第に、その話が高調されて行くので、終にはそれに調子を合せずにはゐられなくなつて行つた。

『だつてそれは壓制ですね……』

かうかの女が言ふと、

『壓制だつて、何だつて爲方がない。男女の間は、さういふ風に出来てゐるのだから……』

『いゝえ、それは舊式な見方です。さういふ風に、女が出来てゐるのではありません。これまでの女が意氣地がなかつた爲めに、さういふ風に男から思はれて了つたのです。それが、男女問題では、一番先に改良しなければならぬことなんです』

かういふ風に政代は話した。かの女は決して負けてはゐなかつた。後には、Kの方から折れて、

『まあしかし、それは話だ……。無論、もつと細かく入つて行けば、それ以上の交渉が男女の間にあるにはきまつてゐるけれど……。』など、言つた。

それにしても、政代はその夜、何を話したのであらうか。聞き囁りと言へばそれに違ひなかつたけれど、而もとても傍に坐つてゐる女中にはわかりもしないやうなハイカラなことをかの女は饒舌り出しはしなかつたか。否、K自身ですら、かの女の世間に博く戀の道に深いのに感嘆するやうな巧いことをかの女は話しはしなかつたか。政代はその時最初の夫であつたSにわかれた時のことなどを話したことを思ひ出した。子供にわかれる辛さもあつたが、それ以上に、本當の意味のある生活をしたかつたことなどを話したことを思ひ出した。

『ぢや、貴方は今でも本當の意味ある生活は家庭に求めることは出来ないと思つてゐるんですか？』
その時眞面目でかうKが訊いたことを政代は續いて思ひ出した。

政代は言つた。

『え、さう思つてゐます。今でも、今のまゝの家庭では、とても本當の生活は求めることは出来ないと思つてゐます』

『ぢや、夫から後、家庭以外に本當の生活は求められましたか？』

『さア、さう言はれると、はつきり求められたとも言はれませんね。矢張、今でも辛い辛い思ひをし

て、その本當のものを求めてゐますね。でも、かういふことだけは言へますわ。家庭にゐた時よりも、本當に近いことはしてゐると思ひますわ。生効があるといふ境まではまだとても行けませんけれど、あとなつても後悔しないだけの生活はしてゐると思ひますわ』

『本當にさう思ひますか？』

『え、本當に——』

『本當なら、えらい！』

かうKは感心したやうに言つて凝と政代の顔を見た。

『それで、これから、何うしやうツて言ふんです？』

Kは一步を進めた。

『何うしやうツて、別に——』

『矢張、放浪してゐるやうツて言ふんですか？』

『別に、放浪しやうとも思つてゐないわ……。だから、今度も、東京へ歸らうと思ひ立つたんですの……。いつまで、こんなにして皆さんのお世話になつてゐたつてしやうがないと思ひますもの』

『東京に行つたつて、矢張、同じぢやないですか。矢張、放浪ぢやないですか？』

『さうね、放浪かも知れないわね……。でも好いの。東京に歸れば、助けて呉れる友達がありますか

ら——』

『友達！ 友達！』

とKはまた突込んで、『貴方なんか、男の友達なんか、とても出来つこはないでせう？』

『何うして？』

『貴方の周囲に集まる男性で、終ひまで友達で甘んじてゐるものは恐らくはないでせうからね』

『さうでせうかね？』

『さうですとも……。それは私は誓つて断言する。友達のやうな顔をして、貴方の傍に寄つて行つた

つて、一皮むいて見れば皆な狼でさ』

『ぢや、貴方は？』

かう政代の方からも突込んで行つた。

『私だつて、さうですとも……。その例に洩れやしませんよ。いつ、後尾しっぽを出すかわかりやしません

よ』さつき女中が立つて行つてそここにゐないので政代に酌をして貰つて、『だから、言ふんです、家庭は、それは、本當でない、無意義だ……。本當につまらんところだ。場合に由つては、人間の魂を腐らせて

了ふやうなところだと言つても好い。しかし、いくらつまらんところでも、尠くとも、女の避難所としては、家庭でなくてはならない。家庭でなくては、女は落着いてゐられない。その周囲に集まつて来る男性を防ぐことが出来ない』

『いゝえ、それは出来ませ』

かう中途を政代は遮つて言つた。

『まア、お聞きなさい。たとへ、出来ても、貴方のやうにならなければならぬ。それは貴方の心持はよくわかる。さつき言つた言葉でよくわかる。本當に生きたいために、家庭といふやうな避難所にかゝれてゐるに、かうして狼の中に出て來てゐる心持はそれでよくわかる。一面では勇ましいことのやうにも思はないでもない……。しかし、結局は、女は、矢張、家庭ですぜ。何うしてもそこに落ちて行かなければなりません。それは確だ、確なことだ……。あの妾だとか、圍者だとかいふものも、狼の襲撃に堪へないで、假に、家庭をつくつたと言へば言へる形ですからな』

『それはさうかも知れませぬ。男の方から見れば、屹度、さういふ風に見えるに違ひありませんね。しかし、女の方から見ると、その狼は、煩い狼ではありますけれども、怖い狼ではありませんものね。私なんかでも、だから家庭の避難所までつくつて、その中に遁れやうとは思ひませぬ……。中には、狼どころか、やさしい羊もゐれば、忠實な犬もゐるんですもの』

『ふむ、さうかな。女の方から言へば、さうかも知れない。ことに、貴方のやうな美しいマドモアゼルから言へば……。ふむ、成程、それはさうだらう。そこから、かうした放浪の運命が生れて来たんだらう』かう點頭くやうに言つて、Kは盃の酒を呷るやうにした。政代はそれに酌をした。

これに盡きず、その夜はいろ／＼なことを話したことを政代は思ひ出した。Kは随分無遠慮な物の言ひ方をした。はつきりさうとは言はなかつたけれど、かの女の經て來てゐるやうな生活は、不健全で、不道德で、決して正しいものではないといふやうなところにまで話を持つて行つた。それで、貴女は子供のことを思ひ出しはしませんか』暫く黙つた後で、Kはかう言つて政代の顔を見た。

『別に、思ひ出しもしませんね』

さつきのやうに思出したことは、夫は傍にそつとして置いてかうかの女は平氣を裝つて見せた。

『思ひ出さないことはないでせう？』

『だつて、思ひ出したつて、しやうがありませんもの。さういふことは、もうちやんとその時に覺悟して來てゐるんですから』

『それはさうだらうけれど、思ひ出さないつて言ふことはないと思ふがな……。いくら男を對象にし

て生きてゐる女でも、矢張、女は女なんだから……』

『だつて、私はかう思ひますもの。後悔する位ならしない方が好い。一旦さうと思つた以上、進みはするが、退きはしない……。これが私の主義なんですもの……』

『ぢや、貴方は主義で動いてゐるといふわけですか。いくら本能の要求が熾でも、主義のためにそこを押へることが出来るといふんですか？』

『さうぢやないわね……。さういふ風に單純ではないわね』政代は深く考へるやうにして、『何と言ふたら好いか、ちよつと私の心持は言ひあらはしにくいけれど……。まア、さうね、かう言へば好いわね、成るだけ、利那的に物を考へるやうにしてゐると言つたら好いのね。だから子供のことなんか、考へることがあつたにしても、すぐ忘れて了ひますわ』

『ふむ成程、利那的に物を考へる？ さうかな、成ほどさう言へば好いのかも知れないな。つまり、始終、張詰めて、活躍してゐなければ承知が出来ないつていふことなんですな』

いくらか政代の心の真相に觸れたといふやうにして、Kは額に手を當て、深く考へるやうにした。『そしてそれは貴方の美貌といふことも密接な關係を持つてゐるわけですか？』

『それは、さうかも知れませんが。自分はよくわからないけども』

『ふむ』

Kはまた深く考へ込んだが、『所謂、戀が生命といふ奴です。一體女は大抵それなんだ。けども、しかし多くの女は家庭と子供のために縛られて、その本能を十分に發揮することが出来ないんだ……。また、一面、その家庭と子供が、さうした女の戀を縛るために、この人生が旨く圓滿に治つて行くといふ形もあるんだ……。しかし、その中に、選れたと言つて好いか、それともまた捨てられたと言つて好いか、それに外れた女性があるんだ。貴方なんかその一人かも知れませんか』

『さうかも知れませんか』

かうした二人の話は、傍にゐる女中などには竟に解らなかつたやうに見えた。女が来て待つてゐる。そこに、一汽車おくれて男がやつて来る。唯、普通の傭曳としか思つてゐなかつたのに、これはまた何といふ座敷だらう。何といふ光景だらう。男も真面目なれば、女も真面目、互ひに議論めいたことばかり言ひ交して、話は容易に盡きやうともしなかつた。女中は酒を取りに何遍となく階下へと下りて行つた。

小形の金時計をKは出して見てゐた。

『何時？ もう——』

『十二時五分前——』

『もうさうなる？ 早いわねえ。いつの間にさう時間が経つたんでせう。何うかしてゐるんぢやない、その時計？』

『そんなことはない』

かう言つて、Kは時計を帯の中に藏つた。かれもかなり酔つてゐるらしかつた。政代は政代で、成るだけ盃は受けやうに、受けても酒は飲まないやうにこれまでして來てゐたにはるたけれども、しかも、いつの間にかそれとなしに酔つて了つたらしく、夥しくセンチメンタルな気分になつてゐるのがかの女自身にもわかつた。

さつき女中が階下を下りて行つた時、『だつて、私だつて、女ですもの、それは悲しいことはありませんとも——』かう言つてじつとKの顔に見入つた時のことを政代は思ひ出した。いつとなしに、また何といふ理由なしに、涙が體中に漲りわたつて來るやうなのをその時かの女は感じた。

Kも恐らく、かの女の眼に、一杯に、溢れ落ちるばかりに溜つて來てゐる涙を、見落しはしなかつたに相違なかつた。

『……………』

『……………』

かれ等は深いある感じに打たれたやうに、暫しの間、唯黙つて坐つてゐた。

『でも、ね、Kさん』やがてかう言ひ出した政代の聲は嗚咽のやうであつた。『これでもそんなにわるい女ぢやないんですよ。やさしい心持だつて持つてゐる女なんですよ。世間の人は、……』かう言つて堪らなくなつたやうに涙の堰を破つて、『いろんなことを……恰で莫連女か何かのやうに言ひますけども、皆な……皆な……誤解なんです……。私は、私は……そんな悪い女ぢやないんですから——』

『それはさうですとも！』

かうは言ひながらも、Kは思ひ迫つて來たといふやうに、涙の溢れ出して來るのを手で拂つて、『僕は……僕は、決してさうは思つてやしませんよ。本當だとも……貴方はわるい女ぢやない、決してわるい女ぢやない』

『でも……世間では、世間では——』

涙に碍へられて、政代は十分にそれを言葉に移すことが出来なかつた。

『好いですよ……好いですよ……世間なんか、何うでも好いちやありませんか。誤解したい奴には、誤解させて置くさ』

『私だつて、私だつて……そんな女ぢやないんです』かう政代はすすり上げた。

『まア、好い……。或は、或は』Kは言ひにくさうに、『僕もわるいことを言つたかも知れない。つ

ひ、お心安立にまかせて、氣にさはるやうなことを言つたかも知れない……。もし、言つたら、謝さなければならぬ』

『いゝえ、そんなことぢやないんです』慌てゝ政代はそれを押へて、『貴方になんか何んと言はれたつて好い……。本當のことを言つて戴く方が好い……。貴方には始めてお逢ひした時から、さう思つてゐたんですから……』

『でも、失敬なことを大變言つた——』

『いゝえ、そんなことはないんです……。それで言つたんぢやないんですの。唯かうして一人で、こんなところにまでさまよつて來てゐると思うと、堪らなく自分が可哀相になつて來たんですの……。』かう言つて又悲しくなつて來たといふやうに右の手を眼に當てたが、それを再び放した時には、いくらか笑顔になつてゐるのをKは見た。

『まア、好う御座んさ。時間なんかいくら経つても……』

かうKはつとめて氣を落ち附かせるやうにして言つた。そこへ、女中は銚子を持つて入つて來た。

『ヤア、もう澤山だ。酒は！』

『でも、まア』

『それに、もう遅いんだからな。もう十二時だ。姐さんなんか迷惑だらうな、こんなに、長く話し込んで……』

『いゝえ』

かう言つて、莞爾しながら女中はそこに坐つた。

『随分、いろんなことをよく饒舌りましたね!』

『本當ねえ』

かう政代はKに合せた。

『私なんか、丸でチンブンカンブン……。何を仰しやつてゐるんだか、何を話してゐらつしやるんだか、ちつともわかりませんでした……』かう言つて女中は笑つて、『喧嘩でもなすつてゐらつしやるんぢやないかしらとも思ひましたよ』

『さうかね』

Kは笑つて、『何アに、あれだつて皆な男と女の話さ』

『それはさうでせうけども、男と女の話はわかつてゐますけれど、何が何だかちつともわからないんだから不思議ですわね。矢張、學問のある方は、違ひますのね。女中は今更のやうに不思議な女を見る

といふやうにして、じつと政代の方を見詰めた。

『矢張、男が女を口説くにしても、口説き方が違ふと言ふのかね?』

Kはかう言つて大きく笑つた。

『いゝえ、それは、さういふ話ぢや御座いますまいけれど……』

『ぢや、何ういふ話だつたと思ふね、君は?』

『それは、高尚な話か何かでしたらうけれど……』

Kは笑ひ出して、

『高尚な話でも何でもないんだよ。ね、奥さん』わざとかう政代を呼びかけて、『矢張、男が女を口説いたり、女が男を口説いたりしたやうなもんですね? さうですね』

『それもさうかもしれないのね』

かう政代も笑つて見せた。

『まア、奥さん、いやだ。あんなことを仰有つて。それよりか、さつきなんか、何うかなすつたんぢやないかと思つてハラ／＼してゐましたよ』

『随分、大きな聲をしましたものねえ——』

『貴方だつて、むきになつて、何か言つてゐらつしやるんだもの』かう女中はKに向つて言つて、更

に銚子を出して、『もう一つ、いかゞ。熱いのが出来ましたから……』

『ヤ、もうよす。酒はよす。何か、漬物か何かで、飯を食ふ……。少しお腹が減つて来た』

『まア、好いぢや御座いませんか』

『でも、もう酒はよす。本當に飯を持つて来て呉れ』政代の方を向いて、

『貴方は何う？』

『私も、もう、何だか酔つちまひましたの……。イヤに、センチメンタルになつて頭がぐらくしま

すの……。』かう言つて政代は考へて、『私泣上戸かしら？』

『何うして？』

『だつて、何だか、悲しく、悲しくなつて、涙ばかり出て来るんですもの。本當に、しやうがないのね』

『興奮してゐるんですね、矢張……』

『餘程、飲んだのね、酒を……。私も、もうお茶の方が好いわ』

『かしこまりました。ぢや、お香の物か何かで、御飯ね』

かう言つて女中は立つて行つた。その姿の廊下に消えるを待つやうにして、Kはいきなり政代の手を把つた。そしてそれを堅く握つて振つた。政代も堅く握り返した。

その一夜を境にして、かの女の生活が全く異つた方向を取つたことを政代は思ひ出した。内地に歸るべき筈であつたかの女がそのままそこにある期間滞在しなければならぬ身となつたのであつた。

『ぢや、さうしてお呉れ。是非、大連に行つてこなければならぬ用事がまだ澤山あるんだから……その用がすんだら、京城と一緒に、何ういふ風にでもするから……』

かうKが言つたに對して、政代は、

『え、よう御座んすとも。いつまでも此處に待つてゐますとも。唯さびしいから一週間に一度位来て下さるわね』

『それは来る……』

かう言つて、そのあくる日、朝の九時の汽車で、Kは大連に向けて立つて行つた。その時、政代は見送りに停車場に行つたが——停車場の驛長や助役は不思議な顔をしてかの女を見てゐたが、しかも、かの女は平氣な顔をしてKと並んで歩いて行つた。否そればかりではなかつた。さながら長い間の旦那でもあるかのやうに、身のまはりのことを注意したり、途中のことを氣づかつたり、プラットホーム迄出て行つて、をりからやつて来た汽車の窓のところとその明るい美しい顔を見せたりなどした。

汽車が動き出した時、

『ぢや、來週の火曜ね？』

かう言つて、そこに立つて、やがて動き出して行く汽車の窓のところをいつまでもくく白く見えてゐるKの顔を遠く見送つた。

歸りは、矢張、Kを見送りに行つた若い方の女中と一緒に旅舎の方へと歸つて來た。昨夜通つた時とは違つて、路もさう大してわるくなく、滿洲の曠野もそれほどさびしくなく、旅舎もそれほど遠くないのをかの女は見た。

かの女は元氣が好かつた。竝んで歩いてゐる女中を捉へて、少し長く滞在してゐなければならなくなつた話などをした。

女中はちよつと驚いたやうにして、

『ぢや、東京の方へは、當分お歸りにならないのですか？』

『いゝえ、歸るには歸るんですけどもね、少しばかり、用事が出來たもんだから……。此處に暫くゐて、その用事の成行を見て行かなければならなくなつたもんだから……。』

『さやうですか。それは好う御座んすね。賑やかになつて……。』

『また、いろ／＼お世話にならなかりやならないんですよ。』

『いゝえ、どう致しまして……。今は静かですから、御滞在には好う御座いますわ』

Kが言置いて行つたと見えて、やがて政代は二階の一室から、ちよつと外へは見えないやうな瀟洒な六疊の離座敷の方に伴れられて行つた。そこには、松や檜の間に巧に石をあしらつた小さな庭があつて、午前の日影が山茶花の紅く白く咲いてゐるのを明るく印象的に、あたりに際立たせてゐるのを政代は目にした。

『好い室があるのね。外から見ても、こんな離れがあるとはちよつと思へないわね』

『さうでせう。此處ならちよつと好いでせう。奥さんなんかのゐるのには、持つて來いつていふ室でせう？』案内して來た年を取つた方の女中は、こんなことを言つて笑つた。

『さうね、好いのね』

『此處なら、表の方の客とは、丸で離れてゐますから……。』こんなことを言つて、女中はかの女の身のまはりのものの、茶器だの、火鉢だのを其處に運んで來た。

政代は靜かに日を送つた。幸に天氣は好く、空は美しく碧に晴れて、内地で言へば、小春日和といふやうな好い日が續いた。庭の隅に葉は霜に枯れて、花だけ黄く咲き残つてゐる菊の花などがあつたが、

それを見ても、東京の郊外のことなどが思ひ出された。

次第に、この旅舎の内部のさまなども政代にはわかつて来た。主人と言ふのは、京都あたりのある町の大きな旅舎の次男で、ちゃんと妻子もある身であつたが、その頃大阪の北の新地で棲を取つてゐた今の上さんと深くなつて、それでそつちは投げ出してこの満洲の地へとやつて来たといふことであつた。その上さんは、もう四十を越してゐるので、さう際立つて美しいといふ風ではなかつたけれども——わざと地味にしてゐるので、さうした昔の稼業のあとはつきりとは残つてゐなかつたけれども、夫でも、さう聞いて見ると、何處かに艶な、如才のない、言ひ廻しの旨いところがあつた。年を取つた方の女中の言ふところによると、此處にこの旅舎を始めた頃には、その經營も樂ではなかつた上に、内地からの引戻し運動が熾んだつたので、上さんも並大抵の苦勞ではなかつたといふことであつた。それを何うやら斯うやら、これまでにして、旦那にも内地に思ひを残させないやうにしたのは、全く上さんの辛抱強い、熱心な眞情の結果であるといふことであつた。『何でも、さうで御座いますけれど、辛抱が肝心で御座いますねえ。男と女の中などでも、好い時ばかり好くつて、わるい時はすぐ離れて了ふやうでは、それでは際限が御座いせんから、いつまで行つたつて身の固まる時が御座いせんから』その女中は、こんなことを言つて、心からそれを自分の閱歴にも當嵌めたかのやうにして、その上さんの眞情がその旦那をこの地に引き留めた話をした。

『私など知りませんが、一時は、内地に歸ると言つて、何うしても旦那は言ふことをきかなかつたさうですから。それはその筈です。内地には、奥さんも子供もあるんですからね……。それを、あのお上さんは、眞情一つで引留めたのださうです』

『でも、そんな風なところは、ちつとも見えないぢやないの？』

『今ではさうで御座いますけれど、あれで五六年前までは、中々さうぢやなかつたんださうですよ』
こればかりではなしに、後には、その上さんの話に雜せて、自分の經て来た男の話などをその女中はした。お増と呼ばれたその女中は、随分いろ／＼なことをして來てゐるらしかつた。今でも、ある男からつけ覗はれてゐるために、そのためにこの満洲まで落延びて身を隠してゐるらしかつた。

『男に執念深く追ひ廻される位恐ろしいものは御座いせんね』こんなことを言ふのをきくと、もう四十を越したかと思はれる年で、またさう大して美しいとも思はれない容色で、さうしたことを言つてゐるのが可笑しいやうにも、不思議のやうにも思はれた。何處に行つても、色戀の世の中だ。また、何處まで行つても男と女の仲の話だ……。かう政代は思はずにはゐられなかつた。と、今度は、その山形生れだといふ若い方のお雪といふ女中のことが思ひ出されて來た。それも矢張、男のことで、この遠い満洲までやつて來てゐるのではないか。今でも、内地にゐるその男から一月に一度か二度やつて來る手紙を唯一の樂みにしてかうして働いてゐるのではないか。かう思ふと、政代は不思議な氣がした。自分

も矢張その群の一人で、知らずに異郷に彷徨つてゐるのではないかといふやうな氣がした。

ある時は、その若い方の女中のお雪が、その男にやる返事の手紙を書いて貰ひに政代の許にやつて來た。しかしお雪とて、丸きり字が書けないのでもなかつたけれど、いつもは自分で書いてやつてゐただけれど、その時は、それ以上に、その話も聞いて貰ひたかつたし、それについての政代の判斷も聞かして貰ひたかつたので、それでわざ／＼やつて來たのであつた。お雪はかなり詳しい話をした。

『でも、その女の方に、男の心は行つてゐるんぢやないかね？』

かう政代が言ふと、

『いゝえ、そんなことは決してないんです。そんな人ぢやないですから……。何年離れてゐても、二人の仲は壊れないやうにちやんと成つてゐるんですから……。その女は何でもないんです』

『でも、お前さんの話をきいて、此手紙を讀んで見ると、何だかさういふ氣がするけどもね……。それは、此方を思つてゐるやうには書いてあるわね。しかし、とても、自分は駄目だ……。もう何も彼も出來ない……。その心の打撃のために、何もする氣が出て來ない。かういふ風に書いてあるわね。それがをかしいと私は思ふんだけども……』

『それは大丈夫なんです。一體氣の弱い人なんですから……。』政代の言つたやうにさういふ風にきめて了はれるのを何よりも恐れるといふやうに、また、さうきめられて了つては、折角縫つてゐた力綱をブツリと根元から切られたと同じだといふやうに、お雪は容易にそれを承認しやうとはしなかつた。

『それで、金は度々送つたの？』政代はかう改めて訊いて見た。

『何うせ、こんなにしてゐるんですから、思つたやうなことは出來はしないのですけれど……。』さうしたお雪の口裏には、自分の力一杯だけには、金も送つてゐるといふ形が歴々とあらはれて見えてゐた。否、給金などを、つとめて貯蓄して、ある額にまとめては、絶えず内地の男の許へ送つてやつてゐるらしいことも、話をきいてゐる中に、次第に此方に飲み込めて來た。政代には滅多なこととも言へなくなつた。その男の喰物になつてゐるながら、そのために、かうした異郷に漂泊する身となつてゐながら、しかもその男を憎むことが出來ず、また離れることも出來ない女のことを考へると、單に普通に面白さうに笑つたり、冷靜に判斷したりすることはかの女には出來なくなつた。政代はお雪の顔を見詰めた。

『さうね……。何うしても、さういふ風になるものね。何方かで思ふと一方はその反對に、冷靜になつて行くものね。だから惚れた方の身になると、随分辛いものね……。しかし、またかういふところがあるにはあるわね。此方で思つてゐるんだから、眞面目な、本當なところは何うしても此方にあるといふ

處はあるわね。その證據には、色戀は惚れられるよりも惚れる方が好いッて言ふからね。熱心になれるだけでも、惚れた方が好いのかも知れないからね』後には政代はこんなことを言つた。

お雪は書いて貰つた手紙の禮を言つたあとで、

『でも、もう一年すれば、何うせ歸るには歸るんですから……』

『さうね、離れてるて、いくら思つたつて無駄ね。其時までは、落附いて働いてる方が好いのね。歸つてから、何うにでもなるもの……』

『本當ですよ、奥さん』

かう言つたお雪の眼には、涙が溢れさうになつてゐた。政代もつひ誘はれて何となく悲しくなつて來るやうな氣がした。

一室に閉ぢ籠つたり、温泉に入つたりばかりしてゐられないので、天氣の好い日などには、そこらをつぶら／＼歩いて見たりすることもあつた。ある時は、停車場を通り越して、ずつと向うに、支那の民家が楊柳の中に隠見して見えるあたりまで行つた。またある時は、それとは全然反對な方向を取つて北へ北へと歩いて行つて見ることなどもあつた。始めはそれと氣が附かなかつたが、次第に駱駝の脊を並

べたやうな山が、碧い空にレリイフか何ぞの様に浮き出して連互してゐるのが目に附き出した。

『面白い山ね?』

かうある時お雪に言ふと、

『あれが鞍山といふ山ですつて……。今、あそこに、大變、金屬の出る鑛山が見附かつたんですつて

……』

『あゝ、あれが鞍山……』始めてそれと氣附いた驚きをかくすことが出來ずに、『ぢや、遼陽はあの向

うね? すぐね?』

『さうださうで御座います』

『日露戦争の古戰場ね。さう? あれが鞍山!』

かう言つて政代はあらためてその面白い形をした山の姿を眺めた。

ある時、さうした散歩から歸つて來た時に、政代はまたかうお雪に言つた。

『お前さん、此間、鞍山に鑛山があると云つたね?』

『え、』

『その鑛山はもう始めてるの?』

『まだ、始まつてはゐらないんでせう。その中始めるには始めるんでせうけれど——』

『でも、今洋服を着た技師らしい人が、二三人其方へ歩いて行つたが、その話ぶりでは、何でも、鑛山はもう始まつてゐるやうなことを言つてたよ』

『始まつてゐるのかも知れませんが、それぢや——』

『やつてゐるのは、A組？』

『いゝえ、たしか、K組だと思ひます。何でも、その大株主になる人だの、理事だの、技師だのが、東京から近々に視察に来るツていふ話です。何でも、それがすんでから始めるやうな話でしたが——』

『遠いの？ その鑛山のあるところは？』

『私は行つたことは御座いませんから、よくは存じませんが、何でもちぎだといふことで御座いますよ。これから、少し行くと川が御座いますがね』

『あゝ、川がある……』

『御存じですか……。もう、あんなところまで行らしたんですか？』

『傍まではまだ行つて見ないけども、遠くに見えてゐるから……。水は少いけど、かなり大きな川らしいのね？』

『えゝ、水が出ると、なんでも怖い川なんです。で、その川をわたつて、少し行くと鞍山といふ村があります。そしてその村の外れに大きな昔の關所見たいなところがあります。そこまでは私も行つて

見ました。何でも、そこから、その鑛山の事務所まで十町位しかないといふ話でした。わけはないでせう、屹度——』

『其處に來たお客は、皆な此處に泊るの？』

『大抵は汽車ですぐ大連までお歸りになるのが多う御座いますけれども、それでも中には泊つていらつしやる方も御座います』

政代はさつき散歩に行つた時、その水の少い川をわたつて此方へ歩いて來る技師の一行らしい群に出會つたことを思ひ出した。

不思議にも、その洋服の人達がかの女には氣になつたのである。現に、その中の一人である四十位の鼠色の中折をかぶつた男は、何處かで一度逢つたか、または話をしたかに相違ない氣がしたのである。

勿論、いくら考へても、それはつひに思ひ出せはしなかつたけれども……。

その時、かの女は午後の明るい日影を後にして、此方へ此方へと次第に近寄つて來るその人達を見てゐた。その人達は、川に橋がないので、靴を脱いだり靴下を取つたりして、漸くに徒渉をしてやつて來たのであつたが、此方の岸につくと、その少しのぼりになつたところ來て、また、元のやうに靴を穿いたり何かしたりして、そして煙草を吸ひながら、段々此方へとやつて來た。

さうした洋服姿や、中折帽が此方にもなつかしかつたと同じやうに、その人達にも、そこにぼつねん

とひとり立つてゐる女が、めづらしく不思議であつたに相違なかつた。

しかし、平氣でかの女は、一番先に歩いて来る、その人達の中では比較的若い男に此方から聲をかけた。

『鑛山から来たんですか？』

『え、さうです』

かうその男は答へた。

『もう、鑛山は、仕事を始めてゐるんですか？』

『……………？』

今度は答へずに、いくらか怪しむやうに、じろく／＼とその男はかの女の顔を見た。しかしそれは長い間ではなかつた。やがてあとから、顔のくしやくしやくした男と、この一行の長であるらしい肥つた莞爾した中年の男とがやつて来た。

かの女は今度はその問ひをその肥つた男の方に向けた。

『え、始めてます……………』

かう莞爾しながらその男は言つた。その時、かの女はそのあとからぞろ／＼つゞいてやつて来た二三人の群の中に、その鼠色の中折をかぶつた四十男を發見したのである。たしかに何處かで見つた眼、しかもかなり深くかの女の秘密を知つてゐるやうな氣持のする眼を發見したのである。急に、かの女は

さういふ風に無遠慮に、滿洲の曠野であるのに安心して、いつもの警戒もせず、づか／＼話をしかけたことを悔るた。

しかし、一度話しかけた上は、そのまゝ、素氣なく此方から離れて来るわけにも行かなかつた。ことに、その肥つた男は、莞爾しながら、頻りになつかしさうにかの女に話し懸けた。

『あ、さうですか、温泉ですか。今は込んでゐますか』

こんな風に肥つた男は話した。

『貴方がたも、矢張、温泉にお泊りでせう？』

『いや、私達は——』かう言つて笑つて、『これから、大連まで歸るんです』

『これから？』

わざと驚いたやうに政代が言ふと、

『なアに、わけはありませんよ。今度の汽車で行けば、夜の九時には歸れますよ』

で、いろ／＼な話をしながら、政代はその人達と一緒に温泉のところまで戻つて来た。しかもその間、その四十男はじろく／＼と頻りに此方を見てゐるばかりで——また氣味わるく笑顔を此方に向けてたり何かしてゐるばかりで、つひに一言も言はなかつた。

(オヤ！)

と思つた。政代は體中が俄に熱くなつて来るやうなを感じた。

たしかにそれはNに相違なかつた。無論それはその横顔をちよつと見ただけに過ぎなかつたのであるけれども——此方は厠から扉を押して出る、向うは湯殿に向つて、もう一人の伴れの紳士と何か頻に笑ひながら歩いて行く、その横顔をちらりと見たばかりであつたから、此方は見ても、向うは知らなかつたに相違なかつたけれど、しかしNが此處に来てゐるといふことは、かの女に取つて、かなりに大きな事件であらねばならなかつた。それに、此處にNが来てゐるといふことも、決してあり得べからざる不自然なことでもなかつた。さつき女中のお雪からその鑛山にK組が關係してゐるといふ話をきいた時から、既にそのNのことはかの女の胸の中に微かに思ひ出されて來つゝあつたのであつた。

(あ、わかつた。昨日、あそこで逢つた中年の男は、Nの親類になるT子爵の家に使はれてゐた男だ……。あゝさうだ。確にさうだ)

長い廊下を此方に歩いて來ながらかう政代は思ひ出した。(あゝそれでだ。それで、かうした鑛山にやつて來てゐるんだ——) かうかの女は猶思ひ續けた。しかし、一方では、その男なら、かの女の秘密を知つてゐるにしても、さう大して怖るゝに足らないといふやうな氣がして、いくらか安心した。

室に歸つてから、その儘政代は柱の電鈴を押した。やがてお増がやつて來た。

『ちよつと宿帳を見せて貰へない?』

かう政代は言つた。

『何うかなすつたんですか?』

『いゝえ、何でもないんですけども、知つてゐる人が、この一週間前ほどに此處に來てゐるといふ話だから……』

お増はやがて宿帳を持つて來た。

しかし、それにはまだN達の名はついてなかつた。かの女やKが名をつけてから、まだ一人か二人しかついてゐなかつた。人知れずこつそりそれを確めやうとしたかの女の目的は、これで見事に外れて了つた。

宿帳を返しながら、

『今日お客があつたね?』

『え、御座いました』

『鑛山の人?』

『え、鑛山の重役か何かださうで御座います。何でも一人は華族さまだつて言ふことです。N男爵と

か仰しやいました』

『さう——』

果してさうであつた。政代は半は困り、半は惑つた。何うしたら好いか自分にもわからないやうな気がした。何うかして面を合はせたくないとい方には思ふと共に、一方には逢はずにもゐられないやうな気が熾に起つて來た。

體が熱くなつたり冷たくなつたりした。(Kに逢はない以前ならば——それならば逢つたつて構はなかつたけれども)こんな風にも政代は考へた。

それにしてもかうしたところでNに逢はうとは？ 皮肉にもNと逢はうとは？ かう思ふと政代にはいろ／＼な過ぎ去つた事が何う押へて好いかわからないほどに混亂して、かの女の頭に押寄せて來た。かの女には、これも皆、神の審判ではないか、ひとり手にかうなつて來る自分の運命ではないかといふやうに思はれて來た。否そればかりではなかつた。Kの體がかの女の體に生々と蘇つて來るのをすら政代は感じた。

つとめてNに逢はないやうに心懸けたけれども、またつとめて離座敷から外に出ないやうにしてゐた

けれども、しかも、かの女の心の一面に逢つて見たいといふ要求がかなり強く押寄せて來てゐるので、遂には顔を合はせなければならぬやうな時が次第に近寄つて來た。

その翌日には、N達は鑛山の方に朝早くから出かけて行つて、午後になつてもまだ歸つて來てゐなかつた。その間に、かの女は大連のKの許に電話を懸けた。

Kはすぐ出て來た。

『あなた、いつ入らつしやる？』

『さア、まだ用事がちよつと片附かないけれども、その中、行くよ』

『その中では困るのよ』

『もう、あきたのかね？』

『あきやしませんけどもね、いつまでも此處にゐたくはないんですの！ 今度、來たら、すぐ京城の方へ伴れて行つて下さらない？』

『大變急だね！ 約束と違ふぢやないか。何かさうしなければならぬことでも起つたのかね』

『いゝえ、さうぢやありませんけれどもね、何うせ、行くなら、早く伴れて行つて戴く方が好いと思つて……。用事はまだ中々すまない？』

『京城に行く段取には、まだ中々いかないね……。』少時途切れて、『兎に角今日は駄目だけれど、明日

の晩か、明後日の晩かに行つていろ／＼よく話しをするよ。何にも、そんなに急な用事が起つたんでもないだらうから？」

『それは起りはしませんけどね。女はひとりであるのは、さびしいものですよ。そのさびしいといふことから、いろ／＼なことが起つて来るんですからね』

『わかつた、わかつた……』Kは大きく笑つて、『ぢや、成るだけ、明日の晩行くやうにするよ』

『さう——？』

かう言つて電話を切つて、政代はその狭い室から出て來た。政代はかの女自身にも自分の心が、自分のやつてゐることが、考へてゐることが、はつきりそれと掴めないやうな氣がした。Nにも逢ひたい。逢はずに此處を去つて了ふことは何うしても出來さうにもない。それでゐながら、Kの許に電話をかける。早く京城に伴れて行つて呉れと頼む……。何方が本當だらう。何方が虚偽だらう。かう考へて見てもかの女自身にもはつきりそれとわからなかつた。何方も本當の心持のやうな氣がした。

政代はNとわかれた時のことを考へた。それはNにも無論責任があつたには相違なかつたけれども、しかもその原因の八分は彼女の責任であつたのであつた。その時に限らず、さうした場合には、かの女はいつも勝利者となることを望んだ。——向うから捨てられる前に此方から捨て、やる——さういふ心持を抱いて、いつも男からわかれて來たのであつた。Nとわかれたのも矢張さうであつたことを政代は

思ひ出さずにはゐられなかつた。そしてさういふ風にして別れて來た澤山の戀心の連珠を、何ういふ風にかの女は取扱つたかと言ふのに、矢張かの女はいつも勝利の悲哀に似たそのさびしさを心の中に絶えず發見して、苦しく煩悶したり懊惱したりしたのであつた。Nなどは殊にその中でもすぐれて色彩の濃かな方であつたのである。政代は何うして好いかわからないやうな氣がした。

此方から笑顔を見せて、靜かに其方に歩いて行くと、その、廊下に立つてゐたNは、始めはその眼を信じないといふやうに、じつと此方を見てゐたが、

『これは……』

と言つてそのまま、此方へと走るやうにして寄つて來た。政代は心持ち顔を赧くしたといふやうな風で、

『めづらしいのね……。こんなところでお目にかゝらうとは思ひませんでしたね』

『本當だね……。一體何うしたツて言ふんだな。君が此方に來てゐるなんて、夢にも知らなかつたからね』

じつと政代の顔や扮装を索るやうにして見て、

『一目見て、君に違ひないと思つたけれども……さて、この満洲に君がゐる譯はないと思つてね。これは奇遇だ……小説以上だ……それにしても、僕のゐることがよくわかつた』

『昨日から知つてゐるのよ……』

かう言つて政代は笑ひ續けた。

『ぢや、さう言つて呉れ、ば好いのに……。それにしても何うして知つてゐたんだえ？ 宿帳でも見たのかえ？……あゝさうか、昨日湯に入るところを見たのかえ？ ああさう云へば、あの時便所から出て来た女があつたにはあつた。それは知つてゐる。しかし、それは君だとは思はなかつたね。何しろ奇遇だ……逢ふにも、かうしたところで逢はうとはねえ？』

『本當ね』

政代の方でも、Nの顔やら姿やらをじつと見つめずにはゐられなかつた。

『變りませんわ、貴方は？』

『いや、君だつて變らない……。益々若いぢやないか？』

『駄目ですよ、もう——』

かう言つて政代は笑つた。

『それにしても、此處には、いつ來たんだね』

『もう五六日になるわ』

『満洲には？』

『こつちには、もう半年以上來てますわ。つひ此間まで北京に行つてゐたんですけども……』

『北京に——？』

Nは驚いたやうにして、『いよいよ、世界を股にかけるわけだね？』

『股にも掛けませんがね……。』政代は少しツンとして、『だつて、内地にゐるたつて誰も相手にして呉れないんですもの。評判ばかりわるくつて……。』

『そんなことはないだらうけれど……。』かうNは言つて、『夫にしても何うしたね？ あの代議士は？』

存外鋭い質問である。

『知りませんね……。』

『だつて、大分評判だつたぢやないか。僕もかけながら、君のやり口の鋭いのに感心してゐるんだよ』

『まあ、好いのよ、そんなことは。だから、評判がわるくつて、内地にゐられないって言つてゐるんですもの』急に政代の方から逆襲するやうに、『それは、さうと、何うなすつて？ 梅勇さん？』

『相變らず丈夫だよ』

『結構ですね。いつも、若くつて美しいでせうね？』

『ヤ、もう、随分、婆になつたね。もう白髪が出て来たさうだ』

『結構ぢやありませんか？ 共白髪なら？』

『まア、餘り結構でもないな。御存じの通りの女だからね』

こんなことを言つてNは笑つた。他が聞いては、何の意味もないやうな事の中にも、遠い昔の追憶や、嫉妬や、闘争やがかくされてあるのであつた。一言言つた丈けでも、昔の二人の生活とその生活を取巻いた女や男のことが歴々とそこに浮び出して来た。

Nの胸には、一番先に、政代が縋つて、此處にやつて来た男のことが上つて来た。屹度さういふ男があるに相違なかつた。またさうした保護者なしに、かうした滿洲の土地にかの女がやつて来るとは何うしても思へなかつた。Nは笑ひながら、

『それにしても何うしてこんなとこにやつて来たんだね？』

『何うしてつて、別に理由はないわ。矢張内地にゐられなくなつて、さうしてかういふところまで落ちて来たのかも知れないわね』

『長く此方にゐるのかね？』

『さうねえ……』

政代は考へるやうにして、『何うなるかまだわかりませんね。此間なんか、もう東京に歸るつもりでる

たんですけども、また、ちよつと歸れなくなつた——』すぐ折返して、『貴方は？』

『僕かね？ 僕は、ぢき歸るよ。何しろ、唯、形式に鑛山を視察に来たばかりなんだから……』

『お伴れがあるんでせう？』

『あつても、技師だよ』

『でも、まだ二三日は此處にゐるんですか？』

『さうだね……。まだ少し用があるね。それも僕の方にあるんぢやないがね、技師にあるんだがね』

『有望なの？ その鑛山？』

『まだ、はつきりわからんがね。滿更でもないやうだな。何しろ、鑛床がかなり深いやうだ』

『儲かつたら、私にも、澤山わけて下さるわね？』

かう軽い調子で政代が言ふと、

『それはやるとも……。何しろ、君だもの、他人ぢやないんだもの』

大きくNは笑つた。

しかし、かうした軽い調子は、いくら年月が経つてゐるにしても、またいかに他人になりかけてゐるたにしても、何となくかれ等の心持にそぐはなかつた。かれ等は種々なことを思ひ出すやうにして黙つて了つた。

『妙子さん、もう、成長くおんなすつたでせうね』
つとめてその沈黙を破るやうにして政代は言つた。

『何しろ、もう女學校だからね——』

『もう、さうおなりになりますかね？ あの時分まだ七歳か八歳でしたのに……。早いもんですね。』

お美しくおなりになつたでせうね？』

『駄目だね。成長くなると、段々とわるくなるよ』

『そんなことはないでせう』

今になつても、『奥さんは？』と訊く氣には何うしてもならないのを政代は發見した。競争者！ あの怖ろしい嫉妬！ 表面は無邪氣な顔をして、心は恐ろしい怨恨と陰謀、離れて了へば他人の筈であるのに拘らず、今でも歴々とその時のことが思ひ出されて來るのであつた。それにしても、今頃は、あの細君は何と思つてゐるだらう。かういふ遠い滿洲の温泉場の暗い廊下で、かれとかの女とかうして立話をしてゐるなど、は夢にも思つてゐないだらう。否、この光景を一目でも見たならば、かうした何でもない單純な會話を交はしてゐるだけでも、忽ち恐ろしい嫉妬の炎を燃やすであらう。かう思ふと、政代は何となくをかしいやうな氣がして來た。

それに引かへてNはまたしても政代の相手が氣になるやうに——しかもそれをぢかに訊ねるのも巧くないといふやうに、黙つて意味のある笑ひを含ませながら、捜すやうに、政代の顔を、眼を、腫を凝視した。

Nはそれとはつきり口に出しては言はなかつたけれども、かの女の保護者についていろ／＼と暗中摸索をやつたことや、出來ることなら、もう一度その關係を新にしたいといふ心持が十分にあることや、此方に少しでも隙があれば、すぐ飛び込んで來るやうな形のあることなどが、その廊下の會合で歴々と政代にわかつて來た。政代は困つたやうな心持を一面に感ずると同時に、一面得意になつたやうな氣分の漲りわたつて來るのを感じた。

大連からKがやつて來るといふ電話がかゝつて來た時には、Nは用事があつて、その鞍山の鑛山の事務所の方へ行つてゐる留守であつた。

Kは八時の汽車でやつて來た。

室に入つて、洋服を着物に着替へると同時に、Kは女中のお増に言つた。

『此處に、此間から、N男爵が來てるね？』

『え、來てるらつしやいます』

『技師と二人で?』

『もう一人若いおつきらしい方と三人で来てゐらつしやいます』

『今ゐる?』

『いゝえ、今日は午後から山の方へゐらして、ことに由ると、事務所へ泊るやうになるかも知れな
いつていふやうなお話でした』

かう言ひながら、お増はをりをり眼を政代の方にやつた。政代は黙つて眼を下に低頭加減に困つたや
うにしてゐた。

しかしそれもほんの僅の間であつた。

『貴方、お存じ? Nさん?』

かう急に政代は言つた。

Kは此方を書いて、

『知つてゐるつて、さう深くも懇意にはしてゐないけれど、商賣上のことで、二三度取引したことは
ある』かう言つて、政代の顔をじつと見るやうにして、『君も知つてゐるのか』

『え、一寸知つてますの……』

政代は顔の色も變へずに一々軽く言つて、『昨日、ひよつくり廊下で出會して、びつくりしちやつたの

……。向うだつて、私が此滿洲になんかゝるとは思ひもかけないでせう? じつと立つて不思議さうに
して見てるぢやないの……』

『さうでしたつてね。あちらでも奇遇だ、本當に奇遇だなんて言つてゐらつしやいましたよ』

かう傍からお増も合せた。

『何處で知つてゐるんだね? こつちでかね?』

かうKは訊ねた。

『いゝえ、東京で知つてゐるんですの……。それももう餘程前のことですの、もう七八年前ですの』

『ふむ』

とKは考へるやうにして、暫し黙つてゐるたが、『それは本當に奇遇だ。僕も君が男爵に懇意だつたとは
少しも知らなかつた……』

『何しろ、もう舊いことですからね』政代はいつもと變らない、落附いた調子で、

『私のお友達のお友達の兄さんでしたの。だから本當にびつくりしました。ちよつとはお互ひによく
わからなかつたんですもの。まア、何うして、こんなところに来てゐるんだなんて——人間つていふも
のは、何處で、何んな人に逢ふか、本當にわからんもんですね』

『本當で御座いますね』

またお増はかう傍から口を添へた。Kは黙つてじつと政代の顔を見詰めた。

女中が去つたあとで、Kはいくらかその話を突込んだ方へ持つて行つた。

『いゝえ、さういふ關係ぢやないんですの……。唯、お友達のお友達の兄さんとして知つてゐただけですの。Nさんの妹といふ人が派手な、社交好きな方だつたもんですから、芝居だとか、音楽會だとかいふ時によく一緒にになりましたの』

かう平氣で政代は言つて、

『もう随分昔ね。あの時分のことを考へると、何だか自分が丸で別な人間の様に思はれますね……』

『Sさんの許から出て来てからは、來てからなんだね?』

『それはさうですとも……。Sの許に行つたのは私は十七で、二人子供を残して出て來たのが二十一の時だつたんですもの……』

『さうかな、そんなに早く出て來たのかな』つひわき道に引き込まれるやうに、『それで、一番の子供は、いくつの時に出來たんだね?』

『十九の春に出來て、二十の秋にまた出來たんですもの……。つくづく子供を生まれさせるつていふ

ことがイヤになつて了つたんですねえ』考へるやうにして、『それも無理はないと思ひますの……。何しろ、まだ、ほんの娘ですもの。小説なんかばかり讀んで、戀とは美しいものだなど、空想してゐたんですもの……。ですから、子供なんか、丸で私には見られやしなかつたんですね。つまり、SやSの親達に取つても大變なお嫁さんだつたんですよ』

『ふむ』

Kは首を傾けて考へて、『それからあの代議士の世話になるやうになつたのかね?』

『いゝえ、それはずつと後ですよ。此方にやつて來る少し前ですもの。それに、あのことは、世間ではいろんなことを言ふけれども、何でもありませんよ。今になつて見ると、却つてあの人にも氣の毒だと思ふ位ですもの。何しろ、あの時分は、私も随分わからずやでしたからね……。それに雑誌記者なんかにもおだてられたんですね』

またわき道に引張り込まれさうになるのを辛うじてKは押へて、

『それで、あのN男爵とは何年位交際してゐたね?』

『交際つていふほどではないんですの。唯時々あちこちで逢ふ位のもんでしたけども……。それで、二三年さうしてゐましたかね?』(ぢや大丈夫だね?)かうKはそのまゝ突込んで行きたかつたけれども——またさうした言葉が口まで出かゝつて來たけれども、しかもあまり深く入つて行くのは、何だ

か男の寛大を失つて了ふやうな氣もしたし、餘り疑惑深いの見透される様な氣もしたので、全く外れて、『それにしても、N男爵が君を知つてゐるやうなど、は、夢にも思はなかつたね……』

『さうでせうね。……私にしても随分奇遇でしたもの』

『すぐ言葉をついで、『矢張、銅か何かの取り引き?』

『いや、それとも違ふんだがね』

『鑛山のこと?』

『いや、それはちよつと君にもわからんことだよ。……あれで、あの人、滿洲では随分いろんなことに手を出してゐる方だからね』

『評判は何う?』

『さアね』Kは少し躊躇して、『わるく言ふ人もあるにはあるね』

『まだ、何ういふ用が残つてゐるの? 大連に?』

その夜、寝る時、かう政代は笑ひながらKに訊いた。

『まだ、いろんな用事が残つてゐるんだよ。何うしても、僕がなくては駄目なんだから、いやにな

つて了ふね……』

『さうぢやないんでせう。他にわけがあるんでせう?』

わざとはつきり言はずに、中途でよして笑ひかけると、Kは、

『わけなんかありやしないよ』

『何うだか?』

『ぢや、何ういふわけがあるんだえ? 言つて御覽?』

『其處に、家庭にばかりこびりついてゐるもんぢやありませんよ』

『これは驚いた!』

Kはわざと驚いたやうにして、

『僕の家庭なんか、さつぱりしたもんだよ。こびりつきたくつたつて、つきやうのないやうな家庭だからね……。君だつて、知つてゐるぢやないか、僕の嬢は——?』

『知つてゐますとも……。でも、あゝ見えてゐて、あれで、中々亭主孝行だと思ふわ。私……』考へ

て、『さうぢやないでせうか?』

『そんなことはないよ。その方はさつぱりしたもんだよ』

『さうかしら? 私、一度、お目にかゝつたきりだけれども、さうは思はない。随分妬く方ぢやない

かしらんと思ひますね』

『まア、好いさ、そんなことは——？』

いくらか面倒臭いといふやうに投げ出すやうにKは言つた。

『でもね……？』

政代は猶もその話を捨てずに、ぐちぐちしてゐるので、

『本當だよ。僕の鼻なんかそんな嫉妬やきぢやないよ。それに、君だつて、君の利那的な主義から言つて、そんなことは問題にしない筈ぢやないか』

『でも、さうはいきませんよ。女は矢張女ですからね。かういふことに貴方となれば、何うしたつて、奥さんの影が色濃く私に映つて来るわけですからね』

『さうかな』

『然し、何うでも好いわ……』今度は政代の方が投出すやうにしたが、さてまた黙つて考へ込むやうにして、『しかし、矢張男には女の心持は本當にわかりませんのね。男は女を自分のものにしさへすれば、それで平氣で好いと思つてゐるのね。もう自分のものだ！』と言ふやうな顔をして、すぐ女を手に入れない前のやうな熱烈な愛情はなくなつて了つてゐるのね……。だから、女を本當につかむことが出来ないのね』

『それはさうかも知れんな』それでもKは猶面倒臭さうにして、『しかしまア、そんなことは、何うでも好いぢやないか？』

『何うでも好いの？ 本當に何うでも好いの？ 貴方？ 自分の持つたと思つた女がいつの間にか手の指の間から滑つて落ちて行つて了つても？』

それまでKは夜着の中に仰向に寝てゐるが、これをきくとすぐ起き返つて、

『それは何ういふことだえ？』

『別に、何でもないけれども……。たとへて見れば、私と貴方でも、折角かういふことになつても、貴方が本當に私のことを思つて呉れず、京城にも伴れて行つて呉れずに、かういふところに投げ放しにして置けば、どうしたつて、一度得たその獲物も指の間から滑つて落ちて行つて了ふぢやありませんか。……一步を譲つて、さうして落ちて行かなくても、落ちて行く様な危険はあるにはあるわね？』

Kは黙つて、政代の顔を見詰めるやうにしたが、暫く経つてから、

『つまり早く京城に伴れて行かないことが不平なんだね？』

『さうね、それもあるかも知れないのね。しかし、そればかりぢやありませんね。私のためにも、貴

方のためにも、一日も早く京城に行く方が好くはないかしら！ と私は思ふの』

Kは再び政代の方を見詰めて、

『それには、何かわけがあるのかね？』

『いゝえ、別にわけつていふこともありませんけどもね』

『でも……』

『本當にわけなんかありませんけども……』今度は政代の方がつとめてそれを打消すやうにして笑つて、『でも、本當にさうなんでもものね。男はすぐさういふ風に冷めて行つて了ふんですもの』

『そんなことはないと思ふね……』ちよつと途切れて、『それやね、早く行けつて言ふなら、行つても好いけれども、何もそんなに一日を争ふやうなことを言はなくつたつて好いと思ふんだ。一體、それを元にして、その京城に行かないことを理由にして、愛情が冷めなくなつたの、さめたのつて言ふのはちと酷だね！』

『さうでせうかしら？』

『だつて、始めに約束したことをやめるつて言ふぢやないんだもの……。唯、用事があつて、少し後れるつていふだけのもの……。』

『だから、それはわかつてゐますよ。しかし、もし』かう言ひかけて、止して、考へて、『これはたとへよ。本當だなんて思つては駄目よ、本當にたとへなんだから……。ね、よう御座んすね。たとへば、あのNさん、あの人と私との間が單に友達關係でなくつて、一度わけがあつて別れた男とか何とかであつたら何う？ 貴方だつて、さうしたら、私を此處に放つて置きやしないでせう？』

Kは頭を振つたが、

『それで言ふんだね？』

『さうぢやないんですつたら！ それを本當にしちや駄目だつてあれほど言つたぢやありませんか。』

それは誰にだつてきてい見ればわかるんですもの……。え、勿論さうですとも、唯例に引いたんですと

も――』

『……？』

何うだかわからないといふやうな顔の表情をして、Kは深く黙り込んで了つた。政代はすぐ言葉をついで、

『だつて、考へて見たつて、わかるぢやないの？ もし、本當に、さうだつたら、誰が本當に、そんなことを饒舌るものがあるもんですか。貴方それがわからないの？』

成程さうだと思つたらしく、考へ込んだ顔をKは擡げて、

『別に、疑つてゐるつていふわけでもないけどもね……。』

『本當に、疑つちやいやですよ。唯、例に引いた丈けなんですから……』Kの顔の表情から、いろいろなこと、たとへばもしNとの関係が知れたらKは何う思ふだらうかといふこと、さういふことを細かく捜すやうにして、『もし、さういふ場合だつたら何う？ 一刻も早く京城に伴れて行つて下さるでせう？』

『さアな……』

また、Kは考へ込んだが、やがて、急に、『まア、そんなことはあとにしよう……。よくお互に考へやう！ それよりも、それよりも……』

『しかし、まだ疑つてゐるにはゐるのね？』

『いゝよ、そんなことは、何うでも——』

『でもね、疑はれてゐてはいやですからね』こんなことを言つて、笑ひながら政代は廊下の方に出て行つた。廁へと行つたのであつた。

政代は亂れた髪を取敢へず輪櫛で梳き上げながら、

『もう、しかし、別れやうたつて駄目ね……』

『それはさうとも——』

『かうなると、心ばかりぢやないんですものね。體も、魂も、皆んなさうなつて了ふんですものね……』艶な、蠱惑的な、男の魂を奪はずに置かないやうな、また、かうして置けば、何んなことがあつても、男は離れて行かないといふ自信があるやうに、じつとKの顔を見詰めながら、『矢張、縁ね。さう言へば、始めて逢つた時から何だか、他人ぢやないやうな氣がしましたもの』

『僕だつて、さうだ——』

『かういふ風に』政代はいそぐと嬉しさうにして、『かういふ風に、しつかり結びつければ、京城に行くことなんか、もう問題ではなくなるんですけどもね……。矢張離れてゐると、駄目ね。ひとり手に、疑惑が起つてきたり、頼りなさを感じて來たりするんですもの……。矢張、女は弱いもの』

『信用しないからだよ……。人間は何でも疑つては駄目だよ。此方で疑へば、何うしたつて、向うだつて、水臭くなつて來るからね』

『それは本當ですね……。私のやうなものは、ことに、さうかも知れないのね。それが悪いんですね』

『さういふ點はあるね。頭のはつきりしてゐる才女には、何うしたつて、さういふところがあるからね。落着いてゐられないやうなところがあるからね』

『さうでもないんですけどもね……』ふと、別なことを深く考へるやうにして、言ひ出さうとして止して、また考へ直して、

『貴方に、是非ひとつ言つて置かなけりやならないことがあるんですがね……』

かう思ひ切つたやうにして言つた。政代の顔がいくらか赧くなつて來るのをKは見た。

『……………?』

『怒つちや、いやですよ』

『何だね? 一體——』

『怒りさうね』

政代は言ひかけて、また止した。

Kは大抵わかつたといふやうにして、急に不機嫌に且つ突詰めた顔の表情をしたが、しかも、さう打出された上は、聞かすには置かれなれないといふやうに、

『何うしたんだえ?』

『だつて、怒りさうなんだもの……』政代はまた顔を赧らめ乍ら、『でも、かうなつては、もうかくしてゐるわけには行かないのねえ。そんな水臭いことは出來ないんですけど……。實はね、實はね、コンフエツションすれば——』

『……………?』

『矢張Nさんと一時さうだつたんですけど……。ほんの、短い間だつたんですけど……。それで、一刻も早く、成るべくなら、顔を會はせずに、此處を立つて行きたいと思つて、それで、此間、電話をかけたんですの』

『ふむ——』

Kは頭を振るやうにして、『ふむ……。さうすると、さつきは嘘を言つたわけになるんだね?』

『だから、コンフエツションをするんぢやないの……。もう、かうなつては、そんなことを胸に仕舞つて置く必要がなくなつて了つたやうな氣がしたんですけど……。それはさつき、まだ、心配だつたので、つひあんなことを言つたんですけどもね……。許して下さるわね』かう言つて、政代は笑ひを含んでKの顔を覗き込んだ。

『それで、何うしたえ? もう逢つたんだね?』

Kの眼は鋭く光つた。

『逢つたには逢つたわ。何うしたつて、こゝにゐては、逢はずにゐるわけには行かないんですけど……』

……』

『いつだね？ それは？』

『昨日の午後……』

『……………』 Kは何か言はうとしたが、しかも言はずに、頭を低れたま、暫くはじつとして身をも動かさなかつた。いろ／＼のことが早く早く其頭を掠めて通つて行くらしかつた。今までの享樂も何も彼も、いつか何處かに行つて了つたかのやうに見えた。

『で、何うしたね？ その結果は？』

かうKが訊いたのは、尙ほ暫く經つてからのことであつた。

『別に、何うも——』

今度は、さつきと違つて、政代も度胸をきめて了つたらしかつた。かの女は急にすましたやうな態度を取つた。それは丁度さうした場合に於ける男の苦悶を、これまでも、散々見て來た男の苦悶をじつと見詰めてゐる様にも、または、その苦悶の状態の程度の如何によつて、かの女の方に偏つて來てゐる男の戀心の度數を計る權衡にしてゐると思はれるやうな形であつた。政代には最早さつきの顔を赧くしたやうな無氣邪な表情はなくなつて了つた。

『それで、何ういふ話をしたえ？』

この質問のへろへろ矢ではとても女の胸を貫くことは出來ないのを十分知つて居ながら、爲方がなしに、Kはかう言つて見た。

『別に、何うツて、長い話もしませんの……。廊下でちよつと立話をしたばかりですもの』

『何んなことを言つてたね？』不機嫌な自分の心の調子を失つてはならないと思ひながら、さう話して行く以上、何うしても碎けた調子にならずにはゐられないのをKは痛感しながら、

『昔の話でも出たかね？』

かう言つてつひ苦しさうにして笑つて了つた。

『そんな話をするひまなんかあるもんですか。奥さんやお嬢さん達の話をした位なもんですもの……それやね、喧嘩をして別れたんぢやないんですから、逢つたつて、お互ひに顔を赧らめ合ふやうなことはないんですけども……』かう言つてKが何か言つたのを聞いて、『え？ 何ですつて？ また何うかなりやしないかつて？ そんなことは出來はしませんよ』男の心を捉へずには置かないといふやうに艶に笑つて見せて、

『存外、顔を合せても、何でもないもんですね。親しい友達位にしか思はないもんですね』

『そんなことはない……』

Kは強く頭を振つて見せた。

『ちや、何う言ふの？』政代はいくらかツンとして、『ちや、私がまたNさんと何うかしやしないかつて言ふの？ さう疑つてゐるの？』

『さういふわけもないけど……』

『でも、矢張、信用が出来ないつて言ふのね？』

『だつて、さうぢやないか』Kは突込んで、『さつき、そのため、京城に早く伴れて行けつて言つたぢやないか？』

『それはさうねえ、さう言つたわねえ、始めに電話をかけた時には、その心配だつてあつたにはあつたんですもの。でも、もう大丈夫ですよ。もう疑はなくつても好う御座んすよ……。でも男ツていふものは何うしてかう女の心がわからないんでせう？』政代はぢれつたさうにその身をKに凭せかけるやうにした。

『大丈夫ですよ。そんなことはありませんよ』

『でも……わからないからな、さういふことは——？ それなら、それで、今、ちやんと言つて貰う方が好いんだ』

『大丈夫ですつたら？』

政代はわざと投り出すやうに、『そんなに信用が出来ませんか？ 私は？』少し考へるやうにして、

『もう遠い昔の昔のことなんですもの……。そんな氣持になりたくつたつてなれやしないわ』

でも、さういふことは常識では言ふことは出来ない。また、さういふことになつたにしても、常識で答めることは出来ない……。それで、黙つて容認して見てゐることは出来ないことなのだから困る……。かうKは突詰めて考へて見たが、しかし、それを政代に言ひ得るほどそれほど軽い洒脱な心持になることは出来なかつた。

『昔のことは仕方がないがね。濟んだことだから、夫は言はないがね。新たにどうかなつて行くやうなことがあつちや困るんだ……。』

真面目な調子でKは言つた。

『そんなことはありませんよ』

『ありませんよたつて、そんなに笑ひながら言ふやうぢや駄目だ。もつと本當にさう思つて呉れなけりや——』

『なら、本當に——』

わざと真面目な顔をして、強く押しつけるやうに言つたが、その言つた形が可笑しかつたので、政代

はぶつとふき出してしまった。

しかしそれ以上はKにも何うすることも出来なかつた。大連に伴れて行くわけにも行かず、さうかと言つて奉天に行けばいろいろ噂に立てられる虞があるし、一番良策は、矢張政代が言ふやうに一刻も早く京城に伴れて行くのが好いのであつたが、さうかと言つて、明日にもといふわけにも行かないのであつた。

Kはひとつの大きな苦勞——夢にもその前にさうしたものが控へてゐるとは思はなかつた苦勞、また、政代のやうな女には、早晚さうしたことがやつて來ずにはゐないかもしれないにしても、しかもさう早くやつて來ると思はなかつた苦勞が、わびしく暗い憂鬱な氣分を避くべからずにかれを誘つた。さうかと言つて政代を咎めるわけにも行かなかつた。政代には咎められるべき何等の罪もないのであつた。否、普通には言ひ難きことも敢て言つて、そして立派に告白してゐたのであつた。それは今に際して、更に新しい關係でも出來たといふならば、いかやうにも責むべく咎むべき理由はあつたであらうけれども、たとへ將來に於てさうした危険は豫想されるにしても、またそのためかれが苦しんでゐるにしても、現在では政代が負はなければならぬ責任は何一つないのであつた。Kは何うすることも出来なかつた。いつそ告白して呉れたのが情ないやうな氣がした。告白さへして呉れなければ、さうした杞憂は起らなかつた……。では、自分は恰でそれを知らないでゐる方が好いか？ かの女の胸の底の祕密としていつまでも藏されてゐる方が好いか。そしてNとかの女とが廊下で話したことをも全く知らずにゐる方が好いのか。否、否、否、とてもそれはかれには堪へられさうにもなかつた。(爲方がない……。今になつては、成行を見るより他爲方がない、果してかの女の言ふやうに、さうしたことになるやうになることはないか何うか？ 單に其の友達としてNと口をきくとどまるか何うか？ しかし、もう少し成行を見てゐて、果してそれが焼木杭になつたら？)かう思ふと、かれは體が辛く辛くなつて來るのを避けることは出来なかつた。

こんなことで苦勞するのは馬鹿々々しいやうにKには思はれた。

『嫉妬をやく位なら、よす方が好いね……。その方が本當だ……。女に他に男があらうが、何うしやうが、兎に角、自分への義務をつくしさへすれば、それで好いちやないか。それで、満足すべきぢやないか』その道にかけては、通人とも言はれ、苦勞をしたとも言はれてゐる友人のSが、かうKに話したことがあつたが、その言葉をK自身も(本當だ!)と思つて感心して聞いたことがあつたが、しかし、今、かうして實際に臨んで見ると、さう簡単に片附けて了ふことも出来さうに思はれなかつた。いかに馬鹿々々しい苦勞でも、愚な嫉妬でも、そのまゝ投り出すやうに未練氣なしにやめて了ふわけには行かなかつた。

(自分が手を出した自然の報酬だ！)

かうKは後悔して見たところで、さて何うすることも出来なかつた。

それに、女にさうした相手があるといふことが、益々かれをして女に執着させて行く焦躁を避くべからずその胸に燃え上らしめた。否、そればかりではなかつた。さうした場合に、常に最も有効に利用される女の魅力が、魔の手が既に犇々とかれの體の内まで喰ひ込んで來てゐた。(まア、爲方がない。成行を見るより他、爲方がない……。當人だつて、そんなことはあり得ることではないと言つてゐるんだから……。) かう思つて、そのまゝ、自然に任せて置くより他に策はなかつた。

Kは昨日此處にやつて來る時、都合が好かつたらN男爵にも逢つて行きたいと思つて來たのであつた。鑛山の方ではないけれど建築の方で、逢つて話して置く必要が多少はあつたのであつた。しかし、今はさうした心は微塵もなかつた。昨日歸つて來る筈であつたNが今朝になつても歸つて來ないのが却てかれには喜ばれた。それでゐながら、もし出來れば、政代の手を利用してNを此方に引張寄せたいといふ考へは、持つてゐないことはないのであつたけれども……。

『何うしても、八時で歸るの？』

かう政代が訊くと、

『何うしても歸らなければならぬ。昨日來られないのを、やつとのこととやつて來たんだから——』

『なら、また、明日來て下さる？』

『何うだかわからんねえ……。忙しいんだからね。しかし、成るべくちよいちよいつて來るやうにするにはするよ』わざと軽く笑つて、『ひとりで放つて置くと、ひんのんださうだから……。』

『大丈夫ですよ。それは——』

笑顔を凭せかけるやうにして政代は言つた。

『本當に大丈夫かしら？』Kは軽い調子を改めずに——。

『大丈夫ですよ』

で、二人は暫く黙つた。かれ等の心には種々なことが通つて行つた。Kはすぐ憂鬱になつて行つた。

『そして京城の方は何うするの？』

『さア、まだわからんね。何しろ用事がまだたまつてゐるんだから……。』ふと思ひ付いたやうに、また女の心から何物をか捜すやうに、『君、ひとりで先へ行つてゐるか？』

『さうね……。』と、政代は躊躇の色を顔へあらはして、『何せ、京城ツていふところ、ちつとも知らないんですからね。せめて知つてゐる人でもあればそこに行つてゐるといふこともあるけれど……。』

『ぢやまア、落着いて待つてゐるさ……。京城で待つてゐる貰ふより、此處で待つて、貰ふ方が好いんだから……。』此次に來た時、何うか話をきめて來るよ』Kはそれにつけて、(本當に眞面目にしてゐる

て呉れなくつては困るよ」とか何とか言ひたかつたけれど、しかもそれが何となく厭味になつて了ひさうなので、そのまゝ口を噤んで了つた。

Kは大連にゐても、氣になつて氣になつて爲方がないので、その翌々日には、また湯崗子の方へと出かけて行つた。

しかし別に變つたことはなかつた。女中のお増は相變らず愛想が好く、上さんもわざわざ出てかれを迎へ、政代は政代で、落着いた形で靜かに離座敷の方から廊下まで出て來た。(N男爵は?)かう打つてぢかには訊きはしなかつたけれど、ひとり手に話はそつちの方へと持つて行かれた。

政代は平氣で、

『昨日行け、行けつて言ふから行つて見たわ』

『鞍山に?』

『え……。爲事は始めてゐても、まだほんの少しね……』

『ふむ——』

Kは頭を押へた。やがて、

『Nさん、ゐるかえ? 今日は何?』

『ゐるでせう、屹度……。さつきゐりましたから——』

(僕のことを話したらう?)かうすぐKは訊かうと思つたけれども、何うしてもそれはその口から出て來なかつた。

『貴方、行つたことあつて? あそこへ? 鞍山へ?』

『一度行つたことがある』

『好いところね……。あそこ。事務所のあるところなんか、何とも言はれないわね。あそこから見ると此方の方は丸見えね。まだいくらか紅葉も残つてゐましたよ』

『Nさん、平生はあそこゐるのかね?』

この質問は、Kに取つては、かなり思ひ切つたものだつた。

『さうね。此方に來たり、彼方へ行つたりしてゐるらしいのね。泊るには泊れても、どうも事務所は、手がなくつて、不自由でいけないなんて言つてゐたわ』

『どうだね? 復活は出來さうかね?』Kは何うしてもかう意氣込ますにはゐられなかつた。

政代は依然として平氣で、(そんなに妬くもんぢやありませんよ)と言つたやうな顔の表情で、『そんなことは駄目ね。他から見ると、さういふ風に見えるでせうけども、當つて見ると、存外さういふもんぢ

やありませんね。お互に、お互のことをよく知つて居ますからね。さういふことは容易に起らないもんですね……』

『……何うだか知れたもんぢやない』といふ顔をKはして見せたが、皮肉に、『事務所に泊つて来たわけぢやないんだらうね?』

『そんなことはありつこないぢやない? そんなに疑ふなら、詳しく話して聞かせませうか。昨日天気が好かつたでせう。それに頻に行かないかつて言ふから、それで行つたんですけどもね。え、さう、技師のHさんも一緒に行つたんですの。あつちに着いたのは十一時でしたね。そこで晝飯を御馳走になつたり何かして、鑛山の入口まで行つて、また引返して来て、事務所まで四時頃まで、ゆつくり遊ばして貰つて来ましたの……。岩山に疎らに紅葉が残つてゐるさまは内地では、ちよつと見られない景色だと思ひましたよ』Kの顔を見て、『それにNさんは用があると云ふので、歸りは、技師のHさんと二人で歸つて来ました。Nさんは向うに泊つたらしかつた……』

『それは面白かつたね』しばし途切れて、『今度は、N男爵にも逢つて行きたいと思ふんだが、別に差支はないね? 君は?』

『え、別に……』かう言つて政代は笑つた。『何うせ、かへるんだから、知れたつて構はないわ』

『でも、變には變なもんだな』Kは考へて再び頭を押へるやうにした。

KはNに逢つた。

無論、それはNの室へKの方から出懸けて行つたのであつた。KにはNに是非逢つて置かなければならない用事もあつた。またNの軀の中に藏されてある政代のこととそれとなく搜りたかつた。この前に、逢はずに歸つて行つて、そのために、深い疑心暗鬼に虐まれたことを考へると、今度は、何んな厭な思ひをしても、Nにも逢ひ、出来ることならその真相をさぐらなければならぬと思つた。

『ヤア』

かうNはいつもの微笑を満面に湛えながらかれを迎へた。別に變つたところもなかつた。矢張肥つた、血色の好い丈夫さうな體格であつた。口髯を短く刈つたのも、髪をアメリカ風に撫でつけたのも、黒い中にいくらか白髪が雜つてゐるのも、話をする時に可愛らしく口元に笑を含むさまも、すべて皆な同じであつた。この二月ほど前に逢つた時と少しも異つたところはなかつた。それでゐながら、Kは口で言へないやうな一種厭な重苦しい壓迫を感じた。

言ふまでもなく、それは政代がそこにゐるからであつた。その體の中に、またその血の中に、その唇の中に、口鬚に、髪に政代がこびりついてゐるからであつた。さう思ふと、話をしてゐながらもKはを

りく變な氣分になつて來るのを禁することが出来なかつた。體が熱く熱くなつて來た。

いろく光景が避くべからずにKの頭を掠めて通つて行つた。それはK自身と政代との間に取交されたさまぐの光景の複寫見たいなものであつた。また此方から其方へと映して見たやうなものであつた。Kはまた辛い壓迫を感じた。(それにしても不思議だ! 何うして、かう深く入つて來たらう。何うしてかう短日月の中に、その巴渦の中に引張られて來るやうになつたらう)こんな考へが次から次に起つて來てはすぐ消えて行つた。表面で、話してゐる平凡な話、その奥には、さうした刺戟と衝動とが凄じく且烈しく巴渦を捲いた。

『さうですね。もう、始めますよ。さういつまで、放つて置くわけには行きませんから……。その時はまたひとつ心配して戴かなければ……』

かうN男爵は落ち着いた調子で、いつものやうに微笑を口のあたりに湛えて、そして言つた。別に平生と變つたところはなかつた。しかも此方の思ひ做しか何うかは知らぬけれども、その一枚剥いだ膜のかけには、矢張、同じやうに、そのさまぐの光景と、色彩の濃い舞臺と、刺戟と衝動とが深く藏されてゐるのが歴々とKにもわかるやうな氣がした。話をしてゐる中にもその眼は絶えずかれに向つて深く注がれてゐるのをKは見通すことが出来なかつた。

しかも、政代のことは、竟に竟に口に上らなかつた。Kにしては政代とNとの仲の何ういふ形にあるかを探りたいのがNに逢つた大きな目的のひとつであつたのであるけれども、しかも、それを平氣で打出して話し合ふほどそれほど軽い氣分には何うしてもなれなかつた。最後にはKは何氣なく訊いた。

『まだ、此方に長く御滞在ですか』

『いや、もう歸らなくつちやならないんだけど……。中々、用事が片附かなくつてね』

ジロリとNはKの方を見た。Kは自分ながら馬鹿なことを訊いたものだと思つた。ひとりで顔が赤くなつて來るのを感じた。氣分がむしやくしやくして來た。

その夜、政代の發意で、N男爵をかれ等の室に招待したことを後になつてもKは忘れなかつた。實はKはさういふことは餘り望まなかつたのであつたけれど、政代が何うしてもさうしたいと言ふので——さうする方が却てかの女の位置をNに肯定させる形になると言ふので、夫で強ひて夫を實行することにしたのであつた。Nは別に異議なく喜んでやつて來た。

酒になつてからも、Nは決してその昔話には觸れなかつた。それに政代に對する態度でも、別に變つた形はなく、中年の女に對する禮を失はない程度で、いかにも世間馴れた、外交に巧みな、話の上手な紳士をKは發見した。昨日、鑛山に行つた話などが頻りにその口から出た。

『あそこに、もう少し好い事務所をつくと好いんだが……。何うも、狭くつて汚くて爲方がない』
かうNが言ふと、政代は、

『そんなことはないぢやありませんか。汚いことなんかちつともないわ。好いところですよ』

『それはところとしては好いんですよ……。眺望だつてわるくはないんですよ。何うも狭くつて……。私が一人行つて泊る設備すら、まだ十分にはないんですよからな』

『防寒の設備は？』

かう盃をさし乍らKが訊いた。

『防寒の設備なんか出来てゐるもんですか。冬は留守番が隅の方にあるばかりで、あとは閉めつきりです。あそこも、せいゝ今月一杯ですな』

『さうですか、それぢや困りますな……。もう少し何うかなさらなけりや』

『來年からは、何うかしなけりやならないでせう……。仕事だつて、もう少し發展させる豫定ですか
らな——』

かうした平凡な話の中にもKは決して細かい觀察の眼を放たなかつた。かれはあらゆる空氣から、氣分から、眼から、態度から、その中に藏された祕密を嗅ぎ出さうと注意してゐた。しかし、いつまで行つても——かなりに酔けた酒になつて行つても、Nの態度は始めと少しも變らなかつた。Kと政代との

間についても、成るべくそれを認めないやうに、またそれを認めてもつとめてそれに觸れないやうにしてゐるらしく見えた。Nが政代に話しかける時は、いつも谷山さん、谷山さんとその姓を呼んだ。

『谷山さんなんか、男まさりだからな。男の行けるところなら、何處にだつて行けるんだから……。』

さう思ふと美しい人は得ですな……。誰だつて、美しい人には、優しくしますからな。何んな遠い異郷の地に行つたつて、美しい人に辛く當る者はありませんからな』こんなことを言つてNは笑つた。

『でも、心細くないことはありませんわ』政代はKの方をちらりと見るやうな形をして、いかにも親けに言つた。

矢張、しかし、何處かに不自然な、不愉快な、また不機嫌な空氣が渦を卷いてゐることを否定することとは出来なかつた。従つて、何ぞと言ふと、席はすぐしらけかゝつて來た。それを政代は一生懸命に、つとめて陽氣に、快活にするやうにと心がけた。政代は北京での自分の失敗談等を持ち出した。

いくら一緒にその心持を雜り合はせやうと試みても、また、いくら二人の男の間に、何處かに共通點を認めさせやうと骨を折つても、しかもそれは到底無駄な努力であるといふことを政代も次第に痛感するやうになつて行つた。急に、政代は溜息をついたりした。後には政代はぐつたりしたやうな疲勞した心持で、酒にわる赤くなつた二人の男の顔を見較べた。

政代はひとり手にまたさうした徑路になつて行つたことを悲しんだ。さういふ徑路は、さういふ苦悶は、またさういふ風に忽ち三つの心の巴渦になつて行く形は、何うしてもかの女には避けることが出来ないであらうか。何うしてもかの女には免るゝことを得ないのであらうか。考へて見ると、今までのかの女の閱歴を取巻いてゐるものは、すべてさうした三つの心の巴渦であつた。いつもかの女の周囲には二人以上の男がゐるた。

時にはそれが何等かの因縁のためのやうに思はれることもないではなかつた。ある人が言つた言葉、それはかの女の薄情に對して眼をむき出すやうにして叫んだ言葉であつたが、その言葉がをり／＼氣味わるくかの女の頭に蘇つて來た。『忘れずに覚えてゐる……。さう言ふ量見なら、一生さういふことを繰返さなければならなくなるから。三つの心がいつまでも屹度ついて廻るから。出刃庖丁でも刺されて、死ぬまではずいて廻るから……』

つひ、十日ほど前、Kに向つてひとり手に、避くべからず起つて來たと同じやうな戀心が、矢張りNに對して熾んに起つて來るのを感じた時には、かの女はいくらか恐ろしいやうな氣分にすらなつた。この前、東京にゐた時にも代議士と貿易商の紳士との間に、さうした突詰めた形がいつとなしに出來て來て、其のため板挟みになつて、それで一時支那に身を躲さなければならぬやうになつたことな

どを考へると、無闇にNに身を任せて行くことは出來ないやうな氣もしないではなかつた。政代は一時つとめてそれを避けるやうにしたことを思ひ出した。

『だつて、さういふことには、もうお互に厭きてるぢやないの……。つまりませんものね』

わざと冷靜を表面に装ふやうにして、政代は言つた。

しかし男心は容易にそれを承認しやうとはしなかつた。それも或は一方にKといふものがあるなかつたなら、それほど熱心にNも出て來なかつたかも知れなかつたのであつた。單に昔、關係した女くらゐなところで、何の事もなく通過し去つて了つたかも知れないのであつた。しかし、今になつては、最早手を引いて了ふことは出來ないやうな熱烈さをNは次第に持つて來てゐた。否、政代の方にしても、表面ではさういふ風に冷靜を装つて見せてゐるけれども、しかもその内部が、かなり烈しく燃え出して來てゐるのをNも見遁すやうなことはしなかつた。

『一緒に東京に歸らうぢやないか。これからは、滿洲や朝鮮は、とても寒くつてゐられやしないよ。なアに、鼻の嫉妬なんか、何でもありやしない……。あの時分から比べれば、僕だつて、社會的に出て働いてゐるし、年だつて取つたからね』

かうNが言つても、

『厭、厭！ 私はまだ東京なんかには歸れない……』

かう政代は頭を振つて見た。

『何故だえ?』

『理由は申しませんが、本當にさうなんですの。東京になんか、まだ歸れないんですの』

『恨まれてゐる人がゐるんだね』

その時はそれきり黙つてゐた。しかし、何うすることも出来ないその戀心——その戀心の中には、今までの男心の恨みやら呪ひやらがちやんとかくされて入つてゐると思つたけれども、しかも、何うしても、その戀心を捨て去つて了ふことは出来なかつた。

(恨まれても爲方がない、呪はれても爲方がない……。また、其ために、何んなに辛い苦しい思ひをしたつて爲方がない……。また、あの男が言つたやうに、そのために、終には生命をも捨てなければならぬ様になるかも知れない、けれども、それだつて爲方がない) 次第にさういふ風な熱情的な心持の方へと政代は伴れられて行つた。

『夕方までに歸れば好いだらう? おそくなつたら、誰かに送つてよこさせるから』Nはかう言つて頬に同行を勧めたけれども、政代はそれには容易に従はうとはしなかつた。

『矢張、氣が咎めるかね?』

『そんなことはないけども——』

『なら、好いちやないか……。あそこいらまで散歩するには、持つて来いつていふ天氣ぢやないか?』

『さうね——』

それでもまだ政代は二の足を踏むやうにした。しかし、行つて見たくないことはなかつた。久し振で、Nと歩いて見たくないことはなかつた。政代は其處から此方に出て来て、大連に電話をかけて見た。

Kはゐなかつた。代理にM氏が出た。『あ、谷山さんですか。お久し振でしたね……。一度、そつちにあそびに行きませうか』などと言つた。M氏の話では、Kは用事で今朝から旅順まで行つて留守だといふことであつた。今夜は歸つて来るか何うかわからないといふことであつた。それは無論戲談半分に言つたのであらうけれど、此頃旅順にお馴染が出来てゐて、かなり深い仲になつてゐるらしいことなどをM氏は笑ひながら言つた。しかし、政代はそれに答へずに、『本當にいらつしやいねえ、近い中に……。待つてゐますよ』かう言つて電話を切つた。

やがて政代はNの室へと入つて来た。

『ちや行つて見ませうか?』

『行くかえ?』Nは嬉しさうにして立上つて、『それは難有いな……ひとりぢやつまらないと思つてゐたから』

『天氣が好う御座んすからね』

政代はわざと顧みて他を言ふやうにして、そのまゝ窓のところに行つて、初冬の美しく晴れた午前の日影をなつかしむやうにして眺めた。

Nもやがてそこに来て、肩を並べるやうにして、『もう、今日なんか、満洲での小春日の最後だね。霜が日増しに深くなつて行くからね。それに、風が出たと來ちやとても、満洲は歩いてなんかるられやしないからね』

『それはさうでせうね……』

で、二人は揃つて出懸けた。見送りに出て來たお増が、『夕方迄にお歸りにはなりますね?』と訊くと、『え、え、歸りますとも……。唯、散歩にちよつと行くだけですから……』かう政代は答へて、そして平氣で出て行つた。

二人はいかにも睦じさうに見えた。或は新建の人家の竝んでゐるやうなところ、或は矮鶏が二三羽餌を啄いてゐるやうなところ、また時には、支那の民家の土壁に楊柳が垂れ下つてゐるやうなところ、さういふところを次第にひろくとした野の方へと向つてかれ等は歩いて行つた。駱駝の脊のやうな形をした鞍山は、くつきりと晴れた碧い空に——満洲でなければ見ることの出来ない碧い空に掠したやうに低く靡いて、遠くの黄褐色をした、うね／＼と折れ曲つた路には、支那苦力が長い鞭を翳して、頼に荷物を満載した騾馬を叱してゐるのが手に取るやうに見えた。

あるところに来て日影が眩ゆいといふやうに、政代は黒い地に白く花の模様の縫ひのしてあるバラソルをサツと展げた。

『でも、今時分になつて、こんなところをかうして一緒に歩かうなどは、少しも思ひませんでしたね?』

『本當だね』

『だからわるいことは出来ないのね。何處で何んな人に逢ふかわからないから……』
これにはNは答へなかつた。二人は縫れるやうにして歩いて行つた。

Nは笑ひながら、

『それで、何うするつもり? すつと此方にゐるつもり?』

『まだ、きまつたわけぢやありませんけどもね、何うしても、さうなるだらうと思ひますね』

『寒いぜ！ 此方は？』

『さうですつてね、内地から来たものには、最初の一年は随分辛いさうですね』

『辛い以上だよ』

『貴方はゐらつしたことがあるの？ 冬？ いつ？ それは？』

『さうだね……』 少し考へて、『この鑛山の初めて計畫された時だから、かうと、もう去々^{おととし}年になる……』

『……』

『さう？ 此處で冬を越したことがあるの？ 大變でしたでせうね？』

『何しろ、冬になると、あの温泉場だつて十分な設備がしてあるといふわけではないからね。あそこだつて、とてもゐられやしないよ。だから、用がすむと、すぐ大連まで歸つて行くやうにしたよ』

『大連なら、大丈夫？』

『大連だつて、寒いね。骨にまで滲み透るやうな寒さだから……。それに、風が切られるやうに冷めたい。まア、しかし、あそこなら設備があるから、ゐるにはゐられるけれど……』 言ひかけて笑つて、『矢張り東京に歸れないわけがあるんだね……』

『さういふわけでもないんですけども、東京に歸つたつて評判ばかりわるくつて、誰も相手にしては呉れませんか……』

『そんなことはないだらうがね……』

Nはそれきり黙つて歩いた。路は次第に川の方に下りる斜面へとかゝつて行つてた。

Nにしても、政代にしても、もつと深く話を進めたいとは思はないではなかつた。しかし二人ともこれから先には、容易に入つて行けさうにも思はれなかつた。それに、その境は、一度かれ等が入つて見たところだけに、一層觸れ易くてそしてまた入り難いやうな形があつた。Kについての話も、Nの口から何遍となく出かゝつては、また何遍となく飲み込まれて行つた。

ところが思ひ切つたやうに、突如としてNは言つた。

『餘程、長いのかね？ もう……？』

『何が——？』

『何がつて、わかつてゐるぢやないか。今世話になつてゐる人さ——？』

『Kさん？』

『さうさ……』

Nは笑つて見せた。

『世話になんか、まだなつてはゐないわ。唯、この夏中、大連にゐた時分、大變親切にして呉れた人には人だけでも……？』

『だつて——？』

それは承認が出来ない、女中達からも多少きいてゐるといふ顔の表情を、Nはして見せた。政代はわざと平気で、

『それはね、さう思はれたつて爲方がないにはないわ……。しかし本當に、世話になんかまだなつてゐないのよ』

『而し、立派な紳士だよ、Kは』半ば真面目に半ば笑を含んだやうにしてNは言つたが、すぐ突込むやうにして、

『でもしやうがないもんかな？ 何んなところに行つても、相手がなくつてはゐられないもんかな？ 女は？』

『だつて、男だつて、さうちやありませんか？ 同じことですよ』かう言つて政代は笑つた。

『男と女と同じにされちや堪らないね』

『何うして？』

政代は真面目になつて問ひ返した。

『まア、好い、好い……』話が理窟になつて來るのを避けるやうに、また、曾てさういふ理窟で油を取られたことがあるのを思ひ出しでもしたといふやうに、Nはそそくさと其自分で持出した話を取消す

やうにした。

氣が附くと、二人は既に斜坡の半を歩き盡してゐた。下には川が白く、ところどころに洲をつくつて丁度布でも晒したやうに美しく流れてゐるのがはつきりと水彩畫でも展けた様に見渡されてゐた。

『もう歸りませうか？』

政代はわざとこんなことを言つて見た。

『何うして？』

『何うしてツて、別にわけもないけども……』

『氣にさはつたかね？』

Nは笑つて見せた。

『氣になんかさはりはしませんよ、貴方の我儘は昔から知つてゐますから……』

『これは恐れ入つたな』

『だつて、さうちやありませんか。貴方が我儘で、私が我儘で、それで別れることになつたんですも

の……』

『でも、もう僕の方は、昔のやうに我儘ぢやなくなつたよ。おとなしくなつたよ』

『何うだか?』

『それはたしかだ……。誰にでもきいて見たまへ。君の方は何うかわからないけども……』笑つて政代の目の中を覗き込むやうにして、『今の態度で見ると、君の方が矢張昔のまゝらしいね』

『さうかも知れませんが……』わざとすねたやうにした政代はさつきの主張を改めずに、『本當に歸らうぢやありませんか』

『まア、そんなことを言はずに……』

『貴方は何うしても行かなくつちやいけないの?』

『行かなくつちやならないといふこともないけども、行けば行く方が好いんだ……』

『昔の情婦なんか伴れて行かなくつたつて好いぢやないの?』

『まア、好いつていふのに……。矢張氣にさはつたんだね。それなら、あやまるよ』

『それに、またあの川の徒渉をしなくつちやならないんでせう? 足袋を脱いだり何かすることを思

ふと、厄介なもの——』

政代は靜かに美しく流れてゐる川の方に眼をやつた。

Nは黙つて、あたりを見渡したが、『あ、好いことがある……。そら、あそこに、支那人が來たらう。

あいつに頼んで負つて貰ふ方が好い……。』かう言つて、それを頼みにNは一散に其方の方へ走り出した。

『駄目よ、駄目よ』

かうあとから政代は呼んだ。

走り出したのを中止したNは、

『何うして?』

『だつて、あんな汚い支那人なんか、私、負されると思つて?』

『さうか——』それもさうだといふ表情をNはしたが、『それぢや僕が負つて渡つてやらう……。?』

『駄目よ』

『何うして? ちつとも駄目なことはないぢやないか。昔の情夫だもの、好いぢやないか』

『駄目、駄目』

かう笑ひながら言つて、政代はそのまゝ急いで川の岸の方へと下りて行つた。

そこには、葉の半ば落ちた川柳だの、赤い實のをりく交つて見えてゐる草藪などがあつて、美しい明るい日影が流るゝやうにさしわたつてゐるが、政代がそこに立留つて足袋を脱ぎかけてゐると、急いでその傍に寄つて來たNは、

『まア、好いから負されよ……。何も、そんなに、隔てを置かなくつたつて好いぢやないか』

『でも——』

『すまない人があるかね？』

『そんなに負ひたけりや、勝手にお負ひなさいよ』

本性を露骨に出したといふやうにして、政代はそのまま、Nの肩に身を寄せた。何方かと言へば小柄な政代はやがて軽々とNの脊に載せられて、小春日の美しく照り添つた川を此方から向うへと越して行くのが見えた。

(大正九年十一月)

こころの珊瑚

こころの珊瑚

『来なくつても好いよ』

『でも、そこまで一緒に行つて見たつて好いでせう?』

(でもお前と一緒に歩いてゐるところを誰かに見られるとわるいから……) 小鹿野はさうも言へないので、爲方なしに今年七つになる妹の兒の鞠子を伴れてお弓があとからやつて来るのに任せた。

『ずつと先きの?』

あとから追ひすがるやうにして早足にお弓はついて来て言つた。

『あそこにそら小さな公園見たいなものがあるだらう? あそこから坂を上つてまた向うに行くんだ

よ……』

『それぢや随分先きね』お弓はかう言つたが、ともすれば後れがちになる鞠子を待合はせるので、小鹿野もをりをり立留まつてそれを待つてやらなければならなかつた。

『でも、今日はるらつしやるわね?』

『さア……』

『だつて、ちゃんと昨日さう言つて来たんでせう?』

『それは言つて来たんだけど、昨夜もし歸らなかつたとすればダメサ』

『それはさうね』お弓はちよつと途切れたが、『奥さんと一緒だと、芝居でも見にいらしたのかも知れない?』

『さうかも知れない……。さうだとすると、ダメだね』

しかしその小鹿野の訪ねて行く小川といふ人のことについて、お弓は別に深い興味を持つてゐるのも何でもなかつた。お弓は話をすぐ別な方に持つて行つた。

『ほら、こゝよ……』

通りがやゝ曲りかけたところに大きな三階建ての旅舎があつて、その前に松が五六本並べて栽ゑてゐるのが小鹿野の眼に映つた。

『私、去年來て泊つたのは此處よ。ちよつと好い家でせう。二階から海は一目ですよ……』

『此處だね? そのせい澤な細君のゐたと言ふのは?』

『さう……』お弓は軽く點頭いて見せた。しかしその細君の印象はその時曾て熱心に話したお弓よりは、今ではむしろそれを聞いた小鹿野の頭の中の方に餘計はつきりと残つてゐた。それは美しい、ほつそりとした二十七八の人。眼の綺麗な、上品な、ちよつと見ると貴族の生れかと思はれるやうな人のやうな髪。すき透るやうな肌。それが二三日ゐる中に、何うしても素人ではないといふやうに見える。出て來て、後には新橋の好いところで、落籍されてから、胸の方が重くなつて、それで此處に療養に來てゐるのだといふことがわかつて來た。それを聞いた時には小鹿野は一種異様に頭が緊められるやうな氣がした。美しさのために、またその捨鉢な心持のために、一層それがかれの心を惹くのであつた。鏡に映つたすらりとした姿。また時には大きな洗盤にひろくぱつとひろがつた黒髪。かと思ふと、キリ、とひきつめて無造作に自分でたばねた髪。一時だつて心がちつとしてはゐないやうな表情。それは間接にお弓から聞いただけだつたけれども、それでも自分でそれを見たよりも一層かれの想像を誘ふのだつた。かれはさういふ美しさのむざむざと亡ぼされて行くことを惜んだ。またさうした美しい繪がある短い間そこに人知れず展けられただけで、忽ちこの世界から永久に消えて行つて了ふであらうといふことを惜んだ。

『もう、あの人、この世の中にはありませんね』

『さうかな!』

『可哀相ね……』

それは可哀相と一言に言つて了ふにはあまりに複雑した感情だつた。かれはそれを聞いた當座、さういふ美に面して立つた男のことを考へたことを繰返した。その男は幸福とは言へないまでも、ある稀有なものを見たといふ心持で胸が一杯になつたであらうと想像した。實際に打突つて見れば、それはもつと暗い、佗しい、悲しいものであらうけれども——また其打突つた男の如何に由つてはたゞ單なる悲しみを味はつたに過ぎなかつたかも知れないけれども、しかも小鹿野にはさうは思へなかつた。

——お前、其旦那を見た?——

——え、見ましたとも……。立派な、肥つた旦那よ——

何でもそのせい澤な美しい細君は、土曜日ごとにその人のやつて来るのを指折數へて待つてゐたといふ。そのいぢらしさは見るに堪へないほどであつたといふ。二階の欄干のところ立つてはよく夕暮の海を見てゐるといふ。濃い空色の襟が何うしてかいつもはつきりと眼についたといふ。

『何しろ、あの時分、もう随分わるかつたんですからね?』

『さうかな』

『可哀相ね、あゝいふ人は? 新橋でも評判な綺麗な人だつたのよ。これからといふところですからね』

『でも、大きく考へて来れば、生きてゐたつて、その美しさがいつまでもあるつていふわけぢやないんだから……。ぢき皺が寄つたり、髪がうすくなつたりするんだから……。それを思ふと、そんなことを考へたつてしやうがないやうな氣もするけれど……』

『何でも、その世話をしてゐた人は、子爵か何かよ……。私、名を聞いたけど、忘れちやつた……。』
鞠子がまた路傍にしがんで了つたので、お弓はもどつて行つていろいろに賺したりなだめたりしてやつと此方へと伴れて来た。

お弓は去年もこの海岸でひと夏を暮した。さうかと言つてお弓の體が悪いものではなかつた。鞠子が何うも弱いので、今の内海岸へでも行つたら丈夫になるだらうと醫者が言ふので、それでわざ／＼此處に伴れて來てゐるのだつた。去年はその旅舎に二十日ほどゐたがあまり不經濟なので、別に漁師町に近く、ある二階屋を借りて住んだ。小鹿野はそこにもよく出懸けて行つたのだつた。

通りから海岸へおりて行く路の角に來た時小鹿野は言つた。

こころの珊瑚

『お前、此處から濱へおりて、ぐるりとひと廻りして歸つたら、何うだえ？』

『さうね』

お弓はちよつと立留つたが、

『もう少し行つちやわりの？』

『それはわるくはないけども、これから先に行つたつて何にもありやしないよ』

『何にもなくつたつて好いワ。もう少し行つて見たいワ……』

爲方なしに小鹿野はすたすた歩いた。

小さな公園があつて、そこには鐵の低い柵見たいなものが、ぐるりと取廻されてあつた。

三

だらだらとした坂を向うに上つた時は、お弓が一步々彼の姿に眼を留めながら——何かそこにかくされた秘密でもありはしないかといふやうに、また此處に住んでゐる小鹿野の友達とその細君とが何ういふ人であるかを知りたいといふやうにしづかに此方にあとを追つて來てゐるのを目にした。

小鹿野はまた小鹿野で、さうした女をその背後に持ちながら、昔の友達をたづねて行くといふことの上一種の得意さを感じた。おそらくかれは、かの女が此處に來てゐなかつたら、こんな平凡な、ブル

ジョワばかり多い海岸などにはやつて來なかつたであらう。またかうして此處に住んでゐる友だちを昨日も今日も訪問したりするやうなことはなかつたであらう。兎に角かれに取つては、人知れずかの女をその背後に持つてゐるといふことが幸福だつた。またさういふ風にして此處に來てゐながら、それを誰にも知られずるといふこともかれに一種の興味を持たせた。

坂の上になで行つてかれはもう一度振返つて見た。

お弓が手を振つてゐるのが小さく見えた。

海がすぐ右の方に見えてゐた。別に他の奇はなかつたけれども、それでも長い汀線に波が打寄せたり、松林が疎らに砂山に靡いてゐたりするさまはちよつとかれの心を惹いた。しかしかれの立留つたのもそんなに長い間ではなかつた。かれの訪問して行く友だちの家は、すぐそこから右に入つて行つたやうな位置にあつた。

かれはやがてその友だち夫婦を、松林に取圍まれたその別荘風な家の中に發見した。

『ヤ、昨日も來て呉れたつてね……。めづらしいね』

丈の高い、元氣な小川は、いつもの快活な調子で、

『何ういふ風の吹き廻しか知らんが、昨夜おそく歸つて來ると、君の名刺があるんだ！ それを見て惜しいことをしたなッ！ と言つてゐたのサ。明日また來るツて言ひ置いて行つたさうだけでも、何う

かな……。あの忙しい君が、こんなところに三日も四日もゐるなんていふことはあり得ないことだからな。よく来て呉れた！ おい、お高！ 小鹿野君が来たよ』

呼ばれて、昔馴染の細君も厨の方からすぐ出て来たが、その身のまだ身じまひもしないのを氣にするやうに、『まア、私はこんな風をして……』

『昨夜は木挽町ですか？』挨拶がすむと、いきなり小鹿野がきいた。

『いゝえ、そんなのんきなんではないのです。ある人の仲人を頼まれましたね、宅では断れつて言ふのを、何うしても断り切れなくなつて、それで出かけて行つたのですよ。小鹿野さん、此頃は盛んですね……お肥りになつた』

氣の置けない昔の感じが未だにその細君の周圍から取除けられずになつかしく残されてあるのだつた。

『それにしても、何うしてこんなところに？ それも昨日も今日も……』

『イヤ、別に用もあるにはあるんですよ。そら、この向うに木川田が來てるでせう？ あの女房が來い來いつて度々言つて來るし、丁度、今は麥なんかも黄くなつて、野や山の景色も好いだらうと思つてね。それに、君だちにも久し振りで逢ひたいし……』

『その次手といふわけだね』小川は快活に笑つた。

四

『それで、もう木川田さんへいらしたの？』これは細君だ。

『昨日この歸りに行つたには行つたんですけども、生憎女房も主人公も二人とも留守でね。……餘程、それなりに東京へ歸つて了はうかと思つたのサ。しかし折角來て此まゝ歸つて了ふのも惜しいしね。歸ればまたいつ出て來られるかわからんしね。思ひきつて一晚海岸の旅舎に泊つて見たよ』

『何處だね？ やどは——？』

小川に訊かれて、

『何アに、そこらの小さな宿屋サ。濤の音が夜中きこえて好かつた……』そのくせ小鹿野はその旅舎の二階の下の奥の一室で、蚊帳の吊手などをチャラチャラさせながら、その青い紗を透してお弓の取繕はない木地な美しさを樂しみ見たりしたことを思ひ出してゐるのだつた。

『木川田の新しい奥さんツて、美しい方ですつてね？』

細君はわざと自分の夫の方を向いて訊いた。

『うむ……』

小川は煮え切らない返事をした。

『木川田に逢つたことはないかえ?』昔満更知らぬ仲ではなかつたし、一停車場離れたぐらゐの近さにゐたし、何處かで逢つたことはありはしないかと小鹿野は思つたのだつた。

『ううむ……』

と小川は頭を振つた。

『さうかえ、まだ逢はんのかえ? 女房も知らない?』

『知らん——』

その夫の常の快活さに似ぬぶつきら棒の返事を傍から細君が補ひでもするかのやうに、

『あの方評判ですな……』

『女房ですか……。さうわるい女ではないと僕は思ふんだけど、何うも世間では評判がわるいですね……。それはコケツチツシなところは何うしたつてある女だけでも……』

『でも綺麗な方は何と言つても得ですな』

『それは何うしても異性が相手にしますからね』

かう言つて小鹿野は氣の置けない調子で、『僕もさういふ形からは餘り進んで來たいとは思はなかつたんだけど……先生がたの新婚生活を見せつけられるのもあまり好い心持はしなれないと思つたけれども、あの女房が來い、來いッて頻りに言つて來るし、木川田だつて満更知らぬ仲でもないんだからと思つて

ね。奥さんなんかにはもうわかると思ふが、何處まで行つてもお互同志は對照になつてゐるんですからね。綺麗な女は人の細君だつて何だつて好いんですからね……』

『それはさうでせうね、男の方には?』

『男の方ばかりぢやありませんよ。女だつてさうですよ。僕の婢なんかだつて、綺麗な男の客の來たのと、さうでないのとは非常に違ふですよ……。それはね、若い中なら、さういふ風に區別を置くことは道德上肝要なことかも知れないが、もう僕ぐらゐの年輩になれば、さういふことはごく自由ですからね。人の女房の美しさだつて十分に見て楽しむぐらゐの餘裕はもう出來て來てゐますからね』

『いつもの議論だね』

小川は快活に皮肉に笑つた。

『いや、議論ぢやないよ。事實だよ』

五

丸窓から松林を透して海の微かに見えるやうな室で、かれ等は二時間ほど過した。其間に細君は蝦の鬼がらの皿を運んで來たり、刺身の皿を持つて來たり、盃の他にビールのコップを其處に置いて行つたりした。

かれ等は同じ年輩の共通した言葉で流暢に快活に話した。藝術上の話も出れば、政治經濟の話なども出た。勞資の問題にも、他から見たら生温く感じられるであらうと思はれるぐらゐな程度で軽く批評的に觸れて行つた。しかし何と言つても、話は男女の問題の方へと落ちて行きがちだつた。小川は何方かと言へば堅く、それは若い時には遊蕩兒らしいところもないではなかつたが、細君を持つてから、しつかりとそれにつかまれてゐて、子供がないだけに容易にその把握から脱れて來ることが出來ないやうに見えた。『いや、僕は一體そつちにかけては體がつゝかんだよ。丈も高いし、肥つてもゐるから、人はさうは思はないけれどもね……。その點では、とても君とは太刀打が出來んよ』こんなことを口癖のやうに言つたけれども、小鹿野の考へでは、やつぱり細君との中が好いたためだらうといふ方に傾いて行つてゐた。子供のあるなしの話なども出て來た。

『子供があるのも、別に羨ましいとも思はんけども、細君はさびしさうだね』

『それはさうだらう？　しかし、そのため仲が好いから好いやね……。』

『仲が好いか何うか。君がちよつと來て見たつてわかるもんか？』

そんなところから、話はまたいつか木川田の妻の話に落ちて行つた。

『一體、木川田といふ男が存外甘い男なんだな……。』

小川の説では、今にひどい目に逢ふから見てゐる！　と言ふのであつた。女なんか信用が出來るもの

か。ことにあの女なんか……。あの女だつて、木川田がおやぢの遺産を此頃手に入れたのを知つてゐるので、それであゝいふ風にくつついて行つたので、戀愛とか何とか言ふやうなものではないといふのであつた。かれはすぐ言葉をつづけた。『一體君の説は少しルーズだよ。甘すぎるよ。女をさういふ風に見るといふことには賛成が出來ないな……。それも田口や木崎のやうに、それ専門といふなら、それはいくら甘くたつて、それが女を籠絡する一つの手になるわけだからしやうがないけれども、君のはそれを正面に持つて行くんだからね……。僕なら女を五ほども信じないのに、君は十以上も信じやうと言ふんだからね。あんな女なんか信用が出來るものかね……。』などと小川は否定した。

小鹿野はしかしそれに賛成は出來なかつた。かれには小川が、美しさを、または女のコケチツシなところを、そのアダルトリカルなところを全く撥無にしてゐることが肯がはれなかつた。それは細君にしつかりと把握されてゐるためだとばかりは斷定してはゐなかつたけれども、やはりそこに體に入れて見ないために——更にくだけて言へば、本などでは讀んで知つてゐても、ぴたりとそれに觸れて行つてゐないので、それで目の前に美があつてもそれに向つて出て行けないのだといふやうに小鹿野は言つた。

『信用が出來る出來ないで女に引かれて行くのぢやないからね。もつと手前だからね。美しさの價値、つゞいては淫蕩の價値、耽溺の價値と言つたやうなものだからね……。さういふものを取去つたら、異性の對照として女は丸でゼロになつて了ふからね』小鹿野はそんなところまで話を持つて行つた。

六

晝飯を御馳走になつたりして、興も盡きて暇を告げやうとすると、

『そこまで送らう？ 停車場に行く近道があるんだよ』と言つて、小川は無雑作に昨日買つて来たらしい新しい麥稈帽をかぶつてついて来た。

通りからすぐ横町に入ると、水に乏しい漁村の人だちの皆なして汲むらしい井戸などがあつて、それからずつと路は竹藪などに添つて向うに出て行つてゐるのであつた。

『こんなところにこんなぬけ道があるのは知らなかつた……』小鹿野はあたりを見廻しながら、『君はここへ来てから、もう三年だね？』

『うむ……』

『もう半分この土地の人間になりかけてゐるね？』

『だから、田舎はいやなんサ。これでも成るだけ東京に出るやうに出るやうにとはしてゐるんだけどもね……。不思議に氣持が地方的になるんで困るよ』

『でもものんきだから好い。それに君だちは仲が好いから好い』

『また始めたね……』

小川はいやな顔をして打消すやうにした。

で、かれ等は黙つて歩いた。小鹿野は旅舎に女を置いてゐるといふことに、またこれから訪ねて行くところにも、曾てかれの手の屈くところにあるた女がゐるといふことに一種の得意を感じるからてくてく歩いた。

『あの女は、あそこに来る前に、澤山相手があつたつて言ふぢやないか』

小川は暫く歩いてから、やつぱり氣になるといふやうにまた始めた。

『それはさうかも知れんな』

『君なんか一番よく知つてゐるわけぢやないかえ？』

『別に、さういふところまでは知らんな……。何しろ、さういふことは結局第三者には本當にはわからないといふことになるんだからな？ バトロンは幾人もあつたらしいけど？』

『バトロンつて何う言ふんだえ？』

『あの女の下宿に始終出入してゐた人だちさ……。』一步立入るやうに、『何の彼のつて、生活費なんか補助してゐる中に、それを自分のものにしてやるといふ連中サ』

『關係なしにかえ？』

『それは機微だから、はつきり言へないがね……。女つて言ふものは、さういふところはうまいもん

だからな……。すぐつかまえられて、何うにもかうにもならないやうな女は、男の好い相手にはなれないからな？」

『では、さういふ連中が木川田にしてやられて、とんびに油揚をさらはれたやうに、馬鹿を見たといふわけだね……。何でも、そのため一人とか二人とか断るので非常にもめたつて言ふぢやないか』

『そんなことはあつたかも知れないな』

『君もその一人だつていふ話だつたがな？』

『そんな事はないよ……。』小鹿野は笑つて、『何でも子爵か何かで、あそこへ始終行つてゐた奴があつたさうだが、そいつが多少やかましいことを言つたんだらう？』

黙つてまたかれ等は歩いた。

『その下宿してゐた家つていふのは、土橋あたりだつてきいたが、本當かえ？』

『さうださうだ……。』

『君は行つたことはないのか？』

『來い、來いつて言はれたけどもね、ちよつと危つかしいやうな氣がしてね。何しろあゝいふ女だからね、何う捲き込まれるか知れないからね……。』

『ぢや、君だつて、あまり立派な口はきけないわけだな』

小川は皮肉に笑つた。

七

停車場に来て、

『何うだ、君も行つて見ないか？』

『よさう……。』

小川は突つ放すやうに言つた。

『好いぢやないか。木川田だつて君は知つてゐるんだし……。』

『まア、よす……。』

今度はきつぱりと断つた。

で、爲方なしにそこで別れた。丁度改札口が明いてゐたので、小鹿野はすぐプラットフォームへと出て、やがてやつて來た汽車へと乗つた。動いて行く窓からは、小川がステッキをついてこつこつ詰らなさに歸つて行くのが見えた。

ひとりになると、これから訪ねて行くその女の姿がびたりとかれの胸に開いて來た。それはたとへて見れば、今までは半分しか大きな花瓣が開かれてゐなかつたのに——むしろいろいろなものに遮られて

十分にそれと相面することが出来なかつたのに、さういふしやうがい物がなくなつたので、それでぴたりとその花瓣に向ふやうになつた。赤い赤い花瓣に……。かれはかの女を考へる時、いつもかれとかの女との間に常にお弓が挟まつてゐたことを思ひ起した。危ない時になると、いつもお弓が出て来てそれを援けた。(兎に角、俺にはお弓がある……。その戀がさめたわけではない。否、むしろそれは濃かにさへなりつゝある。今更そんなことをして見たところで爲方がない……。)かれはいつもさう思つてそれを打消した。否、そればかりではなかつた。これから訪ねて行かうとする女も、かれとお弓の仲をかなりによく知つてゐて、「お弓さんツて仰しやるんですツてね？」などと笑ひながら言つたことさへあつた。

(何うも戀といふことは不思議なもんだ……。ひとり完全に所持してゐれば、それで好きさうなものなのに、やつぱり美しいものがその前に出て来れば、それに引かれて行くやうになるのだから……。)こんなことをかれは常に考へた。

つゞいてかれは昨日訪問して行つたことを頭に浮べた。二人ともゐなかつたから好かつたけれども、停車場からそこに行く間、木川田に對して一種異様な感じを持つたことを小鹿野はくり返した。(何とか思ひやしないか……。平生お互に顔は知つてゐても——またその二人の結婚の時には平氣な顔をして列席してはゐても、木川田ひとりならわざわざ出かけて来やうとは思へないのに、かうして二日もつゞけて出かけて行くといふことは！それは女から度々はがきなどをよこして、私たちの生活を見て下さいな

どと言つて来たからではあるけれども……。木川田の奴め！何とか思ひやしないかな……。)またしてもさうした考へがかれの胸に萌し始めた。

さうしたかれの眼にはのどかな五月の野が映つた。麥の黄熟した畠にをりをり夏蕎麥の花の白く雜つてゐるのが映つた。丘に凭つたり小さな川に沿つたりして別荘風な赤瓦で葺いた瀟洒な家屋の散らばつてゐるのが映つた。そして一方には松が竝んで、向うが海であるといふことがその打寄せる波の音で知れた。

(不思議なもんだな！)

またかれはかう自分で自分に言つて見た。何となく微笑まれるやうな氣がした。小川のやうな生活もある。あれであの男は満足してゐる。かと思ふと、かれのやうに行けるところまで行つて見やうと思つてゐる生活もある。また木川田のやうに——考へかけて小鹿野は變な氣になつた。

八

昨日の路を再び歩いた。橋を渡つて半分野菜畠のやうなところを通つて、別荘と言つても小さな、時にはバラツクのやうなトタン葺の家屋のあるところを少し行くと、丘添ひの隅のやうなところにある木川田の寓居があつた。

小鹿野はそこに木川田だけを見出した。肥つて脂ぎつてわるくにこにこしてゐる彼を見出した。「アア」と言つて出て迎へたその態度にも何處か不自然なところがあつて、此方でさう思つてゐる故か餘りに好い感じで迎へられた客ではないといふことが直覺的に感じられた。かれは不思議な氣がした。あの時以來——春子が木川田との同棲生活をかれに打明けた時以來、その時まで持つてゐた感じとは丸で違つた感じを、更に詳しく言つて見れば、さつき小川が皮肉に言つたやうにやつぱり油揚を薦にさらはれたやうな感じを、何となく不快な、いや單純にさう言つて了ふことも出来ないやうな細かい感じを——その感じに打突ると、わるく平生の冷靜を失つて了つて、ぢきくわつと體が熱くなるやうな感じを木川田に對して持つやうになつたのであつたが、それがその顔を見ると、またもくもくと頭を擡げて來た。

『昨日お出で下すつたさうですが、あいにく失禮しました……』

木川田は小鹿野がさういふ風に感じてゐるなどは思はず、かう丁寧な挨拶した。

『いや……』

『それに遠いところをわざわざ御出で下すつたのに……』

かう言つて少し間を置いて、

『實は今日は、お待ちしてゐなくつてはすまないつて言つてゐたんですけども……是非顔を出さなければならぬ用がありましたね……それさへすませばもどつて來るからお待たせして置いて呉れつて申して行きました……』

『さうでしたか』

いくらか不愉快になつた心持を小鹿野は押へるやうにして言つた。

『もうぢきですから……』

そこに碁盤の上に置いてある時計を木川田は身を長く延ばして手に取つて見て、

『二時半の汽車にはおそくも歸つて來るつて言つて行きましたから……』

『いや……』

小鹿野は袂からハンケチを出して、途中歩いて來て汗になつた顔を徐かに拭いた。つゞいて今度は更に眼鏡を取つて、その玉の曇つたのを丁寧に拭つた。

かれは明るい一室をそこに見出した。フランス語の小説だの、労働問題の本だの、澤山積み重ねてある室を雑誌や本が亂雑に置いてある室を、それとは不似合に茶席などに常にかけてあるやうな軸の床にかけられてある室を見出した。それと同時にかれは春子の明るい眉と何方かと言へば小づくりな姿とをそこに見るやうな氣がした。この室がかれら等の同棲生活の小さな舞臺なのである。かれ等はこゝでその野を前にして、またその黄熟した麥を眼にして暮してゐるのである。汽車の通つて行くのを見て暮してゐるのである。否、曾つてきいたところによると、女が毎日東京につとめに行つて歸つて來る時

間を男が停車場までわざわざ迎へに行くのが例になつてゐるといふのである。

九

その佻びしさをまぎらすやうにして小鹿野は言つた。

『好いところですか……』

『いや』

木川田は長く引張るやうにしてそれを否定した。何しろ冬は暖かで好いが、これからはこの海岸はとも暑くつてたまらないと言ふのである。來月にもなつてかの女の方にひまでも出来るやうになつたら、山にでも行かなければとてもたまらないといふのである。否その一言一句の中にも、またその一舉一動の中にもかの女がいつもついて廻つてゐるのである。それが小鹿野には痛かつた。(さうかと言つて、俺にはあの女は得られなかつたのだ……。もう他の噂になつたものを今更そんなことを思つたつて爲方がない。それほど執心だつたら、何故手取早くそれを自分の方へ引寄せなかつたのだ……。あの時分なら何うでもなつたぢやないか。お弓がゐるからでもあつたらうが、そんなことには頓着してゐなければ好かつたのだ……。その肥つた何方かと言へば無表情な木川田の顔を前にして、小鹿野の頭にはこんなことがぐるぐる廻つた。

木川田と同棲生活をすることは春子が一番先に小鹿野に報告に來たのだつたが、その時の痛かつたことなどをかれは今更に思ひ浮べた。女が平氣で、『それで、私の方でも好いと思ひますし、同棲することにしたのですが……。』と言つた時の女の顔がわるく扁平つたく見えたことを、またわるく淫蕩に見えたことを思ひ浮べた。しかしその淫蕩は普通言はれてゐるものとは違つて、もつと新しいもの、感じであつたことを思ひ浮べた。人間は變なもので、小鹿野や木川田や小川ぐらゐの年格好になると、若い二十代、三十代とは違つて、その女といふもの、一番底にかくされてあるものに深い興味を持つやうになるのであつた。かれ等はそれにも拘らずこんなことを話した。

『さうですかねえ……。そんなですかね』

これは小鹿野だ。

『何しろ、此處等の百姓は田なんかつくりやしませんからね……。皆な野菜ですよ。東京に出す野菜が、かれ等の一年中の生計になるんですからね』

『さうですかね』

『だから、此處等では、田より畠の方が高いですよ』

その女の歸つて來るといふ汽車が白い黄い煙を麥畠の上に靡かして通つて行つてから暫く経つても、春子の姿はそのいつもの畠道に見えなかつた。

『この汽車ぢや歸つて來なかつたかな!』

木川田は時計の上に眼を落して言つた。

『もう何分経ちます?』

『あの驛についてからもう二十分になる……。歸つて來なかつたかな』

木川田もそろそろ對座につかれて來てるので、一刻も早くその歸つて來るのを待つといふやうに、立つて縁側のところへと行つて、暫らくその野道の方を眺めるのだつた。

『このつぎは何時です?』

『三時十分です……。』木川田は縁側から此方へともどつて來て、『今度はきつと歸ります。乗おくれたか何うかしたんです……。あいつ平氣でおしやべりなんかしてゐる方ですからねえ!』小鹿野には其あいつといふ言葉が氣になつた。

10

その次ぎの汽車が過ぎて暫らくすると、その畠道に水色のバラソルが見えて、年にしては非常に派手な模様の金紗か何かを着て、その若々しさをあたりに輝やかすやうにして、かの女がもどつて來た。

『あ! 入らしつてゐますね!』

馴々しく縁側のところで挨拶して、『あついわね。すつかり夏ね……。もう、さつきから來て入らしつたの?』半ば夫に問うやうにして春子はにこにこした。

『さうだね! 一時間ぐらゐ……。もつとなりませんか?』

木川田は顔を小鹿野の方に向けた。

『さう……。そんなにお待たせしたの……。すみませんでしたねえ!』いつもなら表から入つて來るのだが、すぐそこから上つて、木川田に包などを渡して、『だつて、支配人が長い長いおしやべりをしてゐるんですもの……。こつちは氣が氣ぢやないので、時計を何遍もかうやつては見るんだけど……。ちつともわかつてくれないんです……。たうとう二時の間に合はなかつた……。』で、奥に入つて、ちよつとの間にさつぱりした扮装になつて、『でも、本當によく來て下さいましたね……。今日は何かしらと思つてゐたんですよ……。きつといらつしやるつていふお話だつたけども、一晩泊つてまでいらしつて下さるかしたら? もうおかへりになつたんぢやないかしら? 今もあそこを通りながらそんなことを考へて來たのですよ。何う? 私だちの生活は?』

急に碎けて、例のアダルトリカルな笑ひ方を春子はして見せた。

ちよつと何う返事して好いかわからないので小鹿野はどきまぎした。

と、春子はすぐもとの表情にもどつて、『それで、昨夜はあそこの旅舎におとまりになつたの?』

點頭いて見せた小鹿野は、すぐあとをつぎけて『今朝、小川のところに寄つて久し振りて話し込んで了ひましたよ！』

『さう……』春子は長くそれを引つ張つたが、『小川さんには近くゐてまだお近づきにならないわね？』半ば夫の方に話しかけるといふやうにして、また小鹿野の方を向いて、『相變らず、御機嫌は好いでせう。いつも奥さんと御一緒に歩いてゐらつしやるのを銀座あたりでよく見かけますけど……』その言葉のかけには、あゝいふ異性は私などには何の交渉も持たないといふやうな調子があり／＼と讀まれた。そしてそれが小鹿野には何となく微笑まれるやうな氣がするのだつた。

他の妻になつてもまだそれになり切れないやうなところが、かれには面白かつた。何處まで行つてもかの女には家庭といふものがありさうには思へなかつた。家庭の繫縛。子供の繫縛。細君たちのおつき合ひ。そんなものに縛られてゐるには餘りに心が滑らかすぎ、明るすぎ、自由すぎた。『面白いから一緒になるんぢやないの。面白くなくなればいつだつてそこを出て行くわよ。家庭だつて面白けりやつくるけれども、暗い、つまらない家庭なんかつくつたつてしやうがないぢやないの……』まさかさうはつきりとは言ひはしまいけれども、またさう抽象的に考へてもゐないだらうけれども、尠くともさうした氣分がその體の周圍を取巻いてゐるだけはたしかだつた。たしかに朝に夕に、むしろ瞬間に、氣持や感じが複雑に變化して、自分でも持て餘すやうなことが多いらしかつた。そこに小鹿野は一種の氣分といふ

よりも匂ひと言つたやうなものを感じた。否、さうしてちよつとの間話しただけでも——その匂ひを受けただけでも、歸つて來ない以前とは丸で木川田が變つて見えた。甘く、地にまで蹂躪されてゐるやうに感じられた。そして情ないことには、その蹂躪されてゐる男が小鹿野には羨ましいのだつた。

一一

體の關係はなくとも、何等かの機會さへあればすぐ何うにかなつて了ひ得た女が、他の男と同棲してゐるのを見るのは不愉快であると同時に、つらくもあり、また何となく痛いと言つたやうな感じを起させるものだが——むしろ關係のあつたものといくらも違はない感じを起させるものだが、御馳走になつてゐる間も、小鹿野は絶えずさういふ感じに惱まされ通してあつた。

それは内部は何うだかわからない。いろいろなこともあるだらう。しかし兎に角むつまじさうに男がいくらか馬鹿面に見えるくらゐに、女の言ふなりと従つてゐるといふことは、餘り好ましいことではなかつた。酒精の何にも出て來ないのもさむしかつた。春子が一生懸命に、女中任せにせず自分で自慢で拵へて呉れた料理も、木川田が旨さうにして食つてゐるほどに旨くはなかつた。

（さうして見ると、この男がこの女を細君にしたことで、非常に男を下けたと同じやうに、この女もかれが想像してゐるほど——世間でいろいろに問題にされてゐるほどそれほど面白い女ではないのかも

知れない。平凡な普通な女だったのかも知れない。相手がるない申だけさういふ風に猫をかぶつて来たかも知れない……。馬鹿くしい。それをこんな遠くまでやつて来て、二時間も面白くもない男と對坐して調子を合せてるのだ……。むつましくやりたければ勝手にやるが好いちやないか。私たちの生活を見て呉れもいゝもんだ。こんな風に腹立たしくかれは考へながら、銀座の食料品を賣る店あたりから買つて来て料理したわるく鹽からいマカロニを食つたりなどした。

その癖、小鹿野にしても、全然さうした腹立たしさで心が満たされてるといふのでもなかつた。その春子の美しい聲の音楽や、横を向いた時のハイカラな感じや、わるく此方の機嫌を取るやうな微笑や、思ひ切つた物の言ひ方などは細かにかれの體に雜り合つた。かれはそこにひとつの柔かさを感じた。始めて見た時からそのまゝずつとつゞいてる微かな羈絆見たいなものを感じた。お弓が持つてゐないある不思議な美しさを感じた。

曾てかれは春子を評して、『あゝ、いふ女は女がわるいといふよりも、その相手がわるいのだよ。それであゝなるのだよ。つまりあまりに才走りすぎて男運がないのだよ……。相手さへしつかりしてゐれば、あんなことにはならなかつたらうに！』などと言つたことがあつたが、それがまた人もあらうに木川田のやうな男がその新しい相手になつたといふことは、一種の自然の皮肉さをそこに感ぜずには置かなかつた。

『何う？ それで？ 私達の生活は？』

いきなり軽く春子が言つた。

『さア』

『駄目ですかね……。これでも餘程真面目なところをお見せしたつもりなんですがね……。』

春子は快活に笑つた。

『結構だね……。』

『それだけ……。結構だけですか、もつと他に適當な言葉はありませんかね……。何んな批評でも受けるつもりだけでも……。』

『まア結構といふより他しやうがないだらうね……。あまり皮肉を言つて、感情でも害されると困るからね……。』

『さうですかね』

春子は一種わびしさうな笑ひを顔に湛えて言つた。それはやつぱり結婚生活なんかちつとも面白くないと思つてゐるやうな笑ひであつた。

二時間ほどゐて小鹿野は暇を告げた。「まあ好いぢやありませんか」とか何とか頻りに春子が留めただけれども、何うしても歸るといふので、それでは送つて行くと言つてフェルトを女中に縁側の方へ廻すやうに吩咐けた。

木川田は別に何とも言はずにむつゝりとしてそれを見てゐた。何となく氣になるらしいのが小鹿野にもよくわかつた。さうかと言つて一緒に出かけやうとも言ひ出さなかつた。否、その身も出かけたいはよく見え透いてゐたけれども、いくらか頑固なその性質はそれを軽くそこに打出させることからはまたけた。

小鹿野は普通な挨拶をして此方へと出て來た。

春子も別にそれを氣にも留めないといふ風で——むしろあまりにそれを氣に留めると却つて夫の重味がなくなるのを恐れるといふやうに、そこに女中が持つて來て竝べた派手な鼻緒のすがた厚いフェルトの上に平氣でその足を落して、そのまゝ畠道を小鹿野の歩いて行く方へと徐かに歩いて行つた。

小鹿野の新しい麥稈帽がくつきりと午後四時過ぎの野に光つた。

春子は竝んで歩きながら、

『今日もあそこにお泊りになるんですか？』

『いや……』

と小鹿野はどきまぎして答へたが、『何うなりますかな？』

『小川さんの許にいらつしやるんぢやないんでせう？』

『え、小川のところには行きませんが、少し他に知つてゐる奴がゐましてね……』

『おともだち？』

春子の一瞥は深くかれの胸を射るやうに感じられた。

『まあ、そんなもんですね？』

『……』春子は何か言はうとしたがよして、

『本當に、何う思つて？』

『あなた方の生活？』小鹿野は笑つて、『さつき言つたぢやありませんか。結構だつて……それで足りないんですか？ なら、もう一つ、幸福！』

『さう幸福に見えて？』

『だつてさうぢやありませんか。木川田君は女房孝行だし、自由だし、やさしいし、結構で幸福でないわけはないぢやありませんか？』

『さうですかね？』

春子は笑ひながら、『しかし、さういふ風にあなたに見えれば、それだけでも好いわけでせうね……』

『變な言ひ方ですね』

『だつて、さうですもの……やつぱり私がいつかお話したことがあるやうに、女はやつぱりひとりだといふことを今度もつくづく味ははせられました……』

『それは爲方がありませんよ。誰だつて、さうですもの……。誰だつて、二つのものがさうびたりとすぐ行くもんですか。あなたは一體ロマンチシストだ……その癖非常にレアリスチックなところもあるんだがな……』

『まア、しかしこんな話よしませうね。やつぱり自分のことは自分でするより他しかたがないんでせうね……』猶ほ何か言ひかけやうとした時、ふと後に人の走つて来るやうな氣勢がしたので、それとなく振返ると、その麥の黄熟した畠道を急いで此方へやつて来る木川田の新しい麥稈帽がそれと見えた。

春子は止むなく足を停めた。

小鹿野も立留つた。其時下りの汽車が烟を靡かしながら長々とその向うを通つて行つた。

二三

『僕も行つて見やうと思つて出て来た』

急いで駆けて来たので呼吸を烈しくつきながら木川田が言つた。

春子も小鹿野も黙つてそのまゝ歩き出した。

小鹿野は一種異様なつまらなさを感じた。それはかれと春子との間には別に大した話があるのではない。秘密なんかあるのではない。しかし二人で歩いてゐるといふことの上には何となく異性同志の面白さと自由さが感じられた。別にラブ・ストウリイでなくとも、また二人は二人で話すやうな話を持つてゐた。

春子もやつぱりさうであるらしかつた。何も出かけて来なくとも好いのに——家にしつこんでちつとして本でも讀んでゐれば好いのに、その方が何んなに男らしくつて好いか知れないのに……。で、二人はひとり手に口を噤んでしまつた。

五六歩こんな空氣で歩いた。

『海岸へでも行くのかね?』二人で並んで海岸を歩くのだらうといふ想像が、たまらなく木川田をくわつとさせて、それで飛び出して来たのであるだけ、さうした言葉がすぐその口から出た。

『別に……』

春子は冷靜に言つた。

『だつて、そのつもりでやつて来たんだらう……』

『別に、さうでもないのよ』

春子は同じ冷静さをくり返した。

『だつて、汽車の時間はまだ早いぢやないか？』

『でも、別にそんなこと何にも考へてゐるやしないのよ。ただブラブラ歩いて来ただけよ』

で、三人はだまつた。春子を真中に、右は小鹿野、左は木川田といふ順で、橋の方へと行く路を並んで歩いて行つた。犬の頭のついた太いステッキを木川田は大きくふり廻した。

話の種は、いくらも澤山あるけれども、小鹿野はそれは持出さずに、

『もう、螢が出たらうね？』

『うむ……』

木川田はぼんやりした調子で答へた。で、春子が、

『でも、澤山はるませんね。何うかすると、庭のところの一つ二つ飛んで來ることがありますけども

……』

『さうですかね。そこらにはいくらもゐるさうな氣がしますがね……』

かう言つて小鹿野はその前の橋のところを指さした。そこには草の緑が一杯に茂つて、葦なども一二本は雜つて生えてゐるらしく、底の方では折れ曲つて流れて來た小さな川が咽ぶやうなせゝらぎを立ててゐるのだつた。

『もとはゐたんださうですけどもね……。此頃非常に少くなつたなんて、此間も村の人が言つてゐましたよ』

『好いもんだがな！ 螢は！』

『本當ね……。私なんか覺えがあるわ。私が十二三の時分、田舎の叔母の家に行つた時、螢が澤山に飛んで、綺麗なものだと思つたことがありますよ。ちやうど今時分ですね。麥の熟れる匂ひつて、好いものね。いかにも田舎々々してゐるものね』

『本當ですね』

『あ、さう言へば、急に子供の時分のことになつて來た！ あの時分は何も知らなかつて無邪氣でよかつた！』結局話題は違つても、二人だけがかうして長くつゞけて話すやうになつた。木川田は頻りにステッキをふり舞はした。

一四

かれ等はそれでも海岸の方へと歩いて行つた。

木川田は此頃讀んだフランス物の話を始めた。ヴィルドラックだの、バルビユスだの、ジイドだのボルドウだの……。話し出すとかれはかなり雄辯だつた。單純な變化のない、内部が空虚になつてゐる

るやうな聲が長い間續いた。

それが春子に退屈であるのが小鹿野にもよくわかつた。小鹿野は眞面目にうなづいて耳を假してはるたが、つとめて話を別な方へと持つて行かう持つて行かうとつとめてゐた。

春子はだしぬけに言つた。

『何うしてかう人生は退屈なんでせうね……』

と木川田は急に睨むやうに其方を見た。

『つくづく思ふわ。私なんかとても一ところにちつとしてゐられないやうな性分ですわね……。何んな

ことでも、すぐあくびが出て来るんですもの……』

『何うも爲方がないね、一體、人生といふところが退屈なんだから……』小鹿野は言つた。

と、木川田は長々と話しかけてゐたジイドの小説の話をよして、

『一體、女はぜい澤だよ。人生に退屈するなんて言ふことは、それは男の言ふことだ。女はその口眞似をしてゐるんだよ』

『それはあなたに言はせれば、さうかも知れないけども、あくびが出るといふことはつらいことね。

何うもしやうがないんですもの……。戀愛もあくびが出るやうになつてはおしまひだつていふ言葉があるけども、本當だと思ふわね。私、男には女にあくびをさせないぐらゐな腕を持つてゐて欲しいと思ふ

わ

『女から言はせればさうでせうね』

小鹿野は曾てそのあくびについて春子と話した事を思ひ起した。かれはその時、退屈といふことについてかなり種々なることを言つた筈だつた。

『だから、男は事業をしたり本を讀んだり物を創作したりするんぢやないか。そのあくびがそれをさせるんぢやないか。あくびがあればこそいろいろなものが生れて来るんだ……』

『まア、あくびの講義はたくさんよ』春子は堂々と正面からやつて來さうな木川田の言葉の腰を折るやうにして遮つて、『兎に角あくびをさせないだけの腕が欲しいわね。男は女は物質的だなんてよく言ふけども、そらあの獨歩といふ小説家ね、あの人なんか女の心には算盤ありあくびありなんて言つてゐるけども、そんなことあたり前よ。それを問題にする方が意氣地がないのよ。ダイヤも欲しいし、芝居も見たいし、着物も着たいのはきまりきつてゐる事ぢやない。私なんか、そんなことを男が言へば、そんな吝な奴相手にしないわ。女の心なんて、さう安く買へるもんぢやないんですもの……。買へると思つてゐるのが間違つてゐるんですもの……。高價けりや高いだけ女の心に價値も出て來れば、光も出て來るわけぢやないの?』

『それはさうだらうな——』笑ひながら小鹿野は相槌を打つた。

『誰か私にあくびをさせないやうな男はないかしら？ ね、小鹿野さん。私、これまで世の中を通つて来たけど、ぢきあくびが出て来るんで困るのよ。何うしてかうなんでせうね。私が変わるのかしら。でも、ひとり手に出てくるんだからしやうがないわね』半自分をも嘲るやうな調子で突放すやうに春子は言つた。

一五

しかしやつぱり人生の事は女にはわからんよ。すぐさういふ風に主觀的になつて了ふからね……』木川田は言つた。かれは人情的なことには餘り深く入つて行かないけれど、理窟めいたことにはいつもかなりに饒舌だつた。女の主情的なことについて同じ調子でかれは長々とはじめかけた。

『しかし、女だつて、あくびばかりしてゐてはつまらないわ。はりつめた生活を送りたいわ。それは男と別に違つたところはないと思ひますね……』

『それはさうとも……』

小鹿野は春子に肩を持つやうにして言つた。

『それはね、私なんかあくびのしつゝけをして來てゐるんですもの……。よく世間の女の人はあゝしてあきすにぢつとじてゐると思ふのよ。家庭といふところは何う考へて見ても人間を腐らして了ふ

やうなところね。やつぱり制度がわりいんですかね……』

『さういふところもあるかも知れないね。日本の家庭制度は封建時代の遺物といふ形がありますね……』

……』

『だから世間に出て大勢の人たちにまじつてゐると、ほつとするのよ。こゝから銀座あたりに出て行くと、自由な世界に出て来たやうに生々しますからね……。それといふのも、私の前生涯がたゞつてゐるんですね。何しろ十年も牢獄の中にあるといふやうな生活を送つてきてゐるんですから……。あくびしながら、十年も子供を生む機械になつてゐては大抵あきあきして了ひますからね。これはとてもたまらない、體がつゝかないと思ひましたよ。いつかもお話したけど、娘時代にはロマンチックなものばかり読んで、世間は百花が亂れて發いてゐるやうなところと思つて、純な心持で出て來たんですからね。ところが何うだつたでせう！ 本に書いてあつたりしたことは丸でうそぢやないの。虐待と玩弄と壓迫とときありやしないぢやないの。私、今でもその時分の純な心持を考へると、涙が出るやうな氣がするんですもの——』

『やつぱり初めがわるかつたんですね』

『さうかも知れないわね……』話が理窟を離れて來たので、木川田はつまらなさうにステッキを振り舞はしてゐるが、そんなことは眼中にないといふやうに、『私なんかさうめぐまれて來てゐるとは思へま

せんね。その代りその壓制と牢獄との十年は無事でしたわ。兎に角一人のまじめな細君でもあり、好い母親でもあつたんですの……。ところが、それから丸で何の武器もなしに、裸で世の中に出て行つたやうなものですからね……。小鹿野さん、女ツてやつぱり男の保護のもとにしなければ、十分にそのねうちを出すことが出来ないものなのかしら？」

『そんなことはないでせう？』

『何うも私にはさう思はれてしやうがないわ。でも、壓制はこりごりですからね。所有されるといふことぐらゐいやなことはありませんからね……。何處迄も自由だけは持つてゐたいですからね……。』

『好いちやありませんか？』

木川田はだまつて、やつぱりステッキを振舞はして、さうかと言つて先に出て行くといふでもなく、春子と並んで徐かに歩いて行くのだつた。小鹿野は小鹿野で、男といふものをいつまで経つてもつかむことの出来ない春子のことを頭に浮べつゝ、黙つて並んで行つた。美貌を持つたがために落着いてゐられないやうな女の生活、始終もえずにはゐられないやうな女の生活——そんなことを考へてゐる間に路は町から疎らな松林を通りぬけて、汀線に寄せる波の美しく打寄せてゐるのを眼にするあたりまで來てゐた。

一六

海岸に行つてもさう大して面白いこともないので、三人はすぐ引返して來た。木川田がゐるために、話が話にならず、てんでに思つたことが言へないといふ風で——言へないくらゐなら停車場に行つて了ふ方が好いといふ形で、たゞ通り一遍の話をしながら、それでも並びながら歩いて來た。

『今日おかへりになるの？』

春子は言つた。

『成るたけおそくなつても歸りたいと思つてゐるんです。宿に荷物は置いて來てゐますから、ちよつとは寄らなくちやならないけれど……。』

『今夜は宅へとまつてゐらつしやいませんか……。こんな狭いところですけども、おやすみになるぐらゐのところはあるのよ……。』

『ありがたう！』

小鹿野は笑ひながら言つた。

『ね、さうなさい、ね？』

『しかし今日は歸りませう。何しろ二日家を明けたわけですからね、またその内來ますよ……。兎に

角お目にかゝれてよかつた……。今度はもう少しゆつくりするやうにして來ますから……」

『好いぢやありませんか』

木川田も横から言つた。

『ありがたう……君もまた東京に出ていらした時には、邊鄙なところだけでも、寄つて呉れたまへ』
そんなことを言つてゐる中に、かれ等は停車場へとやつて來た。しかしまだ時間が三十分あるので待合室でその間待つことにした。

『もう好いですよ』

『まア……』

『本當に、見送つてなんか貰はなくつても好いんですよ』

『まア好いぢやありませんか』

春子は言ひたいこともあるけれども、思ふやうにならないといふ風で、『いつれまた東京に行つたらうかがひますから……』

『本當に一緒に來て下さい……』

さうかうしてゐる内に、時間は経つて行つた。

別に多きを望んでゐるわけではない……。たゞ逢ひさへすれば好い……。かう思つて來たけれども、

それでもこのまゝあつけなく別れて了はなければならぬことを考へると、何となく憂鬱な心持になつた。春子が今の生活に安んじてゐないらしいのはそれはわかつてゐるけれど、しかも結局は何うにもならないのが悲しかつた。従つて木川田と一緒にならない以前のこと——春子が度々小鹿野の家に来る時分の事がそれとなくはつきりと思ひ出されて來た。人生は思ふやうにならないことが多い。火花を散らすやうな心持は持つてゐても、その時の具合で、何うにもならない場合が多い。尠くとも自分ならかの女にあくびをさせないくらのことは出來ると思ふのに——こんなことを考へながら、小鹿野は何遍となく時計を出して見た。

『本當にもう好いですよ』

『折角來ていたゞいたのにね。何にもお構ひ出來なくつて、非常に失禮しました……。これにこりずに、またいらつして下さい……ね、ね?』

『え、ありがたう』

『それぢや。こゝで失禮いたします……』改札口で切符を切り出したので、かう言つて春子は別れをつけた。

木川田も何か言つたやうだつたが、それには耳も留めずに、切符に銚を入れて貰うとすぐ、すたすた向うに階段をのぼつて行つた。

ブリツヂを渡つて一步々々下に行つた時には、小鹿野の心は半ば佗しく半ば得意だつた。(何だ？ そんなこと問題にする必要はないではないか。お前にはお弓があるではないか。他の女房なんか何うでも好いではないか。まだ人生だつて老境に臨んだわけではない。爲事だつていくらでも出来る……戀をしやうと思へばあらゆる女がすべて眼の前にある) いくらか打突けたやうな調子で、ステツキをコツコツ言はせながら、かれはじつとそこに立つてゐた。

そこに上りがやつて来た。かれはすぐにそれに乗つた。

別に何事もなかつた。二三分の後にはかれはさつき小川とわかれた停車場に行き、そこでまたブリツヂを元の方へとわたり、石山を切り開いたやうな細い道を通り、角の旅舎でかれを待つてゐるお弓の許へと歸つて行くことが出来た。實際別に何事もなかつた。ところがこれももし一汽車後れたなら、かれはどんなに驚かなければならないか知れないのであつた。何故なら、かれはそこにかれの總領の娘を見出したであらうからである。今年十七になる幸子が、二十一二ぐらゐになるハイカラな背の高い令嬢風の娘と何か頻りに話しながら、そのブリツヂの階段を下りて来るのを見出したであらうからである。そしてもしさうだつたとしたらかれ等はおや！ と叫ばなければならなかつたであらう。父親も娘も共に

顔を赤らめなければならなかつたであらう。否、父親の方は現在女と一緒に歩いてゐるといふわけでも何でもなく、證據をそこに握られたといふのでもないから、ちよつとはどきまぎしても、直ちにその驚いた心と赤めた顔とを恢復して平氣にそれに対することが出来たであらうが、娘にはそんな餘裕はなく、大してびくつかなくとも好いことなのだが、しかも學校にゐる身で、學校にゐる振をして、勝手に此處に來たといふことについて、非常に大きな責任を感じて何うしたら好いかとはらはらしたであらう。しかし幸子にしてもさう長い間度を失つてはゐないだらう。すぐその冷靜さを恢復しただらう。そしてあとで叱られることは止むを得ないとしても、兎に角一緒に歩いてゐる令嬢風の娘を紹介することを忘れなかつたであらう。『父さん、この方山瀬さんです！ 今日一緒に此處の別荘につれて來ていた、いたんです……』と言つたであらう。そしてその一言で、小鹿野はそのハイカラな娘が金持の山瀬の娘であることを知つたであらう。『ホ、かういふ娘か？ 美しいので評判なのがこの娘か。成ほど美しい。成ほど現代的美だ……。それにしても幸子はどうしてこの娘を知つてゐるのだらう。別に、さうした交際があることはきかなかつたが——) かう思ひながら、はきはきした何うしても交際上手としか思へないその娘と世間並の一言二言を取かはしたであらう。そして心の中では、幸子がかういふ年上の娘と交際してゐることの上にひとつの驚きとひとつの危険さを感じて、その自分の娘の存在の輪廓の平生思つてゐたものとは大分に相違のあることを考へたであらう。そして三人が三人とも變な位置にその身を置いたこと

こそばゆさを感じながら、その同じ上りの汽車に乗つたであらう。否、幸子は次第にその落附きを恢復して来て、今度は父親の方にその眼を向けて、『父さん、何處に來たの？』などと逆襲して來るつもりではないにしても、ひとり手にさうした言葉がその口の上つて行くやうになるだらう。そしてその次ぎの停車場で父親が汽車を下りやうとする時には、『父さん、それでは今日は歸らないのね？』など、問ふたであらう。今度は父親がどきまぎしたであらう。

一八

そして小鹿野にしても、その娘のやつてゐることの何ういふことであるか、此の海岸に來て一日を何ういふ風に送つたか、その美しい山瀬の令嬢と何うして友だちになつたか、さういふことはとてもはつきりと想像することは出来なかつたらう。それは心配はしたらう。兎に角學校を一日休んで、親に言はずに内所に出かけるといふことは好いことではないと思つたらう。家に歸つたらそれを糺さずには置けないと思つたらう。それは小鹿野は何方かと言へば無頓着の方である。女子に對しても自由な考へ方をしている。しかし普通の親と同じやうに、子女の保護といふことについてはかなり責任を持つてゐる方である。従つて運わるくそこで出會したら、一悶着起らずにはゐなかつたであらう。幸か不幸か一汽車後れた。三十分前に同じ階段をまた同じブラットフォームを父親が考へてゐたとは夢にも知らずに幸子は

そこに來て汽車を待つた。

『おそくなつたのね？』

ハイカラに髪を結つた、さう大して不良には見えないけれども、ある程度まで自由さと我儘さを持つた、その自由さと我儘さを持つたために新しさをかなり多くその周圍にそなへた山瀬の令嬢の雪子は、かう言つてそこに立つてゐる幸子の方を見た。

『え……』

幸子は點頭いた。

『氣の毒だつたのね。この前で歸れなかつたもんだから……』

『でも、まだそんなに遅くはないわ』

幸子は内心では夜になつて父母に何う言はうかなどと思ひながら、しかし軽い、何でもないといふやうな調子で徐かに言つた。

『叱られやしない？』

『大丈夫よ……』

『これまでも、遅く歸つて行つたことなど何遍もあるの……』

『それはあるわ。友だちの家に行つてピアノを弾いておそくなつて了つたことなんかよくあるわ』

『お父さんの方がやかましいんでせう？』

『……………』

幸子はだまつてゐた。それよりも幸子に取つては、山瀬の別荘から街の方へと出て行かうとするところにある小さな貸別荘でのが氣になつた。尠くともそれはかの女に取つて限りなくひろく展開せられた世界だつた。善いとかわるいとか言つて單純にきめて了ふことの出来ないやうな境だつた。

『母さんは、そんぢやないの？』

雪子はその話をやめないのよ、幸子は爲方なく、

『父よりも母の方がやかましいのよ。おそく歸ると、いろいろなことを言はれるには言はれるのよ』

『何んなことを…………？』

『でも、何でもないので。たゞ何うしたらうと思つて心配するだけよ』

『それはさうね…………』

それで話は絶えて二人はだまつて了つた。幸子はいくらか疲れたといふやうにして、學校行きの、何方かと言へば佗しい姿をそこに置いてあるベンチに寄せた。何となく佗しく氣が重々しかつた。見るべきものでないものを見たやうな氣がした。よせば好かつた。誘はれても來るのはよせば好かつた。さうははつきりと思はないまでも、それに近い心持がかの女の勞れた體をめぐつた。それとは違つて雪子は

機嫌が好かつた。腰をかけてはぢきまた立つてレールを覗いて見たりなどした。

一九

幸子の頭には二三日前に雪子から手紙が來て、海岸の別荘に一緒に行かないかといふことを言つて來たことが繰返された。一も二もなくかの女は喜んでそれに従つた。かの女は約束した停車場で雪子と落合つて、今朝の九時の汽車でこゝにやつて來た。かの女はそこに立派な別荘——町とは反對の方の山に凭つたところにある綺麗な庭を持つた別荘を發見した。そこからは青い海が見え、波の音がさう喧しくない程度できこえた。松の疎らな林がすぐその下にあつた。

そこでのかの女は雪子にいろいろにちやほやされた。羊羹だの土地の名物の饅頭だのが並べられ、晝には町から取つたらしい料理が澤山に出た。いかにも金持らしい豪華の生活で、ちよつとした置物なども目を睜はるやうな金がかゝつてゐるのをきかされてびつくりしたりした。つゞいて寫真帖などが展けられ、雪子のいろいろな扮装をしてとつた姿などを見せられ、その父母の並んで籐椅子に凭つた寫真を見せられ、つゞいて大學帽をかぶつた若い人たちの寫真を二枚も三枚も見せられ、最後にかねてきている——恐らくかの女以外に誰も知つてゐるものはないであらうと思はれる雪子の戀人の姿をそつと見せられて、幸子は變な氣になつた。勿論、雪子との交際は、さう舊いことではなく、初めはやつぱり同じ

クラスの友達と一緒に行って見ないといふので誘はれて郊外の大きな邸に雪子を訪問したのであつたが、その明るい、好い加減に話のうまい、それで何處かに静かな憂鬱なところがあるやうな調子に引き寄せられてたちまち二度か三度行く中に十年も交際してゐるやうな友達となつたのであつた。

幸子は家庭以外に今まで知らなかつたいろ／＼な世界を雪子を透してそれを知ることが出来るやうな気がした。かの女はそこに戀愛の世界を見出した。今まで常に遠くにしか見ることの出来なかつた大學生などの世界に一步近寄つて行つたことを感じた。尠くとも幸子のあこがれの世界、家庭と學校とばかりゐるはとも見ることも出来ない派手な花やかな世界をそこに見出した。否、そればかりではなかつた。金持の家庭などといふものは普通と違つて、わるく道徳に爛れてゐるやうなのをそれとなく感じた。雪子にしても、自分の父親の妾のやうになつてゐる藝者あがりのいきな女の寫眞を取り上げて、『これは父のおもひものなのよ。あなた何う思つて……。好い趣味とは思へないでせう……。何うしてこんな趣味が好いんでせうね!』などと言つた。かと思ふと、雪子の腹ちがひの妹になる十くらゐなる可愛い子の寫眞を見せて、『これは家にゐた女中が生んだんですけどもね。母さんが可愛がつて育てゝゐるのよ。憎氣のない子でせう!』などと平氣で言つた。幸子は自分の生立つた家庭に比べて、かうしたところは何といふ自由さを持つてゐるのだらうと思つた。それから比べたら、かれ等の家庭は何んなに難かしいだらう。またどんなにさびしいだらう。それは平和には平和にしても、ピアノ一臺あるではなし、父母はまじめな顔をして、婦人向きの雑誌を幸子たちが手にしてさへ、それをやかましく言ふくらゐにむづかしい家庭だつた。それは父親も今から十年も前には藝者に關係して、母親と争つたりなぞしたこともあつたのを幸子は幼な心に覺えてゐるが、しかもこの頃は大抵家にゐて、難かしい顔をしてゐることが多いのだつた。それから比べたならこの家庭などは何んなに自由で且つ明るい家庭だらう、などと幸子は羨ましく思はずにはゐられなかつたのである。

二〇

幸子はそこで二三時間を遊んだ。そしてたうとうその大學生の來てゐる下宿へと雪子に伴れて行かれたのだつた。恐らく小鹿野が見たらびつくりせずにはゐられなかつたであらう。しかし幸子はそれを別に悪いとも何とも思つてはゐなかつた。かねて雪子から聞いて同感してゐただけむしろそこに伴れて行かれることに一種の興味を感じてさへゐるのだつた。

『ちきななのよ……。すぐそこよ……。ね、ちよつといらしつても好いでせう?』

かう言つて軽く雪子は幸子を誘つた。

『え……。』

『何でもないのよ……。たゞちよつと行つて來るだけよ』

雪子はよく此處にやつて來るのだつた。しかしかの女がその大學生の木村を見たのはまださう大して前ではなかつた。昨年の春あたりだつた。雪子はおれをかの女がよく母親に伴れられて行く郊外の親類の家で知つた。

それは大學生たちが必至になつて勉強してゐるやうな家だつた。それはその親類の持家で、ちよつと静かな、街道に面してゐたけれど、樹が深く繁つて、いかにも若い人だちの勉強するのに適したやうなところだつた。雪子は従妹になるその家の政子といふ、かの女よりは二つほど年下の娘と一緒に、その大學生だちの留守の時にそつと行つて見たのだが、それがその戀を展開させる始まりとなつた。勿論その時には木村も誰もゐなかつた。室がたゞ亂雑に取散らされてあるばかりだつた。本などが一杯にあたり取散らされてあつた。従妹の方は平生その大學生の生活を見馴れてゐて別に何とも思つてはゐなかつたけれども、雪子にはその一室のさまが非常に物めづらしく感じられた。かの女はそこに本當に若い人たちの匂ひを嗅ぐやうな氣がした。雪子は何方かといへば、社會には出てゐた方だつたけれども——音樂會だの芝居だの、宴會だのによく母に伴れられて行つたけれども、またさうしたところでつくわす若い人だちをも多く目にしてゐたけれども、大抵はいやに氣取つたり、頭をわけたり、人の見えぬところきざにおめかしをしてゐるやうなものばかりで、ぢき反撥して了ふやうな人だちが多かつた。何うして母親などはさういふ人だちのゐるところにばかりかの女を伴れて行くのだらう。あゝいふ人だち

が母親にはよく見えるのかしら？ あゝいふ人だちが結局は自分の相手になるのかしら？ もつと男らしい人——財産だの名譽だのに捉えられない人、さういふものはないものかしら？ 雪子はさういふ風にはつきりと思つたわけではかつたけれども、しかも何年間そんな心持でゐたかしのだつた。雪子には美しく粧飾された室や、高價な指環や衣裳などに對してむしろ反感を持つくらゐだつた。父親が今のところに邸を造つた時、かの女は十一二だつたが、『何うしてそんな大きな家ばかりこしらへるの？』と言つて皆に笑はれたことを雪子は今でも覚えてゐるが、その時分からその心がすつとつゞいてゐるのだつた。なぜさういふ風に贅澤ばかりしなければいけないのだらう。なぜもつと平民的に生活することが出来ないのだらう。すぐそこに行くのにもなぜ自動車に乗らなければならぬのだらう。こんな風に娘ごゝろにも考へて來たが、今でもその心を亡くすことは出来ないのだつた。母親は常にそれを心配して、『何うして雪子はさうなんだらうねえ？ お前さんは何うしてさう貧乏なことばかりが好きなの？』などと言つた。と、雪子は雪子で、『だつて、家のやうな生活、つまらないんですもの……めづらしいことなんか一つだつてありやしないんですもの……』いつもさうした言葉でそれに酬つた。

二一

勿論その時も誰もゐないのを知つてゐて行つたのではなかつた。従妹が行つて見ないかといふので一

種の好奇心に驅られて、そつと覗いて見るといふやうな心持で出かけて行つたのであつた。雪子は從妹のあとについて、いくらか揶つたいやうな氣分で、一步々々窺むやうにして近寄つて行つた。從妹は平氣で向うに行つたが、笑ひながら手招きをした。

近寄つて行くと、

『誰もゐないのよ!』

『誰も……』

かう言つた時には、雪子は已にその木村だちのゐる室の前のところに来てゐた。

『何處に行つたんでせう?』

從妹が言つた。

『……』

『つい、さつきまでそこにあるたのよ。私がさつきポストに行つた時には話聲がしてゐたのよ……』

『きつとその人と一緒に出かけに行つたんでせう?』

『さうかも知れないわ。きつとそこらブラ／＼歩いてゐるのかもしれないの』

かう言つたが、かれ等はすぐそこから引返して歸つて來るでもなかつた。ことに、從妹は始終來馴れてゐるらしく、そこに腰をかけて、庭に咲いてゐるいろ／＼な草花を眺めた。薔薇の大輪なのが二つ咲

いてゐるのがことに眼立つた。黄いペコニヤだのわる赤いダリアだのもその向うに咲いてゐた。

雪子もそこに身を並べて腰をかけた。

『花が咲いてゐるのね。薔薇がきれいなね。木村ツていふ人、さういふ趣味がある人なのね?』

『え、え、花が非常に好きよ。自分で買つて來て裁えるのよ。そら、此方に百合が五六本あるでせう。あれなんか皆自分で根を買つて來て裁えたのよ。去年はそれはきれいな輪の大きいのが咲いたわ』

『もうぢき咲くわね』

そんな話をしてゐる中は好かつたが、從妹が眼を室内に轉ずると同時に、雪子もそつちの方へと身を向けた。かれ等の眼には今度は若い大學生の獨身生活のさまが映つた。机の上にドイツ語の本が半分明けられたまゝ置かれてあるのと、そこに頁を切るためのしをりが挟まれてあるのと、その傍の床の間が一杯に亂雜に本で埋められてあるのと、誰が書いたのか壺に赤い花のさしてある、油繪が壁にかけられてあるのと、それに隣つてぬぎ改へたらしい着物が一枚衣紋竹にかけて下けてあるのと、また此方の方には學生の小さな机が隅に片寄せて置いてあるのと、机に添つて幅のひろい本箱が並べて置かれてあるのとが映つた。今まで誰かと話してゐたらしい形跡ははつきりと瀬戸の丸い火鉢の煙草の殻に残つて見えてゐた。

『随分、男の室ツていふものは亂雜なものね……』

『さうね』

かう言つたが従妹はすぐ折りかへして、『でも木村さんの室は何方かと言へば片ついてゐる方よ……。一體がきれいすきなんですもの……』

『さう……』

従妹が、その木村といふ大學生にわるく親しさうなのが雪子には氣にかゝつた。

『こつちにある方は何ういふ方？』

『早稻田の高等學院に行つてゐるのよ。木村さんの同じ國の人よ……』

二二二

雪子に取つてはそれは忘れることの出来ない光景だつた。かの女は今までさうした大學生の自炊してゐる室などを眼にしたことはなかつた。多くはブルジョワの息子の贅澤に裝飾された室。男のくせにピアノなどの置いてある室。でなければ洋畫などで壁が一杯に満たされてある室。さういふものを常に母親に伴れられて見飽きるほど見てゐるのであつたが、しかも一度だつてかうした簡素な、眞面目な、靜かな一室を目にしたことはなかつた。雪子はその身が無條件に引寄せられて行くやうなのを感した。他ひとは或はそれを單なるめづらしさとか、好奇心とかに歸してしまふかも知れないけれど——平生見てゐない

ので、貧しいものがブルジョワの生活を見ると羨ましく感ずると同じやうに、何不足ないブルジョワの娘がさういふ生活を見たためにちよつと珍らしさを感じたのであるといふやうに言つてしまふかも知れなかつたけれども、しかもその時の雪子の受けた感じはもつともつと深いものだつた。かの女は常に夢見てゐる、新しい生活を其處に發見し得たやうな氣がした。それでこそ因襲的でない自由な本當な生活が營まれるやうな氣がした。かの女はよく小説をベットのの中に入つてから讀んだ。その習慣はずつと幼い頃からつゞいて來たのであつたが、その讀物の内容の變化するにつれて、一層その習慣は改めることが出来ない形となつた。かの女はその一時間二時間を此上なく楽しんだ。それはあたかも百花のみだれひらく花園にでも遊んだやうな心持だつた。或は理想的に相合つたパウエルとウエルジニイとの逍遙、或は互に同じ心を持ちながら何うすることも出来ない悲しい別離、思ひもかけないうれしい戀のめぐりあひ、さういふ光景を頭に浮べながら、しまひにはつひに勞れて、ぐつすりとして楽しく眠つて行くのだつた。雪子の母親は幼い頃にも雪子が少女の讀むセンチメンタルな雜誌に讀耽つて、そのまゝ眠つて行つた頬に涙の流れたあとのあるのをよく見附けて、『雪子、お前、そんなに一生懸命になつて雜誌の小説なんか讀んでダメですよ』などと言つたものだつた。それが今でもつゞいた。かの女はそこから人生を覗いた。さういふ悲しいことや喜ばしいことや理想的なことが實人生にもあり得ることと思つた。かの女は人知れずそれに向つてあくがれた。

尠くともかの女はその理想に引くらべてかの女の周囲の若い人だちのいかに遠くかけ離れてゐるものであるかを考へて不思議にすら思つた。

ふたりきりの生活といふことをかの女は常にその念頭に浮べた。何の干渉もなく何の障碍もなくまた何の拘泥するところもない二人きりの生活——それでなければ本當の生活でないといふやうにすらかの女は常に思つてゐたのであつた。従つてかういふ簡素な、まじめな自炊生活が何とも言へずに細かにかの女を刺戟したのも理であつた。雪子は假にそこにかの女を置いて見た。

『もう行きませうよ……。歸つて來るとわるいから……。』

雪子は言つた。

『さうね……。』従妹もかう言つたが、『おもしろいものでせう？ 男の自炊生活ッて？ それは随分のんきなものよ……。此方の方の人が何でも買ひに行くのよ。葱なんかでも買つて來るのよ』

『さう』雪子は長く引張つて、『何だか氣の毒な、いたましいやうな氣がするわね。誰か來て世話してやれば好いのね？』

『本當ね……。』

ふたりはこんなことを言つて笑つた。

二三

横の方から足音がしたと思ふとステッキを持つた大學生の木村が俄にそこにその姿をあらはした。

流石に従妹もはつとしたらしかつた。何と言つても他の家に來て誰もゐないのに、縁側にふたり並んで腰をかけておしやべりをしてゐるといふことは、いくら平生馴染んでゐるにしてもどきまぎせずにはゐられないことだつた。

しかし木村はそんなことを別に問題にしないやうに、そこに見知らない美しい令嬢風の娘が慌て、そこから立上らうとするのを目にして、内心ではその娘のかねて耳にしてゐる雪子であることを感じながら、快活に打解けた風で、『ヤーこれは！』と従妹の方に向つて言つて、莞爾しながらそつちへと近寄つて行つた。

『他の留守に入り込んで來てゐるのよ……。』

従妹はその木村の微笑につり込まれるやうにして言つた。

『ちよつと友人を停車場まで送つて行つたもんですからね……。』

『屹度さうだつて今言つてゐるところなのよ……。だつて、ついさつきまであなたの聲がしてたんですもの……。』従妹は雪子の方に半ば目を移して、『従妹よ……。』

『あ、さうですか……』

木村は丁寧な挨拶して、『大變失禮しました……』

『いゝえ……』

急に顔が赧くなつて来るのを先方に見られては二重にきまりがわるいといふやうに雪子はわるくどぎまぎした。さうかと言つてそれを蔽ひかくすに足るやうな言葉も急には出て來なかつた。しかたなしにだまつて立つてゐると、木村は如才なくステッキをそこに置いて上へ上つて、『さア、お上んなさい！』と言つて勧めた。

従妹は馴れ／＼しげに、

『随分亂暴でせう？ 他の留守に入り込んだりして……？』

『何アに構ひやしませんよ。こんなひどいところによく來て下すつた……』雪子の方を見て、『さア、お上んなさい！』

雪子も従妹のあとについて兎に角もそこにあがつて坐つた。

雪子は初めて見た時から不思議にも一種身内のふるえるやうな感じを受けた。かの女はそこに色の白い、上品な顔をした、髪の毛を長くしたかれを發見した。蒼白い皮膚のわるく此方に迫つて來るやうなのを、眼の瞳の中に異性を引かずには置かない光りのかゝやいてゐるのを、中脊で、何方かと言へば瘦

せて、その言ふことがまじめな中に品の好い諧謔を持つてゐるのを發見した。雪子はこれまで何んな場所でも——何んなに贅澤な一室の中でも、また何んなに大勢の異性に取巻かれるやうな場合にも、これまでつひぞ感じたことのない一種の感じをそこに味はずにはゐられなかつた。何んな時でも大抵は唾の走るやうな氣障さをそこに感じて、異性といふものは皆なさういふものなのかしらなどとすら一時は思つて、それでわざと反抗的に、自恣的に振舞ふやうな習慣がついて行つたのだが、木村に對した時には、自分でも不思議なくらゐるに娘らしいやさしい氣分が濃かにそこに満ち溢ふれて來るのを感じた。と同時に、従妹に對する理由のない疑惑がまた急に首をもたけて來るのだつた。

木村が立つて行つて、隅に置いてある火鉢の鐵瓶に觸つて見て、茶を煎れにかゝらうとすると、『好いのよ、もう、お茶なんかいれなくなつて……』などと従妹の馴れしげに言ふのがわるく雪子の氣に懸つた。

二四

従妹はかなり度々此處にやつて來るらしく、打解けた調子で話した。

『雪子さん、何う？ かういふ男ばかりの生活も面白いでせう？』

『さうね……』

『私、さぞ自由で好いだらうと思ふの……。干渉するものがないんですもの……』

『本當ね……』

かう言つてゐながらも、雪子の觀察の眼は絶えず従妹と木村との間にそゞがれてゐた。

『でも、自由といふことも、その自由を得て見ると、餘り好いことぢやないやうな氣がしますね!』

木村は茶を淹れたのを持つて來てさつきお客に出した残りらしいチョコレート五つ六つと夏蜜柑一つとをそこに出して、『やつぱり人間には束縛といふことが必要ですな……』

『軽い束縛?』

この前にもさうした話がかれ等の間に出了たことがあるらしく、こんなことを言つて従妹は笑つた。

『それもさうだけでも……さうでなくつても束縛つていふことは必要ですな。家庭といふものはやつぱり誰れにだつてなくつちやならぬものなんです。美しい束縛なら一層結構だけでも、さうでなくつても、母親の愛などでも、かうしてひとりであると、しみじみ必要だと思ふことがありますね……。家庭破壊論者なども世間にも澤山あるし、私だつてさう思つたこともなくはないですけども、やつぱりやつて見るとダメですな……』

『だつて、かういふ生活は好いわね……。さびしくつたつて何だつて、自分ひとりでさびしいんですもの……。家庭ではさうは行かないでせう。自分ひとりのさびしさといふわけには行かないでせう。い

ろんなものが雜り合ひますものね?』

『それはさうね……。雪子は従妹の言葉の中にも木村とのある連續を想像しながら、しかもそれは少しも表面にあらはさずに言つた。

『やつぱり何方に行つても、思ふやうにはならないものかも知れませんね……。或は人間といふものはさういふ風に出來てゐるのぢやないかと思ふことさへありますよ』木村はやさしげに、『しかし、さういふ問題は我々にはまだ少し早すぎるかも知れない……』

『それはさうよ。まだ空想よ。家庭だつて親の家庭にゐる經驗しかないんですもの……。ねえ、雪子さん、だから、家庭についての經驗なんか私たちにはまだ浅いものなのよ……。何もわかりやしないのよ……』

『それはさうね』

雪子は一步を進めて、『でも、私たちの眼に映つただけでは、餘り好ましい新家庭と言つたやうなものはないやうね。平凡ね。因襲的ね。たゞ親がさうさせるから、さうなつて行くといふだけなのが多いやうね……。私などの考へでは、あれではつまらないと思ふわ。もう少し何うにかならずや新しいとは言へないと思ひますね。私だちだつて別にかうしなくつちやならないつていふわけはないんだから、同じ人生に入るなら、因襲的な形が入つて行きたくはありませんね。出來るだけ白紙であつて欲し

いわね……。白紙で入つて行つたんなら、何んなにでも責任は負へますし、また何んなつらい責任でも、力強く一つの自分の仕事として通つて行けますからね……。私、あいまいなのが一番きらひよ……。雪子は一つの感情に驅られたといふやうに——むしろ従妹があるために茲に自分の存在を明かにして置く必要にせまられでもしたやうに、かなり雄辯にその常に懐抱してゐる心持をそこに持ち出した。

二五

其時から細かいデリケートな、たとへて見れば銀線のやうな顫動でその戀が續いて行つたことを雪子は今でもはつきりとくり返すことが出来た。ことに三度目に逢つた時のこと——それは全くひとつの運命見たいなものだつた。

やつぱり叔母の家に行くために雪子はそのいつもの停車場を降りたのだが、ふつと氣が附くと、その二三步先きに、學校からの歸りといふよりも、何處か友だちのところにも行つて遊んで來たといふやうな和服姿で、新しい薄鼠色の中折にステッキをつきながら、ゆつくりゆつくり木村が歩いて行くのを雪子は目にした。

急いでそれに追つくやうにして、やつと曲り角のところまで行つた時、木村は後から來た靴の音にはじめて氣がついたといふやうにして、振返つて、それが雪子であるのにびつくりしたらしい調子でぴたりと立留まつた。

『やつぱり、あなただつたわね……』

『……』

木村は何う返事して好いかかわらないと言ふやうにちよつとどきまぎした。

『あなたぢやないかしらと思つたのよ……。それで急いで來たの……』

餘り打解けすぎたとも何とも思はずに、それがあたり前であるかのやうに雪子は言つた。

『ぢや同じ電車だつたのかしら？ あなた、どつちから來て？』

『家から來たのよ』

『それぢや同じ電車だつたんですね……。何うしてわからなかつたんでせうね……。そんなに込んでもゐなかつたのに……』

『さうね』

こんな言葉を取り交した時には、かれ等はその竝んだ姿を明るい初夏の日影のもとにはつきりとあらはしながら、枳殻の新芽の出てる垣に添つた道を徐かに歩いて行つてゐるのだつた。その道は木村に取つても雪子に取つても今までは何でもない道だつた。坂があつたり汚ない小さい町があつたりまた遠

い郊外に行く電車のレイルがあつたりする道だつた。それが今俄に二人に取つて忘れられない道となつた。

その癖、別に何か言つたのでも何でもなかつた。従妹と木村との仲を雪子が探つて見たのでも何でもなかつた。

たゞこんなことを言つた。

『この頃好い天氣ね……。一年中で一番好い時ね……。』

『本當ですね……。』

『雨は降らないし、新緑は好いし、何も彼も色がはつきりしてゐるんですもの……。秋よりも、私、今が好き——』

『僕もさう思ひますね』

『日本では春ツて言ひますけども……。春よりも今の方が好いですね。花の頃は何かそはそはしてゐて私きらひ……。』

『だから外國では春ツて言はずに楽しい楽しい May Day づて言ふぢやありませんか。郊外に出かけて行くのなんか、今が一番好いですね。ピクニックなんかには持つて來いですからね……。』

『本當ねえ！』

今度は雪子の方で言つた。従妹もその仲間に入れてゐたもどかしさが全く脱れて、びたりと二つの心が相合つたやうな氣持になつた。さうかと言つてそれ以上別に話をするのでもなかつた。ただ竝んでさうして歩いて行くだけだつた。しかもそれが不思議に二つの心を運命的に近寄せて行つた。少し來ると、つい二三日前に入れたらしい小砂利が道に一杯に敷いてあつて、それが歩きにくいこと夥しかつた。二人はつとめてそれを避けるやうにして垣に添つて歩いた。

二六

平凡な話は猶ほつゝいた。

『此頃ちよいちよいお出でになるやうですね？』

『え……。』

『つい、此間もいらしたんぢやないんですか？』

『え……。』

雪子は笑つて見せた。

『何か面白いことでもおありになるんですか？』

『さうね、ないこともないんですの！ それに、今日は政子さんにもとるた學校の音樂會の切符を買

つて貰はうと思つて……』

『なら、私も一枚買ひませうか?』

如才なく木村は言つた。

『さう……? でも、あなたなどにはさう大して面白いものぢやないでせう。何うせ、學校で慈善か何かで、お金をあつめるためにやるんですもの……。でも、いらつしつて下さる?』

『行きますとも……』

『なら、買つていたゞかなくツても、さし上げるわ……』

『でも……』

こんな話でも二人の間を忽ち近づけて行くのだつた。

また暫し黙つて歩いた。角を曲ると、敷詰めた砂利はなくなつて、その代りにまだ敷かない砂利がところどころに山を成してゐるのが眼に入つた。

雪子はたうとう従妹のことをそこに持ち出した。

『政子さん、行きますか? 此頃……』

『暫く來ないから何うしたかと思つてゐましたら、昨夜來ました……』

『よく行くのね?』

『さうでもないんですけども……』

一步深く入つて行かなければならない位置に身を置いたので、二人ともそれきりだまつた。

それから先へは容易に入つて行けなかつた。しかし雪子は何氣なく、

『叔母さんも一緒に?』

『一緒にいらつしやることもありますが……』

『繁さんは?』

『繁さんとも來ることもあります……』

それ以上別に問うたのでもなかつたけれども、敏感な雪子には、叔母が政子を木村に近づけやうとしてゐる心持と、さうした心は政子は持つてゐるか何うかわからないが、さう木村をきらつてもゐないらしいのと、木村はまた木村で政子を憎くは思つてはゐないけれども、敢てそれに向つて積極的に進んで來てゐるのではないといふことがそれとなく細かに微妙に感じられた。雪子はこんなことを言ひ出した。

『好いわね……。あゝしてひとりで靜かに勉強してゐらつしやるのは?』

『あんまり好くはありませんよ。あゝでもしなければ爲方がないからやつてゐるんですよ。それに、國の青年を預かつてゐるもんですからね?』

『私、さう言つちや變だけども、本當に、あの時ほど打たれたことはなかつたんですの？ プレイン
ライビング、ハイシンキング、——カアライルか誰かがさう言つたつて獨歩が言つてゐますけどもね。
私、目のあたりそれを見たやうな氣がしたのよ。ジエスインで本當に好かつたわ。……』

『ありがたいけども、それは買ひかぶりだ！』

『そんなことはないわ。ひとりでまじめでやつてゐらつしやるところが共鳴出來たのよ』 つか言葉
が深い交際でもあるやうな調子を帯びて行つた。

二七

従妹のつかんでゐるものよりはもつとずつと深いものを時の間に雪子はつかんで了つたのである。

ある時、おそく學校から歸つて來た繁は政子に言つた。

『今日雪ちやん來た？』

『いゝえ……』

『來ないの？』 繁は姉の顔を見るやうにして、『不思議だな……。僕あそこところ——そら坂の上の
ところ、あそこを通つてゐると、雪ちやんが通つて行くんだよ。それも知らん顔をして通つて行くんだ
よ。餘ほど聲をかけやうと思つたけど……』

『へえ——』

政子はちつと眼を睨るやうな氣持で、『人違ひぢやない？』

『だつて、いくら夕方だつて、眼があるんだもの、僕、間違ひはしないよ。それも、ひろい道とか何
とかなら、さういふこともあるだらうけども、あの坂のところなんだもの……。それに、へんなのさ、
雪ちやんだつて知つてゐて知らんふりをしたかも知れないな……』

『だつてお前、知つてゐて挨拶しないことはありやしないだらう？』

『さう思ふんだけど……。だから變だつて言ふんだよ……』

『何か考へごとか何かして歩いてゐたんぢやないの？ 私だちだつてさういふことがよくあるぢやな
いの、傍からひよつくり聲をかけられてびつくりするやうなことなんかよくあるわ』

『でも、さういふ風ぢやないんだからね……』

『それはこつちがさう思ふからよ』

『さうかしら？』

繁も別に大したことにはしてゐないので、そのまゝその話はおしまひになつた。

しかしもし本當だとすると、何うしてあそこまで來ながら家へ寄らなかつたんだらう。つれでもある
なら止むを得ないとして、ひとりで來てゐながら寄らずに行くとは變だ。それにこゝいらに知つてゐる

友達などがあるなどとはこれまでついぞきいたこともない……？ 政子はこんなことを考へたが、しかしそれ以上には入つて行かずに、そのまゝになつて了つた。
ところが、それから五六日も経たない中に、今度は母親がやつぱりその繁の會したやうなことにまた會した。

しかし、政子の母親は、そのまゝすれ違つただけにして置かなかつた。いきなり、此方から聲をかけた。

と、雪子は慌てたやうに——表面では知らずにもてびつくりしたといふやうに、

『まア、をばさん！』

と言つて近寄つて來た。

『お寄りな！』

『え、ありがたう。今日は是非寄るつもりで來たんですけどもね。お友だちの家でついおそくなつちやつて……。政子さんによく仰しやつて下さいね』

『好いぢやないの。寄つてお出でな！』

『本當に今度ゆつくり來ますわ……。今日は夕方に家に友だちが來ることになつてゐますから……。』

『さう……。』 政子の母親はかう言つたがすぐ言葉をかへて、『おつかさん別に變りはない？』

『別に……。母も御無沙汰ばかりしてゐるツて言つてゐるんですの……。父が朝鮮に行くので、人が大勢來たり何かして、忙しがつて居りますの……。父さへ立てば、ゆつくり何ふツつて言つてゐました』

『さう……。それぢやよろしくね』

で、別れたが、歸つてから、政子の母親はやつぱり怪訝さうに、

『お前、雪ちやんの友だちつて誰れか知つてゐる……。？』

『知らないわ』

政子は軽く頭を振つた。

『今までそんな友だちがあることなんか言はなかつたのにねえ——急に、誰か此方へ引越してでも來たのかしら——』 政子の母親はこんなことを言つて首を傾げるやうにした。

二八

此頃政子が滅多に木村の方に行かないので、母親は變に思つて、

『木村さん、何うかした？』

『何故？』

机に向つて何か読んでゐた政子は急に振返つた。

『何故つていふこともないけども……もとはあんなにちよいちよい行つたのに、ちつとも行かないやうだからさ……』

『私、行くわよ……。昨日も英語を見て貰ひに行つた……』

『だつて、ゐなかつたつて言つたぢやないか？』

『……』

政子が黙つてゐるので母親もそのまゝ言葉をとめたが、暫らくしてから、

『この頃、ゐないことが多いやうだね？ 何うかしたんぢやないかね？』

『何うして？』

『何うしてつていふこともないけど……』それとはつきり言へるやうなことでもないで、母親はその先きを言はずにそのまゝ濁して了つた。また暫く経つた。

『別に變つたことはない？』

『別に……』政子はさうは言つたけれども、心では木村が此頃著しく變つて來てゐるのを拒むことは出来なかつた。木村は前のやうに落付いてゐなかつた。わるくそはそはしてゐた。また學校にも減多には行かなかつた。

快活な調子で政子が話しかけても、木村はもはや以前のやうにその相手になつて笑つたり何かしなかつた。むしろひとりですごに置かれることを好むやうに見えた。

雪子がやつて來て、また二人して木村を訪うた時には、この前とは違つて、雪子が著しく木村と親しくなつてゐることを政子は見落さなかつた。(やつぱり雪子さんは交際家だ……私には一度や二度逢つただけで、とてもあんな打解けた話は出来ない……)こんな風に政子は思つた。

その時木村は何だか咳嗽が出たり體が怠かつたりして肺尖にでもなつたのではないかといふやうな話を持ち出してゐた。

と、雪子は、急にまじめになつて、

『ダメよ。何うかしてゐるのよ。海岸にでも行かなくつてはいけないわね……』

『それほどではないんです……』

『でも、それほどでないと思つてゐるのがいけないのよ。早く何うにかしきへすれば、軽い肺尖なんか何んでもないんですからね』

その言葉がわるく親しげに政子の耳には響いた。何處でいつの間にそんなに懇意になつたんだらう？ さうした隔てのない口がきかれるまでに至つたのだらう？ まだ二度しか逢つてゐないと思つてゐるのに……。

『まだ肺尖だといふわけでもないんだけど……』

木村は政子に對するとはまた違つた半ば戯れるやうな打ち解け方をして笑つた。政子は壓されるやうな空氣を感じた。

『本當にその方が好いのよ……。熱でも出るやうになつては大變ですからね……』

『まア、そんな心配をかけるほどのこともないんです……。今朝、ちよつとそんなことを思つただけなんですから……。たゞの風邪かも知れない……』

『それがいけないのよ……。そんなことを言つてゐる中に、取りかへしがつかなかつて了ふのよ……』

『大丈夫——』

ふたりは顔を合せてまた微笑した。政子は變な氣がした。何が何だかわからないやうな——自分の身の置かれてゐる位置がそれとなく顧みられるやうな不思議な氣がした。しかし政子は別に深く考へてゐるでもなかつた。

二九

戯談に言つたやうなことが理由となつて、それから一月と経たない中に、木村はYの海岸に行くこと

になつたのである。

『そんなにわるいんですか？』政子の母親は、その思ひ立ちの餘りに突然なのに、いくらか狐に魅まられたといふやうな調子で木村の顔を見ながら言つた。木村も何だかきまりがわるさうだつた。しかし木村はあまりにわるくならない中にといふことを高調して、必要なものだけ持つて、そゝくさと急いで出かけて行つた。

あとには同じ國の學生が二人やつて來て同居した。

『本當にわるいのかしら？』

行つて了つたあとでも、政子の母親はそれを問題にした。

『きつとわるいのよ？』

『だつて、熱でも出たつていふなら、海岸に行く必要もあるだらうけども、そんなこともないんだらう。變ね……。』母親にしては、いくらか政子についての考へ方を持つてゐるだけに、急に遣けを打たれたやうな不愉快さを感じずにはゐられなかつたのであつた。

『それに、海岸にでも行つたら、少しは勉強が出来るだらうつて言つてゐるわ。それもあるんでせう？』

政子の母親にしては、そこに容易にたどれない、やつとたどつて行つたとしても途中でぼつくり切れ

て了ふやうな細い心の線の微に續いて行つてゐるやうなを感じた。Yには山瀬の別荘があることなどもひとり手にそこに思ひ出されて來てゐた。しかし母親はそれを口には出さなかつた。

政子はだまつてゐた。女學校の方はもう今年ですんで、家政科の學校の方にその籍を移してゐるのであつたが、裁縫ばかりやつて一日坐つてゐるので疲れてしまふなどと言つてよく休んだ。急に萎れた花でもあるかのやうに低頭れて暮してゐるやうなことが多くなつた。一月前の快活な調子などは丸で別人のやうに感じられさへした。

『お前もたまにはYの海岸にでも行つて御覽な……。木村さんからかう言つて來たよ』ある日は政子の母親は一枚のはがきを見せて、繁と一緒にこの次ぎの日曜日にも行つて見ることにしてはと勧めた。

政子はそのはがきをひつくり返して見てゐるが、何も言はずに——行くとも言はずにそのまゝ、それをそこに置いた。

『いやかえ?』

『行つても好いけども、行かなくつても好いわ。Yの海岸なんか、そんなに好くはないんだもの——』

『それはさうだね』

『海岸なら、もつと面白いところはいくらもあるわ……』

それでその話はきれた。二三日して、母親が山瀬へ行つて歸つて來た時には、それでも政子は耳を敬だてるやうにしていろいろな話を聞いた。

『さう……雪子さん、そんなに忙しがつてゐたの……。音楽會だの、お芝居だの、バザアだのつて……。それでもゐるたにはゐるたの……。さう、これから出かけるところだつたの……。派手な模様の着物なんか着て? 何處に行くつもりだつたんでせう。さう……何處か男の人の大勢來る會か何かに行くところだつたんですつて……。? をぢさんがゐなくなると、あの人いつもさうなのよ。をぢさんがゐる中だけ猫をかぶつてゐるやうな人よ。あの人、猫をかぶること上手ですからねえ……。きつと孔雀のやうなけばけばしいおつくりをして出かけて行つたんでせう。わたし、その心持がよくわかるわ……。』いつもとは違つてひどく雄辯になつてゐる政子を母親は不思議さうにして眺めた。

三〇

小鹿野の總領の娘の幸子が雪子に伴れられてYの海岸に行つたのは、ちやうどその時分のことだつた。従つて、そこで病を養つてゐると言つてゐる木村の生活は、政子よりも、政子の母親よりも、また雪子の父母よりも、一番最初にその幸子の眼に映つたのであつた。

幸子は雪子を姉扱ひにしてゐるので、たゞその言ふなりにまかせてそこに伴れられて行つた。普通な

らば眼に餘るやうなこともたゞ見てゐるといふやうな態度でついて行つた。かの女はだまつてついて行つて、だまつてそこに坐つて、だまつて海岸を散歩して、まただまつてそこから歸つて來たと言つて好かつた。

かの女の眼にはいろ／＼なものが映つた。無條件に映つた。雪子の別荘から小さな丘の裾のやうなところをぐるりと廻つたところにある小さな漁師町が映つた。つゞいて、その漁師町の中ほどにある半ば漁師の家のやうな家屋が映つた。二階屋で、下は店になつてゐて、しかもその店では駄菓子などを賣つてゐるやうな家が映つた。そしてそこでは何う見てもきたないとか言へない四十ぐらゐの上さんが二三人の鼻たらしの子供を相手に何か賣つてゐるが、ひよいと首を上げて、そこに雪子が立つてゐるのに目をとめて急に慌てたやうにチャホヤし出したのが映つた。しかもそれが心づけを貰ふなら一錢でも餘計に貰ひたいといふやうないやに見え透いたお世辭を言つてゐるのに對して、いつもは孔雀の羽をひろけたやうな傲りをあたりに見せる習慣の雪子が、わるく小さくなつて、顔を眞赤にして、小聲で何か言つてゐるのが映つた。つゞいて上さんが坐つたまゝ仰向いて二階に聲をかけてゐるのが映つた。と、二階から階梯を踏む足音がギイギイして、そこから頭をオウルバックに綺麗に梳きつけた、縞セルの着物を着た二十四五の男が、男性にふさはしくない白い素足で下りて來るのが映つた。それは雪子が途々『ね、好いでせう？ ちよつと寄つて行つても……。折角此處まで來たんですからね……。』と説明した

親しい友だちで、そこに雪子が立つてゐるのを目にすると、急ににこ／＼し出して、そのまゝ二階へと案内するのが映つた。

『さア、何うぞ』

離れて立つてゐる幸子に對しても丁寧とその木村が誘つた。

『好いでせう？』

雪子も顔を赤くしながら言つた。

幸子は自分でも後退りしたいやうな氣がした。きまりがわるかつた。親しい友だちには違ひないが雪子のことだから、もつと違つた形での親しい友だちだらうと思つてゐるのである。異性でもさつぱりと同胞のやうに打解けた親友だと思つてゐるのである。

しかし今になつては何うすることも出来なかつた。誘はれるまゝにそのあとについて二階に上つて行くより外しやうがなかつた。今度は幸子の眼には三疊と六疊との二階が映つた。三疊の方には卓と椅子とが置いてあつて、そこに七寶の小さな花瓶に大きな白百合が生けてあるのが映つた。六疊の方には柔かなクツシヨンの長椅子が置いてあつて、そこからは雪子の別荘では丘に隔てられて見えない海が、高く低く連つた漁師町の屋根を隔て、ぐるりと取巻いて白い波の汀線を描いてゐるのが映つた。

『まア好いこと！』

何も彼も忘れて了つたやうに、幸子はいきなりかう聲を立てた。

『好いでせう?』

雪子もそこに來て立つた。

三一

木村もそこにやつて來て、向うにずつと松林の竝んでゐる方を指した。

『好いわねえ!』

幸子はまたかう繰返した。

波の寄せる音がかなり高くあたりに響いてきかれた。

幸子は暫らく見とれてゐるが、やがて長椅子の此方の方に置いてあるソファに雪子と竝んで腰をかけるながら、

『夜なんか波の音が少し高すぎるでせうね?』

敢て木村に訊くといふでもなしに、むしろ顔を雪子の方に向けるやうにして幸子は訊いた。

と、木村は快活にすぐそれを受取つて、『初めは眠られなくつて困りましたよ……。かう何か波の中に見えるものがゐるてそれが身に迫つてでも來るやうな氣がしましてね……。何だか變にさびしいもんです

ね……』

『だつて、ひとりで寝るには子守唄の代りになるなんて仰しやつたぢやありませんか?』

不用意の中に發せられたその言葉の中には、いろいろなことが籠められてあるのを幸子は感じた。幸子は此處では滅多なことは言へないやうな氣がした。

この二階の二階が漁師の家に似てもつかずに、また大學生の下宿してゐる室としてはあまりにぜいたくに飾られてあるといふことも何となくまだ世馴れない幸子の心を惑はせた。それに、普通ならば主人公が先に立つて、歡待にかゝるのが當り前であるのに、雪子は少しも氣が置けないといふやうに室の隅にある火鉢の上の鐵瓶に自分で手で觸つて見て、棚の上の四角なものを取つて、『これ紅茶でせう』などと言つて、無遠慮にその蓋をあけて、幸子のために一椀こしらへて持つて來たりなどした。

自分でも一椀拵へてから、『あなたにもあけませうね……』などとさもかの女がこの二階の主人公でもあるかのやうにのんきに笑つて見せた。

『えらい闖入者だな!』

木村はにこにこしながら言つた。

『何うせ、さうよ。……女なんて皆な闖入者よ』

かうお轉婆に雪子は言つたが、『だつて、こゝで旨いのは紅茶だけなんですもの……。お口に合ふもの

なんかありやしないんですもの……』

『さう見くびつたものでもないですよ。今日は旨いものがありますよ』

木村はにこにこしながら、向うに立つて行つて、棚から四角な箱を持ち出してそれをそのまゝ卓の上に置いた。

『おや！ これはめづらしいわね？ 何うしたの？ 誰か来たの？ 風月のカステラがこの二階にあるなんか不思議ねえ！』

雪子は幸子に一つはさんでやつて、『誰か来たの？』

『……』

『私の知つてゐる人？』

『さうね……』 木村はにやにや笑つた。

『誰だらう？』 雪子はかう言つたが、急に慌てたやうに、『政子さんぢやない？』

『……』

『さうなの？』

半ば中てられたやうな、また半ばはさうでないやうな表情を木村はしたので、一層雪子は慌てたやうに、『それぢや、をばさんと来たんぢやない？』

『……』

『さうなの？ をばさんと政子さんとふたりで来たの……』(困るわねえ——) さすがにあとの一語は雪子の口から出なかつたけれども、しかもいかにも慌てたらしい表情は傍にゐた幸子の眼にもそれと映つた。

三三三

急に話が機微に觸れでもしたやうに、表情だけが緊張して、何か言ひたいにも他人がゐるてはそれも出ないといふやうな空気があたりに漲つて来るやうなのを幸子は感じた。一室は暫し沈黙に墮ちた。

しかし伶俐な雪子はすぐそれをもとの空気に戻して行つた。

『それで一日ゐたの？』

『そんなにるやしませんよ……。さうさな、あれでも三時間ぐらゐるたかな。海岸を一廻りして、ここもあんまり面白くないわねえなんて言つて、二時半の汽車で歸つて行きましたよ』

『あなた海岸を案内した？』

『……』 木村はうやむやにごまかすやうに言つて、『なアに、ちよと向うの海岸まで行つて見ただけです……』

『政子さん、喜んでゐたでせう?』

『別に……』

木村はにや／＼笑つて見せた。

幸子がゐなければ、もつともつと言ひたいこともあるし、言はなければならぬこともある。だけれども、それも出来ないの、雪子はもどかしいやうな心持で焦々した。そればかりではなかつた。別荘を出る時には、つい二三日前に来たばかりだから、今日は幸子を伴れて行つて、すこし早く引返して来るつもりでやつて来たのであつたが、さて顔を見て見るとさうあつさり引返してしまふことは出来さうには思はれなかつた。

カステラを食つたり、別にまた木村が淹れた茶を飲んだりして——それでゐて、何となく物の行き詰つたやうな、てんでに言ひたいことが十分に言へずに、呑み込みにくいものを強めて呑み込んででもゐるやうなぎこちない一座の空氣になつて行つたが、それを何う展開させることも出来ないの、雪子は困つた。二人だけの戀の庭に多少見せびらかしたいやうな心理は働いてゐるといへ、何うして幸子などを伴れて来たのだらうとさへ思つた。

しかし雪子はつとめてそれを表面にあらはさないやうにした。(へなアに何うかなるだらう?)と高を括つても見た。暫く時間の経つまゝにまかせた。

『こゝにゐてもつまらないわね』

だしぬけに雪子は木村に向つて言つた。

『……』

『海岸にでも行つて見ない?』

『行きませうか……』

二人はさう言つたけれども、海岸になど行つて見たいのでも何でもなかつた。雪子は今度は幸子に言つた。

『こゝの海岸もぐるりと廻つて来ると、ちよつと好いのよ。それや何うせ松原しかないのだけでも、

あの向うのところがちよつと好うござんすね……』木村の方を顧みて同意を求めるやうにして、『一度は見て置いても好いところよ……』

『さう……』

幸子はその身が二人のためには邪魔な位置に置かれてゐるといふやうなことをそれとなしにその雪子の言葉の中に感じた。

雪子はつゞいて言つた。

『一緒に行きませうか?』

こゝろの珊瑚

『いゝわよ』幸子はいくらか早口に言つて顔を赤くして、『わたし、ひとりで行つて見て来るわ。そこ
から行けばぢきなんですか？ ひとりでもわかるんでせう？』

『それはわかるけども……一緒にいきますよ……』

『大丈夫よ……。ひとりぢよつと見て来るわ……』

『でも……』

『ひとりの方が好いのよ』幸子はそのまゝすばしこく階段を下りて行つた。

三三

海岸に出て、松原の中の疎らな草むらに雜つて撫子の咲いてゐるのを手で採つて見たりして、段々向
うの方へと幸子は歩いて行つた。かの女はあとに残して來た雪子だちの一室のさまなどを別に深く頭
描いてはゐなかつた。それよりも畝を成して岸に打寄せて來る波の方が却つてその興味を惹いた。

靴のかゝとも入らないくらゐにかたく固まつてゐる滑らかな平なぬれた砂の上をかゝの女は心持よく傳
はつて行つた。

岩の出でゐるところでは、そのひらたいものゝ一つに腰を据えて長い間碧の上に浮んでゐるひとつの
帆の影を眺めた。

かの女の前にはひろい世界が開けたやうな氣がした。廣い廣い自由な世界が。自分のことは自分でし
て差支ないといふやうな世界が。その身が生きるためには、家庭などに縛られてゐる必要はないといふ
やうな世界が。父母の言ふことばかりはきいてゐられないといふやうな世界が。かの女はじつと眺め入
つた。その海がさながらこれから入つて行かうとするひろい人生であるかのやうに。かの女は暫くの間
ぼんやりとそこに腰を下してゐた。

ふと氣がつくと、そこに二たりの漁師の嬢が小さなざるをかゝえて、頻りに岩からにしのやうなもの
を掘り出してゐるのが眼に入つた。

幸子は立つてその傍に行つた。

『何を採つてゐるの？』

『……』

嬢はにやにや笑つて見せた。

『そんなもの喰べられるの？』

『なアに、おめさんがたには食へねえがな……』

幸子はすぐ話を改へて、

『いゝいらに、おもしろい貝落ちてゐる？』

こころの珊瑚

『貝かな？ 何うかすると、小豆貝が落ちてゐることがあるかな——』
『何んな貝？』

『あづきつ粒のやうな、もつと小つこい貝かな。あれ、潮の加減で、時々寄せて来るで……』
そこにある赤い色をした小さな貝を幸子はひろひあけて、

『これ？』

『うんにやそれとは違ふ……』かう言つた婢は、岩から掘りかけてゐたのをやめて、一緒になつてそこらをあちらこちらと見廻した。

『今日はちよつと見つからねえ！』

『いつもは澤山あるの？』

『ひとつや二つはいつだつてねえことはねえだが……。おめさん、運がわりいかな……。この間なんか、やつぱりおめさん見たいな若い女つ子だつて、ちよつとの間にな、おめい、たくさん拾うて行つたがな……。』かう言つてやつとそこに一つ二つあつたのをさがし出して、『あ、そら、こゝにあらア？』
『何れ？』

幸子はその婢に近寄つて行つて、それを掌の上に載せて貰つた。

『あ、これなの？ 成るほどあづきつ粒ね。可愛い貝……』

『それに、これが見つかるよ、その人は運が好いつていふだよ。好い婿どんも来る言ふだよ……。』婢は半分からかひながらあは、と笑つて、『ほんまにさうぜ！ 今年この貝せ拾ふたものは、來年はきつと好い旦那さんといれ立つて来るでな』

『いろんなことを知つてゐるのね』

『だつてほんまだせ——うらやましいな、おめさん方は？』

幸子はやゝうるさくなつたので好い加減にしてほつたらかして此方へやつて來たが、それと見知つたせいか、今までとは違つて、今度は次第にその貝の多くなつて來るのを見た。幸子は一つ一つそれを拾つた。

三四

其歸り方がだしぬけであつたためか、それとも話に氣を取られて階段を上つて來る足音が耳に入らなかつたためか、幸子が上つていつた時には、雪子と木村とは、長椅子にならんで腰をかけて、いかにも自由さうに手と手とを雪子の膝の上で重ね合せたりなどしてゐた。

『おや！』

二人は急に飛び退くやうにした。

雪子はことに慌てて、

『まア、びつくらした……。いつ歸つていらしたの？ さう？ 今？ ちつとも知らなかつた！』

木村と顔を見合せて、『ちつとも音がしなかつたわね』

木村も流石にばつがわるいと言つたやうに、だまつてそのまゝ向うへと立つて行つた。

『本當にびつくらしちやつた……。あなた、そつと上つて來たんぢやなくつて？』

『いゝえ』

幸子は頭を振つた。見てならないものを見たやうな氣がした。何となく顔が赤くなるやうな氣がした。

しかしそれもほんの僅かの間であつた。雪子は巧にすぐ話を轉換した。

『何處まで行つていらつしたの？』

『ずつと向うの方まで……』

『岩のある方まで？』

『え……』

幸子もそのばつのわるさをまぎらせるやうに、紙に包んで持つて來た小さな赤いその貝をそこにひろけた。

『拾つていらつしたの？ 小豆貝ね……。』雪子は手に取つて見て、『よくあつたわね。この頃はあまりにないのよ、これだけ拾うんだつて大變よ……』

木村もそれをきつかけに、『ほ、小豆貝！ よくありましたね』などと言つて此方へと寄つて來た。と、幸子には不思議にもあらためてふたりの顔が見られるやうな氣がした。そこに何があつたかわからない。何ういふ樂しさがあつたかわからない。しかし尠くともかの女がいろいろに想像してゐた戀愛ものがそこに一つの光景を展けてゐたことだけはたしかであつた。ふたつの心が自由に燃えてゐたその光景！

幸子はちつと見入つたその小豆貝の中にその戀の自由な光景がその色彩と共に美しく展けられてゐるやうな氣がした。幸子はまたひとり手に體があつくなつて來るのを感じた。

尠くともそれが未知の世界であるだけに、また禁斷の果實であるだけに、今まで經驗したことのないやうな感情があとからあとへと幸子の體中に渦を卷いた。雪子を憎むやうな氣持もつゞいて起つて來た。幸子は低頭してだまつてしまつた。

『何うかしたの？』

暫くしてからその機嫌を取るやうにして雪子は言つた。

『いゝえ……』

幸子は單純にそれに答へただけだった。平生のやうに快活にはしやぐ氣にはなれなかつた。氣が不思議にもわるく沈んだ。今までとは違つて、雪子と木村との對話の中にも、何か氣になるやうなものが雜つてきかされたばかりではなく、その體と體との上にも何か重苦しいものが際立つてそれと感ぜられた。幸子はまたしても雪子の白い美しい肌膚と木村の暗くわびしさうな顔の表情とを別人でもあるかのやうにまざまざと眼の前に見た。しかし來なければ好かつたとも思はなかつた。たゞいつかは當然一度觸れなければならぬものに觸れたといふまではなくとも、尠くともそれに近寄つて行つたといふことを幸子はそつと心の中でくり返した。

三五

それから二年経つた同じ六月のはじめ頃に、此方の電車線から向うの電車線へと通ずる郊外の道を行つたり來たりしてゐるひとりの若いハイカラな女があつた。それは他でもなかつた。幸子だつた。

驚かるゝほどの女は大きくもなり美しくもなつてゐた。丁度あの時分の雪子と同じくらの成熟した姿と形とを持つてゐた。バラソルの水色があたりの杜の緑に際立つて映つてゐた。

かの女はもう少しさつき此方の電車線の一つ手前の驛で電車を待つた。しかしそのあたりにかの女の家があるわけでも何でもなかつた。そこに來るまでには幸子は畠の中や村に添つてつくられた路を靜かに歩いて來た。池があつた。そこに藻が浮いて花がボツボツ點でも打つたやうに白く咲いてゐた。ともすると、しんとした空氣の中で大きな鯉がけたゝましい音を立てて躍つた。さつきの躑躅が鮮かな色彩をとどころに綴つてゐた。

裏門と言つても、たゞ太い丸太を二本並べて立てたやうなもので、そこから少しの間だらだらと下りるやうになつてゐるが、かなり此方へと歩いて來たあたりからも、樹かけになつてゐる池の向う側の瀟洒な二階屋がそれと、振返られた。そこから電車線まで來る前には、幅の廣い新しく出來た大きな道があるのであつたが、そこまで出るのには、かなり路が細い上に、草がしけつてゐる露が多く、そのため足袋が濡れたり草の色がついたりホツホツ泥棒草がくつついたりした。幸子は道を拾ひ拾ひ歩いて來た。

三度目に振返つた時には、もはやそのソフトの新しく白く光つた帽子は、そこには見えてゐなかつた。

かれ等はその瀟洒な二階屋の池に面してゐる方でない方の室で、晝飯に鰻の井を取つて貰つて食つた。いつもは半ばさめてゐるのだが今日は飯がたき立であつたせいか非常に旨かつたことを幸子はくり返した。

『ぢや、こんどはこのつぎの週間の水曜日ね……』

『うむ』

髪を長くして後になでつけた二十五六くらの今年大學を卒業してこれから世間に出やうとしてゐる
寛は、にこにこしながら點頭いて、そこにコップ半分ほど残つてゐるビールをぐつと呷つた。

『君は？』

『私、ビールは澤山？ 飲んで頂戴……』

寛はまたそれをぐつと一呼吸に飲んだ。やがて、

『僕も一緒に行かうか？』

『だつて、誰かに逢つたりなんかすると困るわ……』

『……』 寛はそれもさうだといふ顔をして、『一體、K驛ツて言つたつて、その何方になるんだ
え？ 番地を知つてゐるくらゐでは、ちよつとわかりやしないぜ！』

『何でもK驛を下りて、二三町真直ぐに行つて左に入つたところで、林がある、その丁度がけのこ
ろにたつてゐるといふからわかりますよ』

『大丈夫かな？』

『大丈夫ですとも……もう私、その事件があつてから、ずつと逢はずにゐるんですけどもね……』
『でも、共同生活は今でもつゞけてゐるんだね……』

『それはさうよ』

三六

『新聞にかゝれたのは去年の春だつたかしら？』

『さう……』

『あれでも打壊されなかつたんだね？』

『いくらか意地も雜つてゐるのね？ 女の身になると、あゝいふ風に男がわるく言はれると、そのた
めにもこの戀はやめられれないといふやうになつて行くものかもしれないわね……』

『でも、ちよつと意外だつたな……。山瀬の娘ツていへば、世間に知られてゐたシャンなんだから、
もう少し何うにかなりさうなもんだと思つたな……。あゝいふ相手に何うしてさう深くなつて行つたか
と思つたな……』

『やつぱり境遇ね……。金持の家庭ツて言ふと、世間では何でも自由になるといふ風にばかり考へて
ゐるけども、存外さうでないらしいのね……。それに、お父さんが少し無檢束なのね……。随分、腹ち
がひの子なんかあるんですもの……』

『何うしてもさういふことになるんだな』

こころの珊瑚

寛は半ば微笑し、半ば考へるやうにして言った。

『つまりさうなのよ。周囲がさうだから、自分だけはもつと綺麗なまじめな生活をしやう。あんな爛れたやうな、因襲的な生活はしまい。何んなに貧しくとも、そんなことはかまはないといふ風になるのよ。わざとさういふ風にして行つたといふ形もあるくらゐよ』

『さうだらうね？』

もう少し中に入つて行くと、自分だちのやつてゐることがそのまゝ出て來さうになつたので、言ひ合せたやうにふたりは黙つて了つた。

暫くしてから、幸子は、

『私、その話はしたわね。私が雪子さんのおつかさんに逢つた話は——？ 何と言つても、おつかさんは氣の毒だつたわ。何しろ、平生一番可愛がつてゐた人なんですもの……。私あの時だけは泣かされて困つた——。おつかさんがかう言ふんですもの……。もう少し何うにかなつてゐれば、私がよくするんですけども……。あれでは何うしたつて見込みはない……。かう言ふんですからね。雪子さんのおつかさんッていふ人は金持のおくさんッていふ風な質ではないんですからね。よくわかつた人なんですから……。』

『さうかね』

寛は何か言はうとしたがよしてそのまま、立つて帽子をかぶつた。で、ふたりは池の縁についてゐる路をぐるりと廻るやうにして裏門の方へと出て行つた。

『それでは——』

『さやうなら』

ふたりはそこで別れて、それからずつとその露の多い路をひろい通りの方へと幸子は出て來たのだつた。かの女にしても考へればいろいろなことがある。こんがらかつた絲の塊の中からたゞ一筋を引つ張り出して來ただけでも、それでもすぐそつちに心が引寄せられて行きさうになるので、つとめてそれは考へないやうにして——今わかれて來た戀の場面とこれからたづねて行かうとする戀の場面との間にひとつの白いほこり道の長くつゞけられてあるのをぢつと見詰めるといふやうにして、しかも氣怠るさうに、フェルトの草履を引摺つて徐かに歩いて行つた。

——たうとう自分だつてその道へ入つて來て了つた。何うにもあとへともどることは出來なくなつた。でも、もうかうなつたもの、爲方がないわ——こんなことをぼんやり考へながら向うに見えてゐる新しい電車の停留場の方へとかの女は向つて行つた。

そこらには赤瓦で葺いた屋根だの、ガラス戸にカーテンをした文化式の家屋などが澤山見え出して来た。

果して右に細い道があつて、そこを入つて行くと、井戸があつた。そこで耳かくしにした若い細君が洗濯物をザブ／＼やつてゐる。聞くと、『木村さん？　そこです……』と頗で無造作に教へて呉れた。

その格子戸には内からかけ金がしてあつて、二三度ガタガタ言はせて見たけれど、あきもしなければ返事もきこえて来なかつた。

若い細君はそれを見てゐるが、洗濯の手をやめて、その家屋の傍に細い路のあるのを指して裏の方へ行つて見るやうに勧めた。

『お留守なんでせうか？』

『つい、さつきまでいらつしやいましたよ。いつもあゝやつて鍵をかけて置くんですから』とは言はないまでも、いろいろなことがあるのでそれで晝間でもさうして置くといふ語氣がそれとなくその言葉の調子の中に雜つて聞かれた。

『いらつしやいますよ……。そこから行つて御覽なさい！』

その若い細君は言つた。

『ありがたう……』

幸子は軽く挨拶して、その細い道を入つて行つた。すぐその路は盡きて、向うは麥畠になつてゐた。畠の向うにはくぬぎ林が竝んでゐた。

低い木戸につゝいたかなめ垣の上にひよいと幸子が顔を出すと、西日のさした縁側は丸見えで、そこに二つぐらゐるの男の兒らしい子供を相手に、髪も碌に結つてゐない雪子が頻りに下を向いて何かしてゐるのが眼に入つた。

『御免下さい！』

まさか昔のやうに『雪子さん！』と呼ぶわけにも行かないので、爲方なしに自分ではかなり大きな聲のつもりで、その『御免なさい』を三度ほど幸子はくり返した。

雪子がひよいと此方に向いて一目見たと思ふと、顔がサツと赤くなつた。

『まア！』

子供をそこに放つたらかしたまま、雪子は急いで立つて来て、その垣の裏木戸の輪かけ金を外した。

『まア、幸子さん！　こんなところに来て下すつたの！』

『表で二三度呼んで見たんですけども、かぎがかゝつてゐて明かないもんですから……』

『まア、さうなの……。ちつとも氣がつかなくつたんですよ。さア何うぞ！』かう言つて、兎にも角にも珍しい客を座敷の方へと案内するといふやうにして、『散らかつてゐるのよ』などとつゝけて言つて

そこらにだらしなく置いてあるおもちやだの子供の雑誌だのを一まとめに片附けにかゝつた。

縁側に足をだらりと下けてゐた男の兒が急に泣き出した。

『貞ちゃん、泣いちゃいやよ。今、めづらしい、めづらしいお客さまがいらしたんですからね……』
 『かう言つて雪子はそこに行つて抱いて来て、普通なら、もうこんなになつちやおしまひねとか何とか言ふところなのを、さうは言はずに、以前ならきまりがわるくつて客など勧めなかつたであらうと思はれるやうな色の褪めた座蒲團をそこに据えて、『さア、本當に……よくきて下すつたわね……。貞ちゃん泣いちゃダメよ。母さんの昔の仲の好かつたお友達が来て下すつたんだからね……。泣くと笑はれますよ。そら貞ちゃん、おとなしくするわね』頭ばかり大きくつて榮養もあまり好くないらしい男の兒を雪子は頻りになだめた。

三八

『まア、可愛い坊ちゃん！』などと言つて、用意して来た纒ばかりの土産物を幸子がそこに出してつて後までも、雪子はその落付きを恢復しないやうに見えた。

『ひどいところでせう？』

『いゝえ……静かで好いところぢやございせんか……』

『それは静かですけどもね……』あとは言はずに、少しだまつて、『でも、すぐわかりましたか？』

『え、すぐ……』

『それにしても随分久しくお目にかゝらなかつたわね』話はつゞけていたにも、子供が氣になると同時に、火鉢の火も氣になるので、次の間に繪本をあてがつて子供をだまして置いて、それから鐵瓶を下して湯の沸くやうに火を直しながら、『去年はたうとう一度もお目にかゝらなかつたわね……。何うして逢へなかつたでせうね。私は幸子さんにはもうすつかり愛憎をつかされたと思つてゐたわ……』

『そんなことはありませんよ』

『でも……あんなに大きく出されて了つたんですもの……。あれではいくら私でも手も足も出なくなつて了ひますもの……。おかアさんやおとうさんが行つちやいけないつて言つたでせう？ でも、それはもつともね。親の身にすればさう思ふのはあたり前だと思ふわよ……。』ひとりぎめにそれときめて『それにしては幸子さんは見違へるやうになつたわね』

『何うして？』

『どうしてツて、立派になつたわ』雪子は鐵瓶をかけて此方へ来て坐つて、『何うした風の吹き廻しで、こんなところに入らしたんでせうね？』

『あら、あんなこと仰しやつて？ もう前から來たい、來たいと思つてゐたのよ。一度は是非上らなきやすまなと思つてゐたんですけどもね……。何うしても來る機會が出來なかつたのよ……』

『でも、本當によく來て下すつたわねえ。もうあなたなんか振返つても見て下さらないと思つてゐましたの……。でも、汚いんで、びつくりなすつたでせう——？』

『そんなことがありますものか。理想的の家庭ぢやないんですか……？』

それを皆な言はせずに、雪子は手で押へるやうにして、『そんなことまで覺えていらつしやるの？』

『だつて、さうですもの……。』

『でも、それを言はれると、私、悲しくなるから、もう言はないで頂戴……ね』

『……』

幸子はやゝ勝手が違つてゐるやうな氣がして、つゞけて言はうとした言葉を押へた。そしてじつと雪子の方を見た。やつぱり雪子のやうな新しい女と言はれた人でも、實際の世間にぶつつかつてはその心持を永く持續してゐることが出來ないのだらうか、などと幸子は思つた。それを雪子はすぐ見て取りでもしたやうに、

『いゝえ、ね、それはね、今だつて後悔なんかしてはゐませんけどもね……。私だつて望んで入つて來たやうなもんですからね……。それは好いんですけども……。しかし、世間はさう簡單には行か

いものねえ！ 私、この一二年の間に、随分いろいろな事を考へた。それはとてもお話にならないやうなものねえ！ お話したところで、細かに細かにお話したところで、その心持をあなたにわからせることは不可能だと思ふくらゐですわね……。あなたが實際その衝にあたつても見なければ……。』雪子は立つていつて、今度は茶を淹れて、あり合せの菓子などをそこに出した。

三九

かうしてぢつとして坐つて、いろいろな話——と言つても、母親の悲しんだことだの、父親が怒つたことだの、今では勸當同様にされてゐることだの、大抵はその時新聞に出たやうな話だつたが、ふと幸子の眼に附いたものがあつた。それは他でもなかつた。雪子がまた妊娠してゐるといふことだつた。いやにやつれてゐるとは入つて來た時から思つてゐたが、まさかそのためだつたとは氣が附かなかつた。それと氣が附いた時には、幸子は變な氣持になつた。

男の兒がわるく顔が蒼白く、榮養不良のやうな格好で泣いてあとを追つたりしてゐるのもそのためだつた。

もはや幸子は二年前の女學生ではなかつた。かの女はいろいろなものをそこに感じた。理想的家庭どころか、女の誰でもが墮ちて行く筈の唯中へと雪子が落ちて行つてゐることを、もはや何うにもならな

くなつて了つてゐることを、いつか眼がさめることがあるだらうと思つて、わづかなところに望みを繋いで、切るべき縁をも切らずに母親がゐるのも結局は無駄に終つて了ふであらうといふことを幸子はひしと感じた。つゞいてかの女はかの女の今の秘密と、その秘密の當然赴かなければならない成行と、その成行がちやんとわかつてゐてもそれを何うすることも出来ないといふ上に起つて来るつらさとわびしさを感じた。

そればかりではなかつた。かの女はそこに説明したくとも出来ないやうな、何うにもならないやうな——一二年前であつたら、たとへかういふ場面に接するやうな機会があつたにしても、そんなことは少しも考へずに、もつと無邪氣で純でゐられたであらうといふやうなことがはつきりとそこに感じられた。もはやかの女はかの女の父母が考へてゐるやうな純な處女ではないと云ふことが考へられた。一步でも二歩でも深くその中まで入つて行くことの出来る身であることが考へられた。さつき別れて來た筈の面影がひよつくりそこに浮んで見えた。

表面ではしかもこんな話を取りかはされてゐた。

『まア、マザアが?』

『私は一體母よりもファザアの方が好きだつたんですけども……だから來て貰うことははじめは困つたんですけども……それでもよくやつて來るんですの……』

『まアねえ』

『お前、今になつてわかつたらう。貧しいつていふことは何ういふことかなんて言はれますの……でも、母親のめぐみと言つたやうなものは大きなものね……。私なんか昔考へてゐたやうなことは大變違ふのね!』

『さうでせうね?』

『それはね、かういふ風に考へられないことはないのよ。もうあきらめるだらう。もう自分のもとにもどつて來るだらう。かういふ風に考へて常に引つ張りつこをしてゐるといふ風に……。しかし今ではさういふ風に考へるのは勿體ないといふやうな氣がして來ました……』

『それはさうでせうね?』

『それに、孫のことなんかでも、大騒ぎをしてくれるんですもの……。ですから、この子なんか、おばアちゃん、何うしたでせう? 來ないね! などと言ふんですもの』

『まアねえ……』

『それは本當に愛情の嵐つて言つたやうなものね。母親の愛なんてあんなに強いものかしら? 私、去年の事件で、一番それが大きかつたと思ふわ……。たゞ涙をこぼしたり残念がつたりするやうなものぢやないんですもの。聲を立ててあの年寄が泣くんですもの……。涙の洪水つていふものを私ははじめ

て母親に見ましたの……』

四〇

『何うしてさう親と子との考へがさう違ふのでせうね?』

母親のことをきかされたあとで幸子は訊いた。

『やつぱり親の立場と言つたやうなものがあるのね……。それに、親の眼と子の眼とが違ふのね……。親は子のためとか將來のためとか、さういふことを考へてゐるのね。だけど子の方ではそんなこと問題にしてラブなんかしやしませんからね。第一印象でラブでも何でもするツていふ形ですからね?』

『それはさうですとも……』

『そこに違ひがあるのよ。それでいつでも私のやうな問題が起るのよ……。しかし親は子のためになるやうに、なるやうにと考へてはゐるのね。だから今になれば、あんなに反抗しなくつたつて好かつたと思ふの……。それにしても、私、情けないと思ふのは、かういふことは、昔から人が澤山やつたことなんでせう? 小説にもあれば芝居にもある……。何もめづらしいことぢやないのに、何うしてかう親と子と世間との争ひが起るかと思ふのよ……。その時はさうは思はないけども、少し経つて考へて見ると、何もめづらしいことでも新しいことでもありやしないうすものね……。私の方の生活だつて、さ

うちやなくつて? 親に反對されると、無茶苦茶に相手と離れられなくなつて、何うしても、自分で自分の生活を打立てなければならぬといふ氣になるんですけどもね? またそれを親の威力で無理にやつたところで、さうした結婚生活は旨く行きつこはないんですけどもね?』

『それはさうですとも……』

『それに、今日から振返つて見ると、かういふ心持が一番旺盛だつたわ。そんなブルジョワなんかの生活に生きたくない。私は木村が貧しいからラブしたんだ。私の眼の前に常に映つてゐるやうなブルジョワの青年でないからラブしたんだ……。何でも好いわ。私は私の行く道を行くわ。親だの、親類だの、世間だの大きなおせつかいだわ。見ていらつしやい、今に私たちは私たちの本當の新しい生活を築き上げるから——。かういふ心持が随分盛だつたわ。私たちの戀には、第三者から一本も指でもさして貰ふまい……。さういふ強氣だつたのね』雪子はため息をつくやうにして、『でも、強氣の裏はすぐ弱氣なんですからね。表面に強いだけそれだけ裏面に弱いからね。さう言ふと、私、幸子さんから、もうそんな風になつたツて言はれるかも知れないけども、今ではもうその時のやうな元氣はないのよ』

『何うして?』

『そら、さう聞くでせう? 幸子さん、だつて、しやうがないのよ』

『何うしてでせう?』

こころの珊瑚

『それは話ではわからないわねえ！ 自身でやつて見なくつちや……自身でその巴渦の中に入つて見なくつちや……。自分たちの生活だ！ なんて、立派さうなことを現に私も言つてゐたし、それを實行もして來たし、これからも實行して行かうとしてゐるんですけどね。それは私だちが二三年前に考へたやうな、そんな抽象的な、感情的なことぢやないんですからね……。それこそひとつとつとつ嚴かな事實となつて眼の前にせまつて來るんですからね。楽しいフアンダジイや何かではないんですから。何んなことでもして、それをつきぬけて行かなければならぬですから……。私、それを考へて、幾晩も幾晩も眠られないやうなことがありましたのよ。親と子の争ひなんか、それから比べると何でもないッていふ氣がしますよ』

四一

二人の生活が思つたやうなものでないことを、木村が今だにどこにもつとめずにぶら／＼してゐるといふことを、別に女があるといふほどではないにしても兎に角さうした關係を常に起し易いのでそのためにも雪子が始終苦しんでゐるといふことを、母親が父親に内所で訪ねて來て呉れるばかりでなく、月の會計のことなどにもきまつた金を出して呉れるのでそれでかうして暮してゐられるのであるといふことを幸子はやがてそこに發見した。勿論それはさうはつきりと詳しく話してきかせたといふわけでは

なかつた。たゞ話してゐる中にさうしたことがひとり手にわかつて來たのだつた。

両親の生活にはとても眼をつぶつてついて行くことが出來なかつたと一方では言つてゐながら、一方ではやつぱり両親でなければ本當のことはわかつて貰へないといふやうな言ひ方を雪子はした。

『戀愛生活といふものはかう言ふものなんでせうね。争ひに争ひをつゞけた上にやつとさうした生活らしい空氣が出來て行くんぢやないかと思ふの。やつぱりひとつの受難ね』こんなことを言つて雪子は例のいつもの口を曲げるやうにした。

『でもさういふものの上に築き上げた生活でなくつては、本當に新しい生活とは言へないんぢやないでせうか？』

『それはさうかも知れませんわ……』

『でも、變ね、私、變な氣がするわ』幸子はちよつとだまつて雪子の顔を見つめてゐたが、思ひ切つたといふやうにして、

『だつて雪子さんの口からそんな言葉をきかうとは思ひもかけなかつたんですもの……。何んな生活でも自分で打ち立てた生活！ さうぢやないんですか？』

雪子はかう一步突込まれて、

『それはさうよ。今だつて、私、さう考へてゐないことはないのよ……。しかし、世の中に出たと出